

令和7年度

山形県私立幼稚園・認定こども園協会
紀要
(第55号)

公益社団法人 山形県私立幼稚園・認定こども園協会

目次

教育研究委員長 挨拶	1
------------	---

第1編 研修会報告

設置者・園長等研修会	
第1回	3
第2回	7
第3回	25
教職員研修会	
〈全般向け〉	
第1回	28
〈若手リーダー向け〉	
第1回	32
第2回	36
〈中核・専門リーダー向け〉	
第1回	40
第2回	44
〈専門領域〉	
保健衛生・安全対策	48
食育	50
新規採用・若手教職員等研修会	54
幼児教育研修大会	58
後継者養成講座	59

第2編 個人研究・共同研究発表

山形地区	南山形幼稚園	66
村山地区	認定こども園寒河江第二幼稚園	73
米沢地区	米沢西部こども園	84
置賜地区	認定こども園小松幼稚園	92
最上地区	新庄幼稚園認定こども園	100
鶴岡地区	城南幼保園	106
酒田地区	アテネ認定こども園	115

第3編 教育研究活動報告

研修事業実績	125
教育研究会部員一覧	126
教育研究委員会の活動記録	127

教育研究委員長挨拶

一人ひとりの「こどもがまんなか」をまもる質の高い幼児教育を
～社会全体でつむぎ未来へつなぐために～

教育研究委員長 後藤 裕美



今年度もこの紀要の報告にある通り、沢山の研修会が行われました。私達、山形県私立幼稚園・認定こども園協会の教育研究委員は、現場の先生方が主体的に学べる場を持てるよう研修内容を企画・運営しております。どの研修を受講しても、こども理解が根底にあり「こどもがまんなか」であることがわかっていただけたのではないのでしょうか。

生活や遊びに主体的に関わり、どんなことを学んでいるのかを読みとることが保育者の役割です。主体的な遊びになるようにまず必要なものは環境です。今日のこどもの姿はどんな姿だったか、保育環境はどうだったか、保育者の関わりはどうであったか、ドキュメンテーションや語り合い等で振り返って評価し、次の保育に活かすことが、保育者の大きな役割です。幼稚園教育要領や幼保連携型認定こども園教育・保育要領を正しく理解したうえで、各園の教育目標のもと、先生方自身も保育に主体的に関わり、こどもたちと一緒に作っていく毎日の生活や遊びに幸せを感じ、自己肯定感を高めてほしいと思っております。それを積み重ねることで保育の質向上にもつながっていきます。全日本私立幼稚園幼児教育研究機構が開発した公開保育を活用したECEQ[®]は、保育の質向上を目指し、STEP1からSTEP5を通して、PDCAサイクルを回しながら、同僚と主体的に保育を語り合い、自園の良さや課題を共有し合える場になります。ECEQ[®]を実施する場合は、ECEQ[®]コーディネーターが公開園に寄り添ってお手伝いをさせていただきます。ぜひ、ECEQ[®]を活用し、こどもと共に主体的な保育者を目指してほしいと思います。

少子化やAI化が加速し、多様化するこどもや家庭環境など、取り巻く環境は目まぐるしく変化しています。こどもたちの人格形成に大きく携わる者として、こどもたちの姿から学び、成長し続ける保育者でありたいものです。

最後に、研修会を開催するにあたり、教育研究委員の先生方、各地区の研修研究担当者の先生方、事務局のご尽力に心より感謝申し上げます。



第 | 編

研修会報告

第1回設置者・園長等研修会

期 日 令和7年5月16日（金）
会 場 山形ビッグウイング（山形市）
記録者 学校法人光明学園 認定こども園月かげ幼稚園
園長 瀧口 宗紀

【概 要】

テーマ 職員給与・人員配置の公表義務化について
演 題 経営情報の見える化と処遇改善一本化対応セミナー
講 師 株式会社ゆびすいコンサルティング
リーダー/中小企業診断士 本杉祐也氏

【内 容】

1 保育の見える化について

(1) 子ども子育て支援法改正と見える化

令和5年8月28日「子ども・子育て支援制度における継続的な見える化に関する有識者会議」報告書・概要

<目的>

○幼稚園・保育所・認定こども園等の施設・事業者の経営情報の公表やデータベース化等の継続的な見える化の仕組みの構築を進め、処遇改善や配置改善等の検証を踏まえた公定価格の改善を図ることを主たる目的とする。

○加えて、行政機関においては、幼児教育・保育が置かれている現状実態に対する国民の正確な理解の促進、社会情勢や経営環境の変化を踏まえた的確な支援策の検討、経営情報の分析を踏まえた幼児教育・保育政策の企画・立案等の実現を目的とする。

○また、情報公表の充実を図ることにより、行政機関のみならず、保護者や子育て家庭、保育士等の求職者の意思決定の支援や施設・事業者の経営分析・改善の促進、また、研究者による学術研究や政策提言の活性化等、幅広い関係者の利益への波及的な効果も期待できる。

上記の目的に向け令和7年4月1日より経営に関する情報の報告及びその公表が行われる



- ① 対象：施設型給付の施設（幼保連携型、幼稚園型、保育所型、幼稚園、保育園）
地域型保育給付の施設（小規模保育、家庭的保育、事業所内保育、居宅訪問型保育）
対象外：私学助成園、認可外保育施設、預かり保育・一時預り事業、病児保育事業



- ② 報告内容：経営情報（人件費、職員配置、職員給与）
- 人員配置に関する事項 ・ 公定価格基準上での配置人数・実際の配置人数
 - 職員給与（処遇改善情報）に関する事項 ・ 各種処遇改善等加算の取得状況
・ 各職員の勤続年数、賃金など
 - モデル給与に関する事項 ・ 実績ではなくモデル給与
・ 基本給、手当、賞与等や月収と年収の目安を明示

※<モデル給与とは>

実際に在籍する職員個人への支給実績ではなく、各施設の賃金規程等の根拠に基づき、職種や経験年数等の属性に応じたモデル化された給与額を指す。

○収支の状況に関する事項 ・ 事業収入（収益）・事業支出（費用）

○人的資本に関する事項 ・ 法定外休暇の利用状況・ICT導入の取組状況など

※人的資本に関する事項については、任意となっているが保護者や求職者はより多くの施設の情報を探求しており、効果的な記載内容とすることで園児数の獲得、採用人員の確保などに繋がることと考えられる。

- ③ 公表：詳細な経営情報 → グルーピングによって集計・分析した結果を公表
人件費比率やモデル賃金等の情報 → 個別の施設・事業者単位で公表

(2) 何が「起こる」か

- ① 保護者による比較 → 人員配置・人件費比率
- ② 就職希望者による比較 → モデル給与・人的資本に関する事項
- ③ 在職者による比較 → モデル給与
- ④ 経営者等による比較 → 全項目

(3) 何が「求められる」か

公開・比較されて「選ばれる園」であることが求められる

令和7年度以降の2つのサイクル

○ネガティブサイクル

園児数の減少→運営費の減少→人件費率上昇→離職の発生→必要以上の離職

○ポジティブサイクル

園児数の維持・増加→運営費の増加→配置バランス考慮→人員の定着→手厚い教育・保育

- ① 配置の点検 必置、加算、実際の配置
- ② 給与の点検 処遇改善の状況の把握、勤続年数・個別具体的な給与の整理
- ③ モデル給与の点検 給与表に基づいた「モデル」の策定、処遇改善額等の配分基準

2 処遇改善一本化について

(1) 一本化の概要

令和6年度	令和7年度	
加算名	区分	計算方法
処遇改善Ⅰ（基礎）	区分1「基礎分」	加算率「a」
処遇改善Ⅰ（賃改）	区分2「賃金改善分」	加算率「b」
処遇改善Ⅲ		加算「c」
処遇改善Ⅱ	区分3「質の向上分」	ほぼ従来通り

(2) 給与額の計算方法の変化

区分1, 2 加算率 a = 旧処遇 I の基礎分 = 2%~12%

加算率 b = 旧処遇 I の賃改分 = 6%~7%

※区分1「基礎分」の受給要件 キャリヤパス要件を満たすこと

区分2 加算 c 「園児数×単価」 ※従来の処遇Ⅲと同額程度になる数式らしい

区分3 ①令和7年度においては累計45時間を受講した人数×単価

②令和7年度においては累計15時間を受講した人数×単価

※従来の人数 A・B を上限とし、「研修を受け終わった人数」に応じてしか給付しないというルールになった。

(3) 配分方法の変化

区分2 (旧処遇 I・Ⅲ)

令和6年度			令和7年度				
	基本給	手当	賞与		基本給	手当	賞与
処遇 I	○	○	○	区分2 処遇 I・Ⅲ	○	○	○
処遇Ⅲ	○	○	▲				

・かつての処遇Ⅲの月額2/3ルールがなくなった代わりに処遇 I・Ⅱ・Ⅲの合計額の50%以上を月額で支給する要件に。

区分3 (旧処遇Ⅱ)

区分①人数 A 分の配分ルール

対象者：所定量を前月末までに受講済 → 所定量を年度末までに受講予定

1人以上確保 → 削除

金額：4万円をひとり確保 → 削除

区分②人数 B 分の配分ルール

対象者：所定量を前月末までに受講済 → 所定量を年度末までに受講予定

Bの人数以上に改善 → 削除

・職員の研修時間の確保が難しく、最低限の研修で何とか受給して配分していた園としては「給付額が減少」することで、これまで配分していた職員にこれまでの同様の額が支給できなくなる。

~6年度 貰いやすい、配りにくい → 7年度~ 貰いにくい、配りやすい

○懸念事項 ○適切な配分例 ○拠出と受入

<最後に>

子ども家庭庁の発足以降、制度や仕組みの大きな見直しが次々進んでいる。見える化の推進、処遇改善の一本化など、これまで当たり前だった運用や考え方が今問い直されている。

こうした変化を『負担』ととらえるか、『チャンス』ととらえるかは、まさに園の姿勢次第。情報を正確かつ迅速に把握することはもちろん、それによって生まれる変化をどう受け止め、子どもや職員、保護者にとってより良い環境づくりにつなげていけるかが問われている。

制度はあくまで「枠組み」それをどう活用するかは、皆さんの判断と工夫にかかっている。

【研修を終えて】

「子ども・子育て支援制度における継続的な見える化」については、令和7年4月1日より経営に関する情報の報告およびその公表が行われるとの通知等は届いたものの、実際にはどのような内容を報告しどのような単位で公表されるのか不安に思っていた園も少なくないと思う。今回本杉先生の講義をお聞きして、園として何をしなければならないのかというものが具体的に示され、逆にそれを「負担」ととらえるのではなく「チャンス」ととらえるといった本杉先生の言葉が印象に残った。一方処遇改善の一本化に関しては、一本化にはなっていないのご指摘の通り、今後より一層の内容の理解と行政からの説明が必要であると感じた。

第2回設置者・園長等研修会

兼 第32回全日本私立幼稚園連合会東北地区私立幼稚園・認定こども園設置者・園長研修会 山形大会

期 日 令和7年6月13日（金）
会 場 ホテルメトロポリタン山形（山形市）

- 主題 一人ひとりの「こどもがまんなか」をまもる 質の高い幼児教育を
～社会全体でつむぎ未来へつなぐために～
- 対象 設置者・園長ならびに後継者、またはこれに準ずる者
- 日程 10:30-11:00 受付
11:00-11:15 開会行事
11:15-12:00 報告「全日本私立幼稚園連合会が目指すビジョン」
全日本私立幼稚園連合会 副会長 内野 光裕 氏
12:00-12:45 昼食休憩
12:45-13:30 報告「機構に与えられた責任 研修と評価」
(一財)全日本私立幼稚園幼児教育研究機構 理事長 安家 周一 氏
13:30-13:45 休憩
13:45-14:30 行政報告「幼児教育の現状と課題」
文部科学省初等中等教育局幼児教育課 幼児教育企画官 大類 由紀子 氏
14:30-15:15 行政報告「こども家庭庁における保育行政の動向と課題」
こども家庭庁成育局成育基盤企画課 併任保育政策課
教育・保育専門官・保育指導専門官 荒牧 美佐子 氏
15:15-15:30 休憩
15:30-17:30 分科会
第1分科会《教育》 俯瞰図 B6／キャリアアップ分野8 2時間
『人を育て・育ち合う
～保育者として学び続けることの重要性～』
(一財)全日本私立幼稚園幼児教育研究機構 専務理事
学校法人武蔵野東学園 学園長
武蔵野東第一・第二幼稚園園長、武蔵野東小学校校長 加藤 篤彦 氏
- 第2分科会《振興》 俯瞰図 C3／キャリアアップ分野9 2時間
『未来のこどもたちのために
～私立幼稚園・認定こども園が果たす役割～』
全日本私立幼稚園連合会 政策委員長
学校法人マハヤナ学園 理事長
マハヤナ幼稚園ミルフィーユ保育園園長 石田 明義 氏
- 17:30-19:30 懇親会

【報告Ⅰ】全日本私立幼稚園連合会の報告

① 法人化について

私立幼稚園連合会のガバナンス検討委員会にて諸規定・経理規定をはじめ3名の監事の方にしっかりと監査していただくため監査規程を作成する。規定・規則を厳格化しガバナンスを強め、一定の進展があった。



② 一般社団への道筋をたてる

リーガルチェックをしていただき振興活動は行うことができる。幼児保育や振興の大切さを理解していただく活動をしていくため、5月28日に承認をいただいた定款案に基づき令和8年度の総会の前に仮の一般社団法人全日本私立幼稚園連合会の登記を行う。一般社団法人の法人格を取ったうえで、施行細目を具体的に整備していきたい。

③ 幼児教育振興法について

幼児教育の質の高さの多様性を何をもって図っていくのか。全日本私立幼稚園教育研究機構と全日本私立幼稚園連合会と一緒に幼児教育の振興のために進めていくために協定を結んだ。

④ 刑事裁判については一昨年に結審した。元会長は有印私文書偽造などの罪により1年6か月の禁固、執行猶予3年。前事務局長は横領並びに有印私文書偽造などの罪により4年の実刑判決で服役中。3月に東京地方裁判所より判決が言い渡された。元会長は約1億8千万円、元事務局長は約2億円を全日本私立幼稚園へ返還するように申し渡された。元事務局長は提訴を断念し結審をした。元会長は地裁の民事の判決を不服として提訴している。次回の東京高裁の判決をもって終結する見込みである。

⑤ 日本国籍の子どもの出生数が昨年度、70万人を切っている。少子化の中で幼児教育に係る施設が永続性をもってその地域に整わないと、もし人口がV字回復をしたときその子どもたちを受け入れられるように、まずはしっかりと残ることが大切である。認定こども園協会や保育協会と協力をしながら対応をしていく。加えて縦の幼小中高、大学、短大協会と協議会を作り共に問題を洗い出し取り組んでいく。令和8年度は組織改革を進めながら、縦・横・斜めの関係性やガバナンスを強めていきたい。

⑥ こども誰でも通園制度について

- ・幼稚園・認定こども園・保育所の施設数は平成27年度子ども・子育て支援制度が始まってから幼稚園の数が減ってきている。
- ・平成27年度子ども・子育て支援制度が始まってから保育所の施設数は増えているが、園児数は減ってきている。幼稚園が幼保連携型認定こども園や幼稚園型認定こども園に移行したことにより減少してきている。
- ・東北地区は保育所も認定こども園化が高いと認識している。
- ・私立幼稚園だけで7割が認定こども園に移行している。
- ・園児数が減っていく中で公定価格が少人数になると公定価格の原価がでてくる。幼稚園のまま施設型給付の幼稚園になるのが都市部にも増えている。
- ・子ども家庭庁が掲げたのがすべての子どもたちが対象だったが、1号児・2号児・3号児保育を必要とするお子さん、2号児でないお子さんは1号児とし3歳から小学校に入るまでの

子ども達はすべて給付の対象となったものの3号児でない子ども達はどのようにするのか。

- ・待機児童を減らすためのプランが平成25年から始まって昨年度で終了した。来年度から保育政策の新たな方向性の話がなされた。具体的になってきたのが全てのこどもの育ちと子育て家庭を支援する取組の推進の中で、3号児でない子ども達を具体的にどうするかということで「こども誰でも通園制度」が入ってきた。
- ・本格実施に向けたスケジュールとして令和6年度は試行的な事業を行ってきた。令和7年度は法律を改正して新制度の市町村で行われる13事業の中として位置付けた。令和8年度新たな給付制度となる。
- ・人口の規模によって補助基準額の上限があり、月の上限を10時間として上で、こども一人1時間当たりの単価を設定。
- ・令和8年度に本格的に実施となる。現在は任意で行ってよい。
- ・国は3つデジタル化をしようとしている。こども誰でも通園制度総合支援システムでは地域で施設に通っていない人たちが、どこの施設でどのくらいのサービスを受けられるかを見られるものである。これで利用者と行政と施設を繋いでいく。
- ・同じシステムの中ワンストップで子ども達を預けられるように、ワンストップで請求ができるように考えている。
- ・概要手引きに従って提供側と市町村が一緒に進めていく。

【報告2】一般財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構の報告

1. 人間は生涯発達し 発達し続ける存在である



・人はその時々で課題は変わるけれども、発達し続ける。アメリカのエリクソン（発達の心理学者）が考えたものだがそのステージ、ステージで課題があるものである。

・あかちゃんは自ら学ぼうとする、有能な学び手である。なににもできない分からない事ではない。床に落ちている物を自分の口の中に入れて、何なのか試すなど、全て学びとなっている。そんな賢い人たちと過ごしている。

- ・様々な人や道具、物とかかわり合いながら学ぶ。「発達の最近接領域」ヴィゴツキー（旧ソビエトの心理学者）が自分に近い人を真似ながら学習をしていくと言っている。
- ・例えば日本の教育は6割が学年割で行っている。これよりも異年齢でセットする方が子どもの学びが増えるのではないか。自分の法人では縦割りの3・4・5歳児のチームを作って縦割りの保育を行っている。そうすると圧倒的に3歳児が物凄い育ちをみせる。当初保護者達は反対した。人間としてレジリエンスも含めて沢山の経験の中から学びが多い。
- ・2歳くらいから日本において、一定時間の集団保育は必須である。今、家庭でお母さんと子どもだけで過ごしている子は、他の子と過ごす機会が持てないでいる。圧倒的に低年齢の子が保育園に預けられるようになる。子どもを育てることによって親たちが発達をする。逆に言うと子ども達は親たちを育てるために生まれてくると言われている。子どもを持たないという選択をされるということは、人間として育つチャンスがないということが、反対に言えることである。
- ・親たちの発達は、子どもの心理的安定の基盤であると同時に、子どもの発達のモデルである。
- ・出生数が70万人を切ったが、そこには父と母の存在があり、母を子どもを産み落とすことで母親になる。相当な苦勞をして子どもを産む行為を通じて母は親にする場面がある。しかし父

はその痛みや苦しみを感ぜずに、普通に仕事をし続ける人もいる。母親は母親になるが父親は父にはなるけれども親にはならない。ずっと父のままでだけであるという親たちが多い。子どもを産む行為は母親だけにウエイトがかかって、結婚しても子どもを産まない方や結婚をしない方が増えている。

- ・保護者の懇談会には父親にも来てもらう。母たちの悩みや苦悩を聞いてもらうことで、子育てに興味を持ってもらうようにしている。父を父親にするには、そういった働きかけが必要である。「家庭はしない」ではいけない。
- ・日本は不登校が30万人、引きこもりが150万人いる国である。大きな原因は父が父親をしていないところにあると柏木氏は言っている。父親としての役割を果たしていない。
- ・乳幼児保育施設は子どもの学びであると同時に親が親になる教育を受けることのできる最後の場である。小学校へ上がってしまうとチャンスが無くなってしまう。この数年間の間に父親を園に引っ張ってきて様々な経験をしてもらいましょう。

2. 教員に魅力がない時代 近年の教育施設への要請と相互依存

- ・教員が少なくなってきている。3人の募集をして、採用試験に沢山来るか。当園では9人の中から3名選ばせていただいた。なり手が少なくなってきていることには、何か原因があるのではないか。一般的に給料が安くて長時間の仕事であるというのが一般的な通説であったが、それぞれの園で働き方改革を行ってそうでなくなってきている。処遇改善や給料が上がってきている。一番問題なのが社会から教育施設に社会から要請がきている。国際理解や多文化共生、第2言語習得及び日本語以外を第1言語とする子どもへの母語保障、発達支援児に対する学習配慮、環境教育・科学技術を担う技術者の養成、各人1台のタブレットとICTリテラシー・情報モラル・プログラミング学習、AI社会(SOCIETY5,0)への構え、小学校開門時間を7:00に早める(学校への託児依存)、地域社会のつながり崩壊の代替などの要請が国からきている。これらの要請が下の現場の先生方にきて、全部受け取って一生懸命にやろうとするが追いつかない。これが教員になりたくない原因のひとつである。
- ・強制された教育制度の7つの罪。正当な理由も適正な手続きもなく、自由を否定している。責任能力と自主性を発揮させる妨げになっている。学びの内発的動機を軽視している。(学びを勉強ないし苦役に転換している) 恥ずかしさ、思いあがり、皮肉、不正行為を助長する形で生徒を評価する。協力といじめの衝突。クリティカル・シンキングの禁止。スキルと知識の多様性の減少。これが学校文化の中に潜在しており、当たり前に行っているのが先生である。(引用:「遊びが学びに欠かせないわけ」PeterGrey 著)
- ・11時間保育は標準的な保育時間とされている。11時間の保育・教育施設への囲い込みは小学校でも夕方まで放課後児童クラブという形で自分の自由な時間を束縛された状態に子ども達はおかれている。0歳の時から小学校の塀の中で暮らすことがどういうことなのか。11時間囲い込まれているということは、そこにいなくてはならないことをコンプライトされていることで、子どもにどんなことが心の奥底に溜まってしまいか。どうせ自分の言っていることは聞いてもらえない、大人からの束縛された状態から逃れられない。日本人の自己肯定感が低い。
- ・普通の環境は単に子ども達が集まればいいというものではない。同年齢のみならず、違った年齢の子ども達が自由に作る集団と、そこで自由で自発的で、複雑な関係があって初めて普通の環境の必要条件が満たされる。私の住んでいる近所の幼稚園や小学校の様子を見ていると自由で自発的で複雑な社会関係を抑えることこそが重要な教育の一つだと勘違いしていると思えない。(幼児教育と脳 澤口俊之)
- ・子ども達に自分の問題を解決させ、感情を調整し、他者の視点から物事を見、違いを交渉によって妥協に導き、他者と同じレベルでつながる方法を教えるための自然な方法。これらの大切

なスキルを学べる遊び以上の方法はない。それらを学校で教えることはできない。私たちにしか子ども達に伝えられる手段を持っていない。

3. これまでの教育とこれからの教育

- ・一人ひとりの先生のスキルが上がらないといい園にはなれない。一人ひとりに必要な勉強は違う。指導要領・指導計画があり、保育がなされ観察をしてチェックをする順番だったのが、まずは子どもの興味関心をしっかり考えてそしてプランをたて、保育があってチェックをする。子どもの観察ができる先生。昭和までの幼児教育はみんな同じことをやりましょうと先生が決め、みんな発達は同じと考えていた。1989年には幼児教育要領が変わり、一人ひとりが違うことが公正という考えに変わった。2020年に個別最適化といわれだし平等ではなく公正となった。
- ・一人1台のタブレットを与えることは、子どもに全世界を与えることになる。能力や興味関心によって配信される課題はバラバラに、が可能になるはずだった。結果的に子ども達の依存を助長させている。
- ・機構のゆたかなまナビの配信をしている。それぞれの興味関心を俯瞰図による学びのバランス、研修履歴の確保。これが保育者の資質の向上の証明になる。
 - ① 子ども一人ひとりの育ちの方向性や特徴をいかにとらえるかは、大切である。クラス毎に決まったカリキュラムを設定し、一斉に行うことは乳幼児保育にはなじまない。子どもの遊びの姿から発達課題を導き出す。行動する中で学ぶという考えが幼児教育の基本である。一人ひとりの発達や興味関心はバラバラで、それぞれの子どもに合った豊かな環境の構成・設定が求められている。
 - ② マズローの欲求の階層説では、しっかり満たさせていくことで自己実現・自己肯定感につながる。
 - ③ 保育は答えが一つではなく、まかない仕事である。ありあわせの道具や材料を用いて自分の手で最適な物を作ること。人間にとっての本源的な営み理性と感性を切り離さない。土着の叡知
 - ④ AI時代に必要なことは心情・意欲・態度の形成であり、ゆたかな環境の中で頭と身体をフルに使う教育が必要である。1番重要なのは保育者の資質であり、子どもの心情を捉え、意欲を喚起し、態度の形成に至るようにじっくりと待つ。多くの言葉は話さない。子ども達がいかに信頼できるかが、私たちの仕事の根源にある。

記録者 学校法人南陽学園 宮内認定こども園
園長 宇津木 純子

【行政報告Ⅰ】文部科学省

幼児教育の現状と課題について

文部科学省初等中等教育局幼児教育課幼児教育企画官 大類由紀子氏による「幼児教育の現状と課題について」お話をいただきました。ご自身の子育ての体験を踏まえながら、こどもを取り巻く環境や、そして子育てや幼児教育を取り巻く環境とその変化を、具体的な話を交えながら説明していただきました。ついこの前までは、待機児童の解消が課題となっていました。今は人口減少、そして急激な少子化が進む中で、遊びを中心とした総合的な質の高い幼児教育が求められ、教職員の専門性や、資質向上がより一層期待されていることを感じています。しかしながら、保育・教育現場においても職員確保が難しい状況になってきており、豊か

な保育の営みを守るためには多くの課題が目の前にあります。しかし、幼児教育の重要性と素晴らしさを確認し、幼児教育を担う私立幼稚園・認定こども園の役割と期待が大きくなってきているのを再確認しました。

1. 学びや生活の基盤をつくる幼児教育と小学校の接続について

～幼保小の協働による架け橋期の教育の充実～

- ・幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであり、全ての子どもに等しく機会を与えて育成していくことが必要。
- ・幼児期は遊びを通して小学校以降の学習の基盤となる芽生えを培う時期であり、小学校においてはその芽生えを更に伸ばしていくことが必要とされることを踏まえ、幼児教育と小学校教育との円滑な接続をどうするのか、その重要性が認識されました。
- ・幼児教育施設と小学校との連携は進んではいるものの、その進捗状況には違いを感じる。しかし、そこを乗り越え、相互理解を深め、連携・協働して、より円滑な接続を図るための「架け橋期のカリキュラム」を計画・実施する努力の必要かつ重要性を示されました。また、この趣旨を実現するため、モデル地域における実践・成果についてもすでにまとめられており、その取り組み状況や成果を検証することで参考になることも多く、東北地区においても、秋田県大館市、宮城県白石市、福島県西会津町がモデル地区として3か年の取り組みの成果が報告されているとのことは、大きな刺激と学びになりました。
- ・幼保小の架け橋プログラム事業におけるアンケート調査結果から、幼小保の接続の取り組みを通して改善されたことや実践・成果の検証の資料の紹介もありましたが、興味深いものでしたが、実際の取り組みは、まだまだ不十分さも感じるところがあり、これからも継続的に問い続け検証していかなければならないことであり、私たちの責任と使命だとも感じさせられました。
- ・また、幼児教育は生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであり、家庭や地域に関係なく、全ての子どもが格差なく質の高い学びを享受し、その後の学びへと接続できるよう、幼児期及び幼保小接続期の教育の充実を図ることが重要。その実現に向けて、自治体における幼児教育センター等の幼児教育推進体制等を活用した、架け橋期のコーディネーター等の育成・派遣を推進すること等により、5歳児から小学1年生までの架け橋期カリキュラムの策定・実施・改善を行うための体制を構築し、全国規模で更なる促進を図っていかなければならないとの説明もありました。



山形県も「第7次山形県教育振興計画」において【幼児教育の推進・幼稚園教育要領等の着実な実施により、教師や友達との関わりを含めた環境を意図的・計画的に構成し、幼児の自発的な活動としての遊びを通じた指導の充実を図ります。幼児教育センターの設置による幼児教育アドバイザーの育成・派遣、幼保小の連携による架け橋プログラム35の取組みや研修機会の充実等を通じ、幼児教育の質の向上を図ります。】と示されており、期待するところです。

2. 幼児期の大切な学びが分かる動画シリーズ・お知らせポスターの紹介 遊びは学び 学びは遊び “やってみたいが学びの芽”

～多様な遊びから見える資質・能力を育むための園の工夫～
幼児教育の重要性を様々な機会に活用できる資料として紹介していただきました。

3. 特別支援教育を受ける児童生徒数の増加

児童生徒数は減少していますが、特別支援教育を受ける児童生徒数は倍増している状況報告がありました。幼児施設においても同様に実感していることと一致していることを確認しました。特別な教育支援が必要な幼児への対応が組織的・計画的に行うように幼稚園教育要領には平成29年に明記され、障害のあるなしに関わらず共に学ぶ教育、そして支援が必要な幼児への対応を組織的、計画的に行うことが明記されたと説明がなされました。

また、早期からの相談や支援の充実、そして就学期の支援までの連続性の重要性も示されました。

4. こども誰でも通園制度について

就労要件を問わず時間単位で柔軟に利用できるこの制度は、昨年度の試行事業から今年度は子ども・子育て支援法に基づく地域子ども・子育て支援事業として制度化され、2026年度からは新たな給付として、全国の自治体において実施できるようになるとの説明がなされました。

幼児教育を取り巻く様々な現状を具体的にわかりやすく報告いただきました。

社会の在り方が、劇的に変わる「Society5.0時代」が来るといわれ、先行き予測困難な時代を生きるこどもたち。自分の良さや可能性を認識し、周りの出会った人たちすべてが価値のある存在として受け入れ尊重し、多様な人々と共に、様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の担い手になるための資質、力を育む幼児教育の重要性についてのメッセージとして報告をしていただきました。

【行政報告2】こども家庭庁

こども家庭庁における保育行政の動向と課題

－子どもと家族のウェルビーイングを支えるために－

こども家庭庁の立場から、50ページに近い資料を参考にしながら、保育指導専門官 荒牧 美佐子氏から下記の5の視点で多岐にわたる行政報告をうかがいました。



1. こども家庭庁について

こども家庭庁は、少子化、児童虐待、ネグレクト等の子どもを取り巻く問題やあらゆる環境を視野に入れて「こどもまんなかの社会」を実現するために、内閣府、厚生労働省、文部科学省の関連部署が統合・連携して2年前に設立され、成育局(妊娠・出産支援、母子保健、就学前の子どもの支援、保育園・認定こども園、子どもの居場所づくり等)と支援局(困難を抱える子どもや家庭への支援、児童虐待対策、社会的養護の充実、自立支援機構対策、ひとり親家庭・貧困・障害児支援など等)があり、それぞれの課題に対しての役割や支援について説明をいただきました。

また、こども家庭庁の「こども」とひらがな表記されているが、これは「心身の発達過程にあるすべてのこども」という意味合いがあり、「子供」「子ども」には今まで定義されてきた一定の年齢で区切らずに、幅広く支援が必要とされるサポートを、途切れてしまわないように、応援する思いが込められていると改めて示していただくことが印象に残りました。こどもの最善の利益を図るための司令塔として政策を総合的に推進する責務があるとしています。

2. こども基本法・こども大綱・はじめの100か月の育ちビジョン

こども基本法（2022年4月6日成立し、2023年4月に施行）

こども施策を社会全体で総合的かつ強力に推進するための総括的な基本法として成立し、施行されましたが、その目的、基本理念について説明をしていただきました。こども基本法の第9条では、こども施策を総合的に推進するため、根本となる「こども大綱」の策定を義務付け、2023年12月22日には、内閣総理大臣を会長とする「こども政策推進会議」の議論を経て、日本で初めての「こども大綱」が閣議決定されました。これは子ども政策の基本的な方針と重要事項を一元的に定めたもので、おおむね5年後に見直し、毎年改善を行うこととされています。

「はじめの100か月育ちのビジョン」については、こども家庭庁が、すべての子どもが誕生前からおよそ幼児期までの期間を「生涯にわたるウェルビーイングの向上に非常に重要な時期」と捉え、切れ目がないように支えていこうと幼・保・小の接続を重視し、こども基本法の理念にのっとり整理した、以下の5つのビジョンが示され、確認しました。

- ① こどもの権利と尊厳を守り、すべての子どもが個人として尊重され、基本的な人権が保障されること。
- ② 安心と挑戦の循環を通じたウェルビーイングの向上。保護者や保育者との信頼関係の中で、子どもが豊かな遊び体験を通じ挑戦し、自己肯定感を育むこと。アタッチメント形成の重要性
- ③ 「こどもの誕生前」からの切れ目のない支援と関係者、関係機関のネットワークをつくり支える。成長過程での環境変化における「育ちの切れ目」を防ぎ、家庭、関係機関、地域が連携して子どもを支える。
- ④ 保護者・養育者のウェルビーイングと成長の支援・応援をする。保護者が悩みを抱え込まないよう、専門職による支援や地域とのつながりの強化。
- ⑤ こどもの育ちを支える環境や社会の厚みを増す。

思いに関する調査と今後の取り組みについて

こども家庭庁は、上記のビジョンに基づき、保育所や認定こども園等における意見や思い、考えの尊重の推進に関する実践上の配慮や工夫を把握するための、調査を実施しました。

調査結果の概要

- ・多くの園において、こどもの意見や思い、考えを尊重することを意識して保育を行っていることを確認。
- ・こどもが思いや考えを表現できるよう、こども同士やこどもと保育者の対話の時間を設けるなど、こどもが主体的に意見や思い、考えを表すようにする工夫については、関連するその他の工夫に比べて相対的に課題である。より一層の工夫を期待する。（こどもと保育者の対話の時間を設けたり、こどもが主体的に意見を表明できるように工夫したり、試行錯誤等）

結果を受けて取り組みから事例集の作成

構成として

- (1) 子どもの意見の表出
- (2) 社会参画の機会の確保
- (3) 子どもの思いを受け止める工夫と課題
- (4) 園全体の工夫

- ・ こどもの思いの表現には、アタッチメントが大事。それには先生との信頼関係が大事
 - ・ 言葉だけではなく、表情、姿勢、態度など非言語的な表現も重視している。
 - ・ 子ども同士が意見を出し合い、お互いの考えを知る経験を大切にしている。
 - ・ 「社会参画」については、中学生・高校生と比較して乳幼児期はイメージしにくいものの、地域との交流や体験活動を通じて、子どもの興味から社会とのつながりを意識する機会を創出する取り組みが見られる。
 - ・ 一方で、子どもの意見を尊重しつつも、必ずしも子どもの意見をそのまま受け入れるのではなく、その理由を丁寧に説明したり、一緒に考えたりする工夫が重要であることも指摘されている。
- (ホームページに掲載しており、各園の創意工夫のもと活用を期待しているとのことで、具体的な事例を紹介)

3. こども・保育をめぐる近年の動向

少子化の現状

日本の出生数は減少の一途をたどり、2023年度には過去最低を記録。特に東京の合計特殊出生率は「1.0」を切る全国最低水準であり、少子化は「待ったなしの状況」。地域ごとの実情に応じたきめ細やかな対策が不可欠であり、2050年以降には14歳以下の若年層が人口全体の10%を下回ると予測されており、少子化のスピードは加速していることなど、様々な表やグラフの資料からの報告がありました。

保育政策の転換

一方、女性就業率の上昇に伴い、保育園の利用率は全国的に上昇傾向にある状況。この10年間で待機児童は大幅に減少してきましたが、地域差はまだあり、都市部では依然として待機児童が残る一方、人口減少地域では保育所の定員充足率が低下し、施設の安定運営が困難になるということも生じています。また、幼児施設に通っていない未就園児も相当数見られるので、その支援のためにこども家庭庁では、「こども誰でも通園制度」として、就労状況に関わらず、全ての子どもがどの年代であっても、どこの地域であっても幼児教育の施設にアクセスできる権利を保障する意味を持つ制度として制定された。

4. 保育行政の新たな方向性

これからの保育政策は「量の拡大」から「質の向上」と「制度の持続可能性」へと方向転換を図っています。新たな保育政策は、以下の3本柱で推進されます。

- (1) 地域のニーズに対応した保育の質の確保・充実
 - (2) すべての子どもの育ちと子育て家庭を支援する取り組みの促進
 - (3) 保育人材の確保・テクノロジーの活用等による業務改善
- ・ それぞれの項目について、資料を見ながら説明をしていただきました。
 - ・ 少子化対策として、人口減少地域では、各地域が保育機能をいかに確保・維持・強化していくかが課題であり、取り組みの方向性として地域における統廃合や規模の縮小を考えた計画

的な再編も視野に入れなければならないとの、避けては通れない厳しい現実も示されました。また質の高い保育を提供し続けるための「保育所等機能強化推進計画」の策定を自治体に促しています。

- ・保育者配置基準の改善は、3歳児（保育所 20：1，幼稚園 25：1）4・5歳児の配置基準（保育所 30：1、幼稚園 25：1）1歳児についても、科学的検証しながらすすめていきたい。とのことでした。
- ・また保育の質の確保・向上を図るためには、各施設の取り組みと共に地域全体で持続的に取り組むことが出来る体制整備が求められていることに基づいて進めているところであるとの説明であった。しかし、実施までは、まだまだ課題は多そうでもありました。
- ・完全性の確保・施設内における職員による虐待・不適切な保育の通報義務の創設、及び速やかな通報が義務付けられました。
- ・こども誰でも通園制度」は、就労状況にかかわらず、すべての子どもが地域で質の高い保育にアクセスできることを目指すもので、全国的な実施に向けて準備が進められています。
- ・一時預かり事業の利用促進も重要視されています。他にも、それぞれについて詳しく説明をいただきました。

5. 3要領・指針の改定

具体的なスケジュールは未定ですが、互いに連携しながら「幼稚園教育要領と保育所保育指針との整合性をもって、どこの施設を出ていてもこどものより良い育ちを保障する。そのような制度となるように検討を進めていきます。との説明がなされました。

記録者

学校法人酒田幼稚園

認定こども園酒田第二幼稚園

園長 山口 由香

【分科会Ⅰ】教育

Ⅰ. 研修について

「令和の日本型学校教育」を担う新たな教師の学びの姿の実現に向けて

令和3年11月15日 中央教育審議会「令和の日本型学校教育」を担う教師の在り方特別部会より

(1) 教師の研修環境の変化

○研修の体系的・計画的実施の促進

- ・教員育成指標の策定、教員育成指標を踏まえた教員研修計画の策定が義務付けられた。
→研修ハンドブックの改訂において「育成指標」を追記、実践している。

○オンラインによる受講環境の充実

- ・新型コロナウイルス感染症への対応を契機として、急速な広まりを見せている。
- ・独立行政法人教職員支援機構においてオンライン化の取組が進められており、オンデマンド型の質の高い学習コンテンツにアクセス可能な状況を作り、全国的に利用が可能
→私学独自の研修システム「ゆたかなまナビ」（処遇改善加算対応）を全国展開している。

(2) 「令和の日本型学校教育」を担う教師の学び

- ・研修環境の変化も踏まえて、「現場の経験」を重視したスタイルの学び、教師の一人一人の個別最適な学びが求められるようになってきている。
- ・教師にふさわしい主体的な姿勢の尊重、学びの内容の多様性の重視。学校管理職等が、教師に

学びの資源を確保することが不可欠である。

(3) 「令和の日本型学校教育」を担う新たな教師の学びの姿（学び続ける教師）

- ・教師は学び続ける存在であることが期待されている。
- ・時代の変化が大きくなる中で常に学び続けていくことが必要。時代の変化に対応して求められる資質能力を身に付けるために、常に最新の知識技能を学び続けていくことがより必要となってきている。
- ・主体的に学び続ける教師の姿は、児童生徒にとっても重要なロールモデル。大人として主体的に学び続ける教師の姿を目にすることで、自らも主体的に学び続ける意欲を子供たちが培うことが期待できる。

○適切な目標設定・現状把握、積極的な「対話」

- ・具体的な目標の達成に向けた体系的・計画的な実施
研修ハンドブックでキャリアステージの階層別にそれぞれ目標を設定し、体系的・計画的に作っている。
- ・任命者や服務監督権者・学校管理職等と教師の積極的な「対話」
振り返り（フィードバック）をしていくこと。教師として学び続けたい自分の目標と、園の中でこういうところを学んでほしいという設置者・園長の願いの両方が大事。両方が達成できるか、積極的な「対話」＝フィードバックをしていく。

○質の高い有意義な学習コンテンツ

- 明確な到達目標と適切な内容を備えていること
- 体系性をもって位置付けられ、レベル（入門、基礎、応用、発展）も整理されていること、質の高い学習コンテンツが豊富に提供されていること
- 質保証の仕組みが適切に機能していること
- 各学習コンテンツをワンストップ的に集約・提供するプラットフォームが存在していること
→ゆたかなまナビも包括している

○学びの成果の可視化と組織的共有

- 学びの成果が可視化（履歴）され、積極的に活用されて教育力の向上にもつながり、学びの充実につながっていくということの質が証明されるようになる。

○デジタル技術の活用

審議まとめにおいて

- 研修計画に基づいた研修の受講とその受講履歴に基づいて管理職と教職員が対話をしながら研修の受講奨励やキャリア形成をおこなうことの重要性が指摘されている。

2. 学校評価について

学校評価は、「自己評価」「学校関係者評価」「第三者評価」からなる

- 「自己評価」の実施と公表 →「義務」園として必ずしなければならないこと
 - ・教職員の個人の評価やその集計ではなく、園の教職員が自分たちの一年間の営みを評価すること
- 「学校関係者評価」の実施と公表 →「努力義務化」するように努めなければならないこと（できるだけしたほうがよいこと）
 - ・保護者アンケートやその集計でもなく、保護者代表や園の地域の代表に自己評価を伝え意見交換してよりよい運営をめざすもの

- 「第三者評価」(実施と公表) → 今後の課題
 - ・近い将来に進む方向として、私立幼稚園に実りある評価を構築すること
 - ・全日本私立幼稚園幼児教育研究機構「公開保育を活用した幼児教育の質向上システム ECEQ®」の実施と参加で実績をあげて認められている。
- 「学校評価」は、平成19年(2007年)←18年前 学校教育法・学校教育法施行規則の改正により義務化された
 - ・学校評価ガイドラインの変遷
 - 平成18年 「義務教育」からスタート
 - 平成20年 「高等学校」が追加
「幼稚園におけるガイドライン」
 - 平成22年 「第三者評価」加筆
 - 平成23年 幼稚園の特性に応じた「幼稚園における学校評価ガイドライン」【改正】
- 「学校評価」における「自己評価」は個人の評価やその集合体ではない。園の取組み自体を園として自己評価すること
 - ・幼稚園教育要領、学習指導要領等は「告示」されたもの → 要領は、学校教育法を幼児教育として補充する役割。自園の保育実践の根拠となるような表現になっている。そのことを設置者・園長がきちっと把握しているかどうかというのは大事。ところが… 意外に現場は昭和の教育要領のまま???
 - これからどんどん変化する世の中に旅立っていく子供たちは、学び続ける、自分が変わり続けることを身に付けていかなければならない。それを喜びとしなくてはならない時代がやってきた。
- 変わり続ける時代の中で、意外に現場は昭和の教育要領のまま。その結果、昭和の保育のままになっている可能性がある…。昭和の教育要領は、望ましい経験をさせる、望ましい「活動」の用意、様々な「活動」が用意され展開された
 - ・その流れのままだと、コンテンツの教育＝幼児教育という誤解が生まれる。私たちは幼児教育者として、幼児教育は人生の基礎を培うものとしてずっとやってきて、それはコンテンツがでるようになるのではない。
- 昭和から平成を経て令和へ 幼稚園での教育は、園が何を教えたのかから、子どもが何を学んだのか。子ども自身が「学びの主体者」への転換 → 望ましい経験をさせるから、子ども自身が主体的に学ぶ子どもにしていこう … あそび性とも言われている。
 - ・実践と、実践を説明する力をバージョンアップする努力が必要
- 「私立幼稚園」(認定こども園)の特色 私たちの足場
 - 1 「幼稚園教育要領」等の三法令という共通の土台
 - 2 「建学の精神」「教育の理念」に基づく特色ある教育実践
 - 3 作り上げてきた園環境(園内・園庭)
 - 4 地域環境との関わり(商業地・農作地・住宅街…)
 - 5 地域とのつながり(地域から愛される幼稚園)
 - 6 園児・卒園児・保護者・教職員とのつながり
 - 7 その園らしい教職員の構成(運営組織)
 - 8 園のお家芸 大切にしてきたこと → 「文化」等
 - ・「その園らしさという独自性」「独自のそれぞれの私立幼稚園いう多様性」その上で保育の質向上をはかる

3. グループワーク（講演を聞いて心にざざったこと、もう少し知りたいこと、課題などについて付箋を使って話し合う）

○ワークの中で自分の学びを確認しながら、多様な他者と意見交換することによって自分の学びがいかに豊かになるのかを体験する



○質疑応答より

◆時間のない中での園内研修の工夫について（園内の時間が足りない）

⇒（加藤先生）全員の共通の課題である。だから解決は各園の努力。どんな工夫ができるかを自覚化する我が事化する。忙しいという言葉に生産性はない。やれることとやれないことがある。「じゃあ、どうする？」という問いは、各園というチームに投げかけていく。どこをブラッシュアップしていくのかというあたりを意見交換していくことかと思います。

◆環境の再構成について

⇒園舎・園庭・保育室内の教材の配置が一個一個が構成されている。こういうことに興味をもってきたから、そういうような場を作ってみようとか、こういう教材をちょっと足してみようとか、これはいらぬみたいにして、その自分が暮らす場所をその時に子供たちにフューチャーされているものが、少し豊かになるように背伸びできるように場を作り直していくということですね。

◆あそび性とは

⇒仕事と余暇みたいに世の中の人とは分けて考えているが、やっておもしろいという遊びの中に含まれている自分の心のワクワクした感じみたいなものが、仕事にも健康にも活かされている訳で、そういう取り組みの仕方、子供たち私たちの学び方を大事にしていこうというような意味合いです。

◆第三者評価の実施方法について

⇒一択でECEQ推し。コーディネーターになるとそういうことも学ぶことができる。

【分科会 2】 振興

○ 令和 7 年から 8 年は、幼児教育保育界の分かれ道？

令和 7 年 こども誰でも通園制度（試行的事業）

見える化ここ de サーチ

公定価格改定（細分化）

処遇改善一本化

0 歳児完全無償化（東京都 9 月～）

令和 8 年 教育要領改訂～

こども誰でも通園制度（給付制度）

日本版 DBS 保育 DX 新子育てプラン

小規模保育施設 3 歳～5 歳受入れ

0 歳児完全無償化（大阪市）

↓教育へ？

↓子育て支援へ？

○ 国・子ども子育て支援等分科会で上がった課題点

保育の質とは何か？良い保育とは、どのような保育を指すのか？

○ 各国の保育の質的評価尺度(スケール)アセスメント

ECEQ・Ofsted・EAELY CHILDHOOD ENVIRONMENT RATING SCALE 等

☆保育環境評価スケール（アメリカ）

ITERS(イターズ)(0.1.2 歳児)

ECERS（エカース）（3 歳児以上～）→粗大運動遊びの空間の重要性

○ 令和 5 年度私立幼稚園「経営実態調査」報告

・財務分析からみた適正保育料（1 号認定児）

無償化により補助される 1 号認定児保育料は 25,700 円だが、令和 5 年度は上乗せ徴収等により、全国平均 27,839 円(差額 2,139 円)を徴収。

理想的な収支差額比率の 15%を達成するためには、12,600 円の保育料が不足→38,300 円が妥当な額？

・令和 7 年度末には 7 割以上が私学助成から施設型給付を受ける園に移行する見込み。

○ 文部科学省からの令和 7 年度予算額(案)について

1 幼児期及び幼保小接続期の教育の質的向上を支える自治体への支援 5.3 億円(新規)

2 幼児教育の質の向上に関する調査研究等 3.4 億円(5.6 億円)

幼児教育の質の向上のための幼稚園教諭等の人材確保支援

負担割合 国 1/4 都道府県 1/4 園 1/2

3 幼児教育の質を支える教育環境の整備 13 億円

4 発達障害のある児童生徒等に対する支援事業 0.9 億円

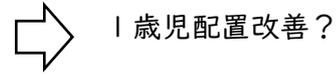
○ 令和7年度 こども家庭庁 予算案 7.3兆円

こども未来戦略

- ・4.5歳児について30:1→25:1への改善する
- ・1歳児の職員配置を5:1以上に改善した場合は、加算する。

【対象】以下の全てを満たす事業所

- (1) 処遇改善加算ⅠⅡⅢの全てを取得している
- (2) 業務においてICTの活用を進めている
- (3) 施設・事業所の職員の平均経験年数が10年以上



- ・保育士等の処遇改善 令和6年度補正予算で措置した+10.7%の改善
- ・経営情報の継続的な見える化のプラットフォームの方向性（私学助成の園は任意）
 施設・事業者 → ここdeサーチに報告・届出（人員配置・収支の状況等）→ 都道府県・子ども家庭庁にデータの取得や確認 → 国民・施設・幼児教育・保育利用者・保育士等の求職者等に公表（施設・事業所ごとやグルーピングした分析結果を公表）
 施行期日は令和7年4月1日。令和6年4月1日以降に始まる事業年度について報告対象
- ・処遇改善等加算ⅠⅡⅢについて、事務手続きの簡素化等の観点から一本化？
- ・キャリアパス要件分は、現行の賃金改善要件分から減率する仕組みを廃止し、職場環境の改善という観点から、1年間の経過措置を設けた上で、区分Ⅰ(基礎分)の要件とする。
 役職や職務内容等に応じた賃金体系の設定、資質向上のための計画を策定し、当該計画に係る研修の実施又は研修機会の確保等が要件（満たさない場合は2%減）
- ・保育DXの目指すべき姿

- 保育施設職員 → オンラインのデータ連携により、書類作成を不要に。
- 自治体職員 → 入力・審査業務の負担軽減
- 子育て世帯 → スマートフォン等を使用し、保活の手続きがワンストップで完結



・「こども誰でも通園制度」試行的実施 2026年から給付制度

【対象児童】 保育所、認定こども園等に通っていない0歳6ヶ月～満3歳児未満の未就園児 【実施施設】 保育所、幼稚園、認定こども園、家庭的保育事業所、小規模保育事業所、地域子育て支援拠点、企業主導型保育事業所、認可外保育施設、児童発達支援センター等 【実施方法】 一般型又は余裕活用型 【単価】 月の上限を10時間とした上で、こどもの年齢に応じて、こども一人1時間当たりの単価を設定。		こども一人 1時間当たり単価
	0歳児	1,300円
	1歳児	1,100円
	2歳児	900円
	障害児加算	400円
	要支援家庭のこども加算	400円
医療的ケア児加算	2,400円	

現在800園を超える園が実施中。利用児の個別指導計画が必要だが、3号児を受け入れていない園にはやる意義があるのでは？

課題点：アレルギー児の対応・人員不足・障害児への対応 等

アウェイ育児(自分の育った町以外で子育てをしていること)のご家庭には注目されている

・公定価格における定員区分の細分化と地域区分

※定員 60 人以下の幼稚園・保育所・認定こども園に係る定員区分の細分化を行う。

※地域手当の級地区分の設定について

市町村→都道府県 1級地 20%～7級地 3%の 7 区分→1級地 20%～5級地 4%の 5 区分
今後の対応予定

令和 7 年 4 月からの見直しは実施せず、引き続き見直し方法について丁寧に議論を進めていく。

○ **こども性暴力防止法が 2024 年 6 月に可決成立**

(学校設置者等及び民間教育保育等事業者による児童対象性暴力等の防止等のための措置に関する法律)

・2026 年度中に施行予定 内定者・教員には戸籍情報提出義務や年に一回研修を受講

○ **子ども子育て支援新制度の問題点・課題点**

・公定価格単価について (特に基本分単価)

私学助成園の 25,700 円は、法律の次に位置する政令で閣議決定が必要のため改正の難易度が高い。また、公定価格「基本分単価」では平成 27 年～令和 6 年までの人勤分を除去した差額は下がっている。

・人勤分を払いすぎて、経費 (基本分単価) が圧迫される問題

令和 5 年人事勧告に伴う令和 5 年度補正予算における公定価格【修正案】

【当初】

人件費改定分に 係る改定率 5.2%	人勤分の累計額 9.0%	計 14.2%
--------------------------	-----------------	---------

令和 5 年度補正予算による公定価格の増額分は人事院勧告に伴う人件費の増額分であるため、基準年度が 4 年度である場合、改定による影響額を人件費の改定分として取り扱って差し支えない。またこの他、事務負担が大きい場合は人件費に 0.9 の調整率を乗じて算定しても差し支えない。

【修正】0.9 乗じた場合の額面

人件費改定分 に係る改定率 4.68%	人勤分の累計額 9.0%	計 13.7%
---------------------------	-----------------	---------

○ **就労支援重視の保育 11 時間無償化の弊害?・・・検証が必要か**

【影響】愛着障害、虐待ネグレクト、不登校、ひきこもり、いじめ、自殺最多

日本(2018) 10～19 歳の死因 第 1 位自殺 第 2 位不慮の事故 第 3 位悪性新生物(がん)

愛着形成 (アタッチメント) の重要性～イスラエル・キブツ集団乳児保育、旧ソ連コルホーズの教訓～

イスラエルのキブツ【1970 年代後半～キブツ共同体社会】では乳幼児の時から集団で一括保育 (週末のみ親元へ帰る) を行う。青年になるころから**無気力、不登校、ひきこもり、愛着障害、問題行動が多発** → 中止

旧ソ連コルホーズ・ルーマニアのチャウシェスク政権下(糞便まみれの施設に收容されていた)も青少年事件が相次いで起き、町に壊滅的な被害が出た。

・アタッチメント～本能的欲求～ 乳幼児は不安な時に特定の人にくっついて安心感を得る。

・小児期に虐待 (ネグレクト等) ある場合 → 脳の萎縮、テロメアが短くなる(短命)

・幼児教育は医療と同じくらい重要です。【明和政子氏 京都大学大学院教育学研究科教授】

乳幼児期は愛着をもって身体接触することで脳のシナプスが発達していく大切な時期。

- **大規模縦断調査実施～文科省 5歳児 15,000人を小4まで追跡調査**
CEDEP【東京大学大学院教育学研究科附属・発達保育実践政策学センター長 遠藤利彦氏】
 幼児期の教育が及ぼす影響が明らかに！

- **幼児教育の拡充が、少年期の非行等を抑制【東京大学・立教大学・専修大学共同研究】**
 1960年代の幼児教育の拡充が少年の暴力犯罪の減少や10代の妊娠率の低下につながったエビデンスを明らかに！また、幼児教育が「非認知能力」の向上に寄与したことを実証。

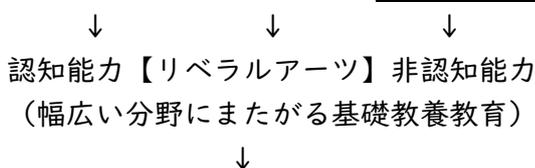
- **全国的に0～2歳児を完全無償化広がる**
 自宅で0歳児を在宅育児している世帯へ「在宅育児支援」を支給している自治体もある。
 本当は専業主婦になりたい 33%（ソニー生命 女性の活躍に関する意識調査 2022）
 女性の就業率が上がると出生数は下がる 荒川和久 著書「結婚減亡」より
各国の異次元の少子化対策

<p>[ハンガリーの少子化対策] GDPの5～6%を少子化対策に充てる ・子ども3人生まれると、住宅ローンが生涯免除 ・子ども4人生まれると、所得税が生涯免除 ・祖父母にも育児手当（2歳になるまで） ・午後5時前に、ほとんど帰宅する ※移民が増えてハンガリー文化が消えてしま いそうだったため。</p>	<p>[フランスの少子化対策] 子ども産めば産むほど有利なシステム特殊出生率1.88で欧州連合で最高 ・事実婚と婚外子が52% ・N分N乗方式(3人以上子育てに大幅な減税) ・家族手当が所得制限なし、20歳になるまで支給(子どもの数だけ) ・子ども3人養育すると、年金10%加算される 受診、検診、出産費用等がすべて無料 ・不妊治療公費負担 ・父親出産休暇には賃金80%保障 ・高校までの学費原則無料</p>
-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

- **幼稚園免許状取得者の7割が他業種へ！30歳未満の離職率60% 文部科学省資料**
 保育士の有効求人倍率 3.54倍（令和6年1月実績）
 派遣業界全体の平均マージン率30.6%に対し、保育派遣業者のマージン率が年々上昇傾向33%
 保育学生減少 私立短大504校→282校 募集停止・閉鎖相次ぐ
 課題：こども誰でも通園制度・配置基準の見直し(1歳児6:1→5:1へ、4.5歳児30:1→25:1へ)・慢性的保育士不足、保育学生減少、関東首都圏へ流出

- **OECD Education 2030 プロジェクト【経済協力開発機構であり、世界の繁栄、平等、幸福実現の政策を作ること。国際基準の設定を作ること助言する。】未来は常に私たちを驚嘆させる**
 10年前に作成、パンデミック（世界的流行感染等）・自然災害・戦争・経済ショック・気候変動・エネルギー削減、インターネット障害・データ侵害・高齢化を予測していた。

幼児期のさまざまな直接体験・活動（アナログ体験等）



AI、IOTへ 指示・プログラミング

- ・ デジタル導入の「教育先進国」フィンランドは成績低下や心身の不調が顕在化し、紙の教科書復活
- ・ シンガポールでも小学生にはデジタル端末を配らないと 2023 年に決定。
- ・ 韓国では保護者や教師、世論からの懸念を受けデジタル教科書を 32%にとどめた。



日本はデジタルを紙の教科書と同じ「正式な教科書」とすることを中教審は提起した。

OECD(田熊美穂アナリスト)は幼児期には直接体験を推奨!

- ・ 生成 AI と共存の時代に必要な人間ならではの思考力とは?
- ・ 「思考力以外の、人間固有のチカラ」とは?
- ・ 人として、どう生きるか? AI とどう共生するか?
- ・ 幸せとは? よりよく生きるとは? ウェルビーイングとは?

○ 今後の保育政策の新たな方向性 こども家庭庁

- ・ 保育の受け皿(待機児童解消)であった新子育て安心プランが終わり、令和7年度~令和10年度末からは質の向上・質の改善を目的としたプランへシフトする予定。
- ・ 私立幼稚園由来の認定こども園は、設置基準から「園庭」を有している。質の高い教育を保障する必須な場が園庭である。

【提案】

- ・ 園庭を通じた質の高い教育を展開している施設や「質向上の加算」等をご検討いただきたい。
- ・ 乳幼児期からの「質の高い教育・保育」施設に~
- ・ 多くの子育て支援策は「依存型」を求める施策が多い、「こどもの最善の利益」は守られているか? → 質の高い幼児教育保育・親子の愛着、ウェルビーイング → 自己肯定感・探求心・主体的・意欲・非認知能力・エージェンシー → 税収増・国際競争力向上

○ 保育施設での「不適切保育」が急増!

保育者は「専門性」だけを学ばば良いというのではない「人間性」「教養(リベラルアーツ)」を身につけることが大切なのは? → 基盤は「人間性の豊かさ」

○ パーパス(存在意義)

自園の独自性を、社会でなくてはならない存在意義・考え方を理解する。

◎ 「依存型社会(福祉)」から、「自立型社会(教育)」へ 教育のチカラを、信じられる社会へ



子育ての幸福感 + 国際競争力の底上げ



「シン・幼児教育振興法」制定へ
社会へ「幼児教育の有用性」を周知・啓発 アピール

第3回設置者・園長等研修会

期 日 令和7年7月11日（金）
会 場 山形県私学会館（山形市）
記録者 学校法人山形キリスト教学園
認定こども園さゆり幼稚園
主幹教諭 太田 彩子

【概 要】

テーマ 保育の質の向上に向けて
～園全体で取り組む評価と改善の仕組みづくり～
講 師 学校法人ひじり学園 理事長 安達讓 氏

【内 容】

なぜ、評価が必要なのか

- ・組織的、継続的に教育を改善する。
→「保育の質」の向上
- ・保護者や地域から信頼される開かれた園づくり
→ 保護者に何が大切なのかを伝えるためにも評価は必要である。
- ・教育・保育水準の質の保障と向上

1. 評価と保育の質

- ・自己評価（自らの保育の改善）
- ・関係者評価（自己評価を客観的に見るため）
- ・第三者評価（質の継続的改善）

「保育の質」とは…？

- 構造の質（施設・職員配置・環境整備）
 - ・国が定める園舎の安全基準や職員配置、職員資格
 - ・屋内外の環境構成（多様な遊具、絵本、自然物コーナーなど）
 - ・保護者との連携（連絡システムやクラス懇談会など）
 - ・職員の研修体制（キャリアに応じて学ぶ、外部講師による園内研修など）
- プロセスの質
 - ・対話的な関わり（子どもの姿を肯定的に受け止める）
 - ・情緒的な支援（安心感のある応答・共感的な対応）
 - ・カリキュラムマネジメント
→カリキュラムの中身が大切である。
行事を通して、何を学び、どのような経験をさせたいのかが大切。
 - ・保育の基本構造の共有（子ども理解→ねらい→手立て→評価）
→子どもの姿から保育（計画）を立て直す。
- 結果の質
 - ・子どもの育ち

- ・保護者の満足度（園生活満足度の可視化など）

評価を園全体で取り組むために、「なぜ評価をするのか…」を明確化する必要がある。

- | | |
|-------------------------|----------------------|
| 「もっといい保育がしたい！」 | →そのために「振り返り」をする |
| 「子どもの遊びをより発展できるようにしたい！」 | →「環境」を見直す |
| 「様々なことを試してみたい！」 | →安心できる場「心理的安全性」を保障する |
| 教材や環境の工夫 | →「研修」 |
| 発達に応じた保育 | →「カリキュラム会議」 |

これらすべてが「評価」である。「評価」という言葉には幅広い内容が含まれている。一人ひとりが自分事として「やってよかった」と思える評価が求められている。評価をすることで、保育の質の向上、ますます働きやすい職場へと変わっていく。

2. 構造の質を起点とした質の向上

① 環境構成の見直し

保育環境評価スケール（E C E R S）の活用

② 運営体制

園の役割分担の整理

I C T化による情報共有と効率化

→保育の可視化・家庭への情報配信・職員間の情報共有

1日10分の短縮で年間40時間の短縮につながる

③ 保護者連携

子どもの育ちの共有（家庭とのつながり）

日々の記録やドキュメンテーション（写真・動画）により、幼児の評価の参考となる情報を日頃から蓄積しておく。これらを保護者と共有することで、園と家庭が一体となって関わる取り組みを進めることが大切である。

（「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」解説資料より抜粋）

子ども同士のトラブルで大切にしたいことは、「解決」することではなく、気持ちに変化する「過程」を大切にすることである。相手がどのような気持ちなのか、自分はどうしたらよいのか、感じたり考えたりする経験が、これからの友だちの関係作りの土台になる。このようなことを保護者にも伝え、共有する。発達の段階をきちんと説明できること＝質の高い保育へとつながっていく。

子どもの育ちを「見える化」するために、文章や吹き出しを多く取り入れ、その時の状況をイメージしやすくする。結果だけではなく、過程の大切さに気付いてもらうことも大切である。（活動の前後の写真を載せて、つながりを理解しやすいようにする）

また、各クラスの子どもの姿を写真に撮り研修を行う場合、子どもの心が動いている瞬間、『つい語りたくなる』ような写真を撮る。子どもの心が動くときは、先生がエネルギーをもらうときでもある。持ち寄った写真を伝えあいながら、育ちを読み取っていくことは効果的な研修となる。

④ 研修体制

キャリアに応じて学ぶ。

内定者研修・新任研修・ミドルリーダー研修 等

改善へつなげるしくみづくりのステップ

	取り組み例
園長、主任がビジョンを共有	対話の文化を育てる
取り組む内容を決定 (何について改善するのか)	週1回の「こどもを語る会」の実践
評価項目を整理	安心して語っているか 子どもの姿に面白さを感じているか
年間、月間計画や行事等に取り込む 5W1H 誰が いつ どのように	毎週木曜日の集例示に一人が語る 事前に写真をフォルダに入れておく

第2部 座談会

講演を受けて、様々な質問が出された。

言葉について……「エグい」「ヤバイ」は危険！？

(NHKクローズアップ現代より)

感情をうまく表現できない子どもたち。

(感情の意味を理解することが苦手)

経験することが大切である。

物との関わり(操作性)が苦手であると、人との関わりも不器用である。

「だって…」のあとにくる気持ちをうまく説明できるように…。



クラス懇談会の持ち方について

アイスブレイクを効果的に取り入れる。

事前にアンケートをとる。(育ってほしいこと、困っていること など)

小グループで話し合うと活発な意見が出される。その後、みんなで共有をする。

その他、自己評価や仕事の削減等、様々な情報を共有し、有意義な時間となった。

【研修を終えて】

保育の質の向上に向けて「評価」の大切さをあらためて感じた。自園の保育で大切にしていることは何か、どの部分を改善していくかなど、職員全体で共有する必要がある。そのためにも、園内でのより充実した研修、ミーティングが求められる。安達先生から教えていただいた子どもの育ちの「見える化」など参考にし、園全体の質の向上を目指していきたい。また、講演会後の座談会も課題や質問等が出され、実り多い時間となった。

〈全般向け〉教職員研修会

期 日 令和7年8月5日（火）
会 場 山形テルサ（山形市）
記録者 学校法人椎野学園 米沢中央幼稚園
園長 遠藤 誠

【概 要】

テーマ 架け橋期を考えた幼保小連携
演 題 みんなで伴走し、育てよう！ 山形の子どもたち
～架け橋期の教育を考える～
講 師 東海大学児童教育学部児童教育学科 准教授 寶來生志子 氏

【内 容】

1 「子どもを育てる」学校から「子どもが育つ」学校に

子どもたちが安心して自己発揮できる学校を、教職員、家庭、地域の方、みんなで創っていききたい。一人ひとりの子どもを徹底的に大切にし、教職員が子どもたちの伴走者になりたい。そして、「この人に伴走してもらいたい」と思ってもらえるような教職員でありたいと思います。

また、ありのままの自分を受け入れてくれる仲間や居場所が大切です。ありのままの自分を受け入れてくれると楽しいものです。これは、自分にとっても、学生にとっても、子どもたちにとっても、どこでも大切なことです。

2 架け橋期を知ろう

令和3年に文部科学省より年長から1年生の2年間を架け橋期とすることが示されました。今までより長いスパンで考えていくことが求められました。また、中央教育審議会初等中等教育分科会幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会より、小学校においては、架け橋期のカリキュラムの実効性を高めるためにも、スタートカリキュラムの位置付けを再確認し、架け橋期のカリキュラムを踏まえた教育課程の編成・実施・改善を進める中で、スタートカリキュラムの充実を図ることが必要であると示されました。

今までもあったスタートカリキュラムが進化していることを理解していない保育者、教師、保護者がたくさんいます。そのため、小学校入学当初に教師が教え込み、小学校での学習や生活に支障をきたすおそれがあるといわれています。また、不登校に関する調査研究協力者会議の報告書には、低学年の不登校児童への支援については、幼児教育から小学校教育との円滑な接続が重要であると述べられています。

3 「学びに向かう力」を育もう

進化したスタートカリキュラムの内容を理解することで、園の先生方にとって、自分たちの保育がこのままでいいんだと振り返る機会になります。また、子どもに関わる全ての関係者が、立場を越えて知っておいてほしいと思い、教師だけでなく、保護者や民生委員を招いた講演会でも伝えてきました。

しかし、小学校期における個別最適な学び、協働的な学び、社会情動的コンピテンシーの育

成といったことへの関心は高いのですが、園や学校全体として理解することが進められていない実態があります。

4 本当に学ぶとはどういうことか

子どもは安心しないと能動的にはなりません。安心感が、子どもの意欲や主体性、学びに向かう力を引き出すことにつながります。そのためには、先生方の広い心、ゆったりした態度が必要です。「子どもは、学ぶ意欲と学ぶ力を持った有能な学び手である。」という肯定的な子ども観をもち、共感のまなざしと笑顔が大切です。子ども自身が興味・関心をもっているとき、その子のもっている最大限の力が発揮されます。だからこそ、その子がどんなことに興味・関心をもっているかを知ることが大切です。

5 手応え感覚（ポジティブ感情） ～田村学先生の講演から～

子どもたちは、価値ある体験を通して、気づき・手応え感覚を得ていきます。

①充実感 ②達成感 ③自己有能感 ④一体感により次への行動の意欲が高められていきます。そして、次への行動の意欲を何度も経験することで安定し態度化されます。これは、資質能力としての学びに向かう力となるものです。やってみたい、やってみようと思える子を育てる。その子にちょうど良い環境を構成することが求められています。

手応え感覚が体の中にたまっていない、価値ある体験を十分に経験していない状態を無くし、幼児教育において大切にされてきた、やりなさいではなくて、やりたくなるような環境構成を行うことが求められています。

6 奈須正裕先生の講演より

まず、幼保の時期に、自分を発揮し、十分に問いをもって対象と粘り強く取り組んで、いい経験をさせてください。大事なことは、一生懸命対象に関わっていけば必ずいいことが起こるという信念です。これが、学びに向かう力の根源的な力です。園生活の中で子どもたちの遊びや暮らしを培う力、それを太らせて豊かに解釈していき、その中で子ども一人ひとりが自分に自信を持ち、自己を確立し、仲間と共に生きていくという力を育てるのです。「手はお膝、余計なことは言わない、指示されたことをよく分からなくても実行する」など、自分で考えないで、ただ受動的に言われたことに従う子どもに育ててはいけません。そういうことを時代は求めていませんし、子ども自身も、もともと求めていないのです。幼稚園と保育園と小学校が上手く接続するということは、大学や成人に至るまでの日本で育つ子どもたちをどう育てていくかということに強く影響していくことです。幼保小連携ということは、人の一生に関わることを育てているという気概や誇りをお持ちになって取り組んでいただきたい。

7 スタートカリキュラムの役割

学校経営の柱の一つとして大切です。子どもたちの実態を理解し、対応ではなく未然に防ぐという考え方や困った子ではなく、困っている子という見方が大切です。学習する子どもの視点に立つ教育活動への転換が求められています。まず、子どもに聞く、質問することです。それは、教科の学習自体を見直すことにつながっていきます。

小学校で学ぶことを前倒しするのではなく、幼児期で培った力を土台にして小学校につなげるという意識が大切です。ゼロからのスタートではないという発想の転換が鍵となります。これは、小学校の先生だけでなく園の先生方にも分かっていたいただきたい。昔ながらのスタートカリキュラムの発想のままの人がいます。間違っただけの教員の話に、疑問を持てる保育者であ

ってほしいと思います。

8 スタートカリキュラムの進化

幼児期の学び方と児童期の学び方を行きつ戻りつしながら、子どもが主体的に自己発揮できるようにする場面を意図的につくることです。

幼児期の遊びを通した総合的な学びと児童期の自覚的な学び（集中する時間と休み時間の区別がついている）を行きつ戻りつすることが求められています。本来、遊びはアクティブラーニングそのものです。

第1ステージ 平成20年 学校に子どもを合わせるやり方が多かった。

第2ステージ 平成27年 子どもに学校を合わせるやり方「ゼロからのスタートではない」

第3ステージ 平成29年 総則にスタートカリキュラムが位置付けられ、それまでの育ちや学びを引き出すという発想の転換が求められた。

平成29年の学習指導要領改訂において、具体的な体験や活動を通して学ぶ生活科を中心として合科的・関連的な指導の工夫が求められました。また、子どもの実態に合わせて、弾力的な時間割の設定も必要とされました。そして、幼児期の終わりまでに育てほしい姿をふまえたカリキュラムにしていくことが大切です。

9 小学校のスタートカリキュラムをデザインする

あそびタイム 一人ひとりが自分で選んで活動する。子どもを観察して理解を深めることができる。

なかよしタイム 歌に合わせてあいさつをしたり踊りをしたりして安心をつくる時間としている。ここでも、子どもの気持ちを尊重して無理強いすることなく徐々に慣れていくようにする。

わくわくタイム 生活科を中心とした内容。

ぐんぐんタイム 教科等を中心とした内容。

教科を明示しないで、子どもたちの活動の流れを大切にしたい学びをつくることによって、「行きつ戻りつ」の学びを大切にする。

10 園での育ちと学校での学びをつなぐために大切にしたいこと

入学前に、全職員でスタートカリキュラムのミニ研修会を行って理解を深める。

「1年生は赤ちゃんかな。」の問いかけで、在校生の気づきと関わり方を考えてもらう。

入学前に、園での子どもの様子を見せていただく。その中で、子ども一人ひとりの好きなことや得意なこと、困ったときの対処の仕方などの情報をいただき、カリキュラム編成の参考にする。

3月に「ようこそ！恩田小学校の会」を開催して、一人でも小規模園の子どもでも安心して入学を迎えられるようにする。年長児が遊ぶ内容を選べるようにする。

11 動画を見て語り合おう

☆ 子どもが活躍している。机があるかないかの違いだけのように感じ、先生の姿が良い意味で目立たないと思った。

- ◇ 先生は場所が分からないよと言って、みんなで謎を探すワクワクさをつくっている。好きな時間に好きな場所に行ける構成がすごい。子どもの言葉を拾って大人の表現に近づけている。
- ◇ 先生は意図をしっかりとって、子どもは自由に活動して楽しいだろうと思った。
- ◇ 子どもの言葉を拾い上げる先生の心の余裕を感じた。
- ◇ 先生が役者になって子どもの疑問を引き出している。鍵の管理については、学校としての理解の違いがある。そんなことを本当にしてもいいのかと思う子もいると思う。
- ◇ 子どもの疑問に付き合っ、学びを広げている。
- ◇ 園全体でこのような取り組みへの認識を持っていきたい。



12 スタートカリキュラムの充実

スタートカリキュラムに限らず、どんな子どもを育てていきたいかについて、学校全体で共通理解しておくことが大切です。こちらから示すのではなく、子どもに尋ねたり考えられるようにしたり工夫していくことが必要です。これまでの発想の順序を逆にすることを考えたいと思います。

例示したように、入学式から4日目の活動の振り返りを通して、自分たちできまりに気づいていくことを大切にしています。きまりだから守るのではなく、「きまりを守る必要性が分かり、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けながら、きまりをつくったり守ったりするようになる。」ことを目指していきます。

さらに、学びに最適なタイミングを見逃さず、時間割も柔軟に対応していく必要があります。教科等の学びにつなげるためには、単元配列表をつくって、内容のつながりを俯瞰して見通せるようにして、それをつくって改善していくことが大切です。

スタートカリキュラム後の子どもたちの姿には、例えば「12-9」の計算の仕方を説明しようにおいて、自分なりの考えで伝え合っ、学びを深める姿があります。子どもたちのやってみたいを大切に、学びを展開していくことができるように、小学校も幼児教育に学んで共有していきたいと思います。

【研修を終えて】

架け橋期の教育を考える際、平成29年の学習指導要領改訂により総則に位置付けられた小学校のスタートカリキュラムが大きく進化していることを実際の活動場面をもとに再確認させていただいた。幼児期の育ちや学びにおいて獲得している力を引き出して、子どもたちが主体的に自己を発揮しながら学びに向かうことができるように教育活動を工夫改善するという発想の転換が求められていることを理解することによって、自分たちの保育の在り方も見直す機会として捉えていかなければならないことを学ぶことができました。

〈若手リーダー向け〉第1回教職員研修会

期 日 令和7年7月25日(金)
会 場 山形ビッグウイング(山形市)
記録者 学校法人栄光学園 輝認定こども園
保育教諭 工藤 佑里菜

【概要】

テーマ 0.1.2歳児の子どもの理解、幼児期との連続性
講師 社会福祉法人あけぼの事業福祉会 本部マネージャー兼保育アドバイザー
大阪総合保育大学 非常勤講師 安家尚子 氏

【内容】

◎1986年、保育者基準は0歳児=6人に対して1人であった。

家庭では母親と1対1の関わりがありますが、当時の園生活では多数の乳児に対して少人数の保育者で子どもたちを見なければなりません。そのような状況の中で、保育者は必然的に合理的な動き方をしていくことになりました。

やり方としては、R(リーダー)、F(フォロー)、S(サブ)の流れ作業保育です。

→子どもは「この先生じゃないといや」と思い自己主張しますが、思い通りにはならず、「イヤイヤ」と激しい動きで訴えます。その行動が保育者からみれば「困った子」と思われてしまい、必要な愛着行動を受けられない状況(不適切な保育)になっていきました。

◎育児担当制について

乳児保育の第1人者 コーダイ(ハンガリーの音楽家)の方法論

学んだ方法…“育児担当制”→目的ではない【世話をする、乳児(0~2歳児)の担当を決める】

○遊びについて

- ・乳児保育の発達にあった“遊具”や“道具”をそろえること。
- ・集団の中で、1人ひとりの乳児の世話をすることを可能にするような日課をつくること。
- ・1日の中で子どもが自由に遊べる時間を最大限に確保すること。

→ここからの目的…「乳児の人格の尊重」「それにとまなう保育者の人格がどうあるべきか」「遊びの重要性」「乳児の発達を知って関わっているか」

◎基本の遊具8項目

・人形	・車	・容器に入れるもの
・ボール	・積木	・絵本
・布	・容器	

このことを知っていれば、玩具をそろえる時に参考になる。しかし、同じボールでも、0歳児のボールと2歳児のボールは違うので、月齢、年齢、発達、興味にあっているかの項目となる。

- ・多種の活動がそれで可能になっていくか。
 - ・自分から玩具を選択して片付ける(保管)できる置き方ができるか。
 - ・遊びは環境を整えて誰が遊んでも良い。大事なことは、遊びは子どもが決めるということ。
- 遊びの先取りや指示はせず、子どもたちの姿をしっかりと観察し応答することが大切である。

○生活(育児)について

- ・ 0～2歳児の生活、育児は「養護」の部分でもある。食事、排泄、着脱、睡眠、清潔の自立が出来ていないため、大人が関わりながら獲得していく。
- ・ ①乳児保育の方法論(コダーイ)の中には「特定の子どもの育児を担当することが望ましい」とされている。
- ・ ②集団の中で一人ひとりの乳児の世話を可能にする日課を作ることと作らないことでは保育の質が変わってくる。

○育児担当制とは

- ・ 生活の部分を特定の保育者が特定の子どもを決めて場面ごとに世話をすること。
- ・ 1歳児では、高月齢と低月齢の発達の差が大きいので、保育者がどういう風に動けば集団の中でも一人ひとりの子どもを尊重した保育ができるかを事前にフォーメーションを組み、考えておく必要がある。
- これを作ることにより調整がうまくでき、日課も作りやすくなる。

- ・ 育児担当制の解釈をめぐっては価値観の対立がある。長く一斉保育をしてきた保育者は、乳児であっても子どもたちに「こうよ」と、外からの圧力で教えていた。「子どもは未熟でわがまま」「大人が教えていくべき」とそれだけではないが、大人数を少ない保育者でやるにあたり、安全を確保しながら全体を見守るという意味では理に適っていた。
- 今は保育所保育指針に書かれている、「特定の保育士が応答的に関わるようにつとめること」から、子どもの主体性や内側から子どもたちの要求を満たし、子ども個人として満足したことが集団生活へと繋がっていき、子どもの尊厳を守る力のあるものになっていく。

◎養護と教育が一体的に行われる乳児保育の難しさ

- ①子どもの育ちを考えるうえで、たくさんのお世話を必要とする現実=(時間が足りず全員とじっくり関わるのが難しい)
- ②子どもの人格を尊重すること=(一人ひとりとじっくり向き合う時間)との折り合いをつけなければならない。

例) 食事のお世話 毎日何回もおむつを替える→子どもは“いやいやする”。

- ・ 子ども達の人格を尊重してその都度応答的に関わっていくことへの難しさがあるが、乳児がしようとすることを代行するのではなく、していることを尊重してもらいながら援助されることによって、心情、意欲、態度が育っていき自立に繋がる。

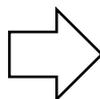
◎乳児保育に必須な「発達を知る」

- ・ 0歳児の発達は、幼児の3倍速である。

- | | |
|--------------|---------|
| ①運動発達 | ④社会性の発達 |
| ②コミュニケーション発達 | ⑤感情発達 |
| ③知的発達 | |

※大切にしたい発達をどのように発達させたいか

- ・ 6ヵ月で 怒り・嫌悪・おそれの感情
- ・ 1歳半で 嫉妬の感情
- ・ 5歳で 大人と同じ感情がほぼ育つ



※感情(情緒)の安定には愛着が大切



◎「脳科学」「発達心理学」の知見から専門職としての関わり

- ・満3歳頃までは、脳の発達から考えて我慢すること、させることは難しい。

前頭前野という我慢を司る脳の神経があり、3歳まではまだ発達していない。

そのため、怖い力や脅して「だめ」と言う子どもが自然とその言葉を分かり、わざと話を流したり、怒られるのが嫌だと思いただ返事をするだけで我慢はできていない状況をつくってしまう。3歳半から少しずつ我慢ができてくるので、0～2歳の間は我慢をさせることは理に適っていないので関わり方に配慮をしないとイケない。

○感情を受け止める。特に、負の感情をしっかり受け止める。

例) 子どもが転ぶ→保育者：「大丈夫！痛くないよ！」の声掛けをする。

→子どもは本当の気持ちを押し込めないとイケない状況になってしまうので、感情が積み重なっていき、いずれ感情が爆発してしまう原因に繋がってしまう。子どもたちのその時の気持ちを丁寧に受け止めて代弁することが大切になる。



○感情の受け止め方

- ・私メッセージ・・・保育者の自分の今の気持ちを伝える
- ・あなたメッセージ・・・子どもに指示・命令をすること

例)食事中にフォークを投げた子ども

○私メッセージ：「フォーク投げて危なかったね。」

→言われた子どもは“考える余白”ができる。「それってどういう意味？」と子ども自身が思い、次に同じことが起きたらどうすればいいのかを考える時間がつくられる。

×あなたメッセージ：「フォーク投げたら危ないでしょ！！やめなさい」

- ・速攻やめるが指示・命令で言われているので、その子が自分で考えて次に同じことが起こった時に、どうすればいいのかが分からなくなり学びにも繋がらなくなる。

◎遊びの見取り方

- ・子どもたちのしていることに様子を見ながらさりげない声掛けをしていき、保育者が多く干渉しないことが大切。

○SOUL・・・silence・・・静かに observation・・・観察し understanding・・・理解して listening・・・耳を傾ける

◎気をつけたい保育あるある

- ・指導案・・・0～2歳児は設定保育はほぼ必要なく、2歳児後半くらいから集団で過ごし遊びを取り入れていく。→(なんでも指導案通りにしなくていい。)
- ・個別指導計画をより丁寧にし、感情発達のことを個別指導計画に入れていくと、より1人ひとりの育ちが見えて次のステップに繋がる。計画よりも週の振り返りを大切にし、SOULに合わせてしっかり子どもを見ていき、「遊びから学んでいること」を“後付けねらい”として考え、ねらいが浮かび上がってこれるように言葉ではなく“モノ”を置き、遊びの環境を整えていくことが大切になる。

○子どもとの関わり方

- ・大きな声で離れている子どもに声を掛ける・・・×
- 言葉を手渡すように声を掛け、子ども自ら行動ができるか様子を見守りつつ必要であれば援



助を行っていく。

- ・すぐやってほしいあまり、手を引っ張ったり抱っこをしてしまう…×
→子どもの人格を尊重し、してほしいことを私メッセージで小さな声で伝える。
- ・1人の子どもの行動を手伝いながら、他の子どもたちへ指示を全体にまき散らす…×
→周りの子どもたちの様子は把握しつつも、今向き合っている子どもの行為に集中する。

◎乳児保育で大切にしたいこと

1. 1人ひとりの愛着を大切に育む
2. 子どもに寄り添う保育者の人格
3. 発達理解による関わりと環境構成
4. 育児行為にも科学的エビデンスが重要で学ぶことは多く深い
5. あそびから何を学んでいるかを読み取り、育ちの素晴らしさを保護者と共有

○0～2 歳児の時に丁寧に関わってもらい夢中になって遊べた子どもは、幼児クラスに進級した時に情緒の安定に繋がる傾向である。負の感情の消化の仕方とうまく付き合う事が大切になる。

【研修を終えて】

乳児保育では、1人ひとりの発達や個性に寄り添い、丁寧な関わりと信頼関係を築くことの重要性を学んだ。遊びは子どもが主体的に選び、保育者はその姿をよく観察し応答的に関わる事が求められ、特定の保育者が継続して関わる「育児担当制」により、子どもの情緒の安定や愛着の形成が促される。感情の発達には、保育者の受け止めと丁寧な言葉掛けが大切であり、特に0～2 歳児は情緒の土台を育む時期として、心情・意欲・態度を尊重することが求められるようである。

SOUL(静かに観察し、理解して耳を傾ける)の姿勢を保ち、子どもたちの気持ちに丁寧に応じる姿勢が、安心と自己肯定感を育てる保育へとつながっていくため、日々の保育でも1人ひとりと大切に接していきたいと思った。

〈若手リーダー向け〉第2回教職員研修会

期 日 令和7年9月8日（月）
会 場 三川町子育て交流施設テオトル（三川町）
記録者 学校法人向陽学園 認定こども園向陽幼稚園
教諭 佐藤 智子

【概 要】

テーマ 幼児期の育ち・発達を理解
演 題 乳幼児の発達理解と保育
講 師 秋田大学教育文化学部 教授 山名裕子 氏

【内 容】

1. 発達をどうとらえるか？

(1) 「できる」「できない」ではない見方

保育の中での発達理解の基本は、「文脈や状況」・「子どもなりの事情」を理解することである。保育者の存在理由は、子どもの味方にある。発達の見方に習熟することが、こどもの味方になることを保障するものであること。

- ・「年齢」が一つの目安にはなるが、目安にしかならない。
- ・「出来るようになること（させないといけな思っていること）」が保育課題になっていないか。



☆発達とは、**子ども**が、外の世界（友達や先生、自然や文化など）とかかわりながら、**自分で新しい自分を作っていくプロセス**。発達とは結果であって、目標ではない。

※内面を理解しなければ、「できる」ことだけを追い求める保育にもなるし、追い詰める保育（保育者も子どもも）になる危険性も…

(2) 一人ひとりの発達過程を理解するということ～一人ひとりの「歴史」物語として～

- ・一人ひとりが育ってきた過程の理解
→保育者とのかかわりで見えてくる理解
- ・年齢の特徴とその子どもの発達過程の理解
→「柔らかいものさし（その子に於じての項目）」としての発達過程の理解
- ・「行きつ戻りつ」する発達過程
→不安が高まったり環境が変わったりすると、出来なくなる。出来なくなったように見えてしまう。
→心の葛藤や揺らぎの理解（子どもなりの事情を理解すること）
- ・できるだけプラスの見方で子供の視点から考えてみる。（※すべてを受け入れる、甘やかすのではなく）
→そうせざるを得ない状況（かもしれない）を理解することも大切。
- ・大人から見てやめてほしい行為は、「受け入れること」が難しくても自我の要求を「受け止める」ことができる。

→受け止めてもらえると安心感と信頼につながる。

→共感的に見ることが基本。

2. 保育を考える上での発達理解とは？

(1) 状況や文脈に依存している保育と発達理解

グループ討議 事例1：「先生あっちにいて」は、どんな意味？

- ・子どもたちだけの世界で楽しみたい気持ちがあり、大人が入ってほしくないのではないか。
- ・先生に内緒で何かをプレゼントするためにすすめているかもしれないから。

○子どもを理解するために必要な状況や文脈の理解が大切。

→なんとなくわかり始めていたり全く分からないわけでもない。大人からすると同じことに見えても子どもにとっては大きく違う。

○大人とは違う子供の思考

→頭の中でだけで整理されているわけではない。感覚として、実感としてあるもの

グループ討議 事例2：C児（5歳児）はマイペースで、設定場面（椅子取りゲーム）の活動になっても自分の好きなことをいつまでもしている。保育者が何度注意しても次の活動に移ることができない。「私」ならどうかかわるか。

- ・「椅子取りゲーム」があまり好きではないから、好きな遊びを続けているのかな。
- ・「椅子取りゲーム」に興味がないように感じられたため、保育者自身が楽しそうに遊んでいる姿を見てもらう。

☆C児の気持ちを考えてみよう！大人（保育者）の都合になっていないか。

- ・見通しをもてないから？
- ・活動の内容がわかっていない？
- ・砂場で遊ぶ方が楽しい
- ・見通せるから「しない」という選択もあるのか

○一人ひとりの遊び・生活のリズムが整っていくことが大切。そこから、集団へとつながっていく。

○具体的な指示は大切だが、子どもにとって分かりやすいものになっているか。

→共感よりも「注意」が先になっていないか。

○クラスの子どもを巻き込みながらかわっていく。

☆気になる子どもの話をする時に、**気にならないところはないか意識しよう**。あるいは、**気にならない子**って、どういうことだろう。そんなことはないのではないか。

(2) 共感的・応答的なかかわりと発達理解

・表出されている言葉の理解だけではない子ども理解

→五感（視覚・触覚・聴覚・嗅覚・味覚）を通して感じていることを大人も一緒に感じる。

・子どもの姿をおもしろがりながら「どうしてなんだろう？」と考える。

・「みんな同じ」「同じことをする」という集団ではなく、一人ひとりの違いを大切にしながら育つ過程を重視する。

→子どもにとって「一緒にいると楽しい」「一緒にいると落ち着く」というような「心地良い集団」としての生活の場を保障する。

○共感的・応答的なかかわりは何歳児にとってもかかわりの基本

例えば… ◇幼児の発達特性の「こだわり」「落ち着きのなさ」をどのように理解しているだろう

か？

◇年齢が高くなるほど「気になること」「注意したくなること」が増えていないだろうか？

◇「集団」として、あるいは一斉に何かをしなくてはいけない時、「できる子」と「そうでない子」という単純な見方が増えていないだろうか？

(3) 遊びの中で理解すること

(保育所保育指針解説・幼保連携型認定こども園教育・保育所要領解説より)

- ・遊びは、それ自体が目的となっている活動であり、「今」を十分に楽しむことが重要。
- ・子どもの諸能力は生活や遊びを通して別々に発達していくのではなく、相互に関連し合い、総合的に発達していく。
- ・遊びにおいて、園児が周囲の環境に思うがままに多様な仕方でかかわるということは、園児が周囲の環境に様々な意味を発見し、様々なかかわり方を発見するということ。
- ・発見の過程で、園児は、達成感・充実感・満足感・挫折感・葛藤などを味わい精神的にも成長する。
- ・園児の主体的な活動のための環境を構成することは、一言でいえば、園児を理解することにより可能となる。

3. これからの保育にとって必要な発達理解とは？

(1) 長い目で、そして複数で温かく子どもを見るということ

- ・短期的な視点ではなく、長期的な視点で考えること。
→子どもの育ちの「見通し」をもつこと。
- ・様々な立場の人が、温かくかかわること。
→担任保育者だけでなく、様々な立場の保育者、保護者も地域の方々、そして小学校の先生も。
- ・乳幼児期の育ちの為の、子どもが子どもらしく過ごせる時間・空間の保障
→人生において、そう長くはない時間。安心できる時間を。
- ・「褒める」より「喜ぶ」こと、子どもの存在そのものを「認める」ことを大切に。
例：「○○ちゃん、○○してくれて先生すごくうれしいよ。」

(2) 子どもの権利を保障するために…

- ・今までの「当たり前」が「不適切保育・教育」になることも
→特に生理現象（トイレ）や身体にかかわることは、気を付ける
→「決まり」「ルール」は、何のため？ 当たり前を見直す。
- ・「集団主義」からの脱却
→「集団行動」「集団統制」を重視していないか？「一緒になることで楽しい」「個が充実」していれば自然と集団につながっていく。
- ・様々な価値観のぶつかりあい
→多様性の理解の難しさと面白さ（子どもについて担任同士の話し合いなど。）
- ・子どもにとって、味方となる「大人」の存在
→時には対等に、時には少し長く生きてるものとして。時にはもがいている姿や悩んでいる姿も見せてもいいのではないか。

4. おわりに…「させられる保育」から「したい保育」へ

日常の保育場を思い浮かべた時「もう〇〇しなければならない」という言葉をたくさん使っているのではないか。もちろん保育は、大人があれこれ気配りをして生活をリードすることが必要であるため、させるということが主体になるのは、当然と言える。しかし、落ち着いて考えてみれば、少なくとも現在思い込んでいることの半分ぐらいはもう少し待っていれば、子どものほうからやりたがることかもしれない。その「したい」気持ちが起きるのを待たず、次から次へと「させる」「しなければならない」と熱心に働きかけるのが、はたして保育だといえるのだろうか。

子どもの心の中に自然に生まれてくる「やってみたい」という気持ちは、やはり、義務としてではなく、心からやってみたいと思っている保育者の存在が大切だ。

【研修を終えて】

『「できる」「できない」ではない見方』という言葉が、心に強く残った。〇〇ちゃんが出来なかったのはどうしてなのか？できたのはどうしてだろう？と掘り下げて考えた時に、新しい見方に気付くことができるのは、よりその子を理解できる素敵な時間になる。また、偏った見方にせず、いろいろな職員に子どもの様子を聞き一人ひとりをじっくりと考え理解を深めていきたいと思った。

〈中核・専門リーダー向け〉第1回教職員研修会

期 日 令和7年8月18日(月)
会 場 山形ビッグウイング(山形市)
記録者 学校法人雙暢学園 認定こども園小桜幼稚園
保育教諭 高橋 愛

【概 要】

テーマ 園の課題の発見と保育者同士の共有
演 題 一人ひとりが安心して語りあえる対話型チームづくり
「自己紹介」と「ふりかえり」がチームの関係性をポジティブに変えてゆく
講 師 学校法人小寺学園 幼保連携型認定こども園はまようちえん 理事長
ECEQ®コーディネーター 秦 賢志 氏

【内 容】

本日のねらい

タイトル：一人ひとりが安心して語りあえる対話型チームづくり

「自己紹介」と「ふりかえり」がチームの関係性をポジティブに変えてゆく

目 的：園の課題の発見と保育者同士の共有

安心安全の関係のなかで語り、ふりかえり、学び合うチームづくりを考える

目 標：チームの関係性がよくなることで、保育の質を高める力になると実感する
そのために参加者がすること→主体的に参加し、楽しんで学ぶ

○語るっておもしろい

参加者への事前アンケート

1. 保育の振り返りと評価、何について学びたいか。
2. 保育の評価において悩んでいること。

・共有系

誰が、誰と、何を、なぜ、いつ、どのように共有するのが重要。

・ふりかえり系

反省は、できなかったこと、ふりかえりは、今日良かったことをさかのぼって考えること。

・視点、多角性系

様々な視点で一人一人を尊重できる。(理想)

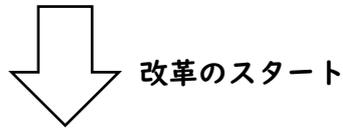
深く語ることが求められる、聴くことのスキルを磨くためには、...

「語りにくさ」から始まるチームづくりについて、はまようちえんで実践してきたことを基に探っていく。



○改善前のはまようちえん

問題意識として、目的、目標、保育観、方針、意味の未共有。
じぶんたちは何者であるか、知らない。知ろうとしない。
アイデンティティとミッションの欠落。保育を語るこのできない保育者。
一人ひとりのメンバーの、**チーム観の不在**。



～到達目標～

自ら学び、互いに育ち合う職員集団づくり

必要なのは「**チーム**」という考え方。(ひらたく言うと仲の良さ)
主体的に学び続け、自らの成長を求めるチーム。目指したのは、チームの質の向上。
そのためにやったこと：対話を止めない。
↓そのために

○ファシリテーターに改革

基本姿勢（まずはチームを知る） わからない→教えて欲しい。



ファシリテーションスキル＝ニュートラルな問いかけ。

(なぜこれはこうなっているのか？もしこうしたら具合の悪いことはなにか？)
スタッフへの問いかけを通して集まったデータをもとに、アイデアを提案。
現場が納得して自ら動く。押し付けられるのではなく、自己決定、主体性。
変えることができるもの。変えなければならないもの。(何のためにやっているのか一つ一つ考えていこう) 1番変わることができるのは、園長(の考え)、スタッフ

○ファシリテーター・リーダーシップの極意

1. 命令でなく、**問いかけによる対話**。
2. 到達目標ではなく、**方向目標**での提示。
3. **ビジョン** (理念や夢) を語る。
4. 上げたいのは仕事の成果ではなく、**チームの関係性**。
5. 先導者ではなく、**伴奏者**。
6. 納得と共感の**ミッションをわかちあう**。
リーダーとメンバーは、仕事(課題)を前にしてフラット(平等)である。
→ニュートラルな関係性

○チームの成長段階モデル

形成期 (0～3年) チームの目的・目標・ミッションが不明。メンバーの思考はバラバラで関係性が脆弱。課題意識が希薄。お互いを分かり合うことが大切。

混乱期 (3～9年) チームの目的・目標・ミッションがつくられていく。

メンバーのモチベーションが上がり意見が活発化。既存の課題に取り組むチームの協働性は高い。目標：メンバーの意欲の維持。

統一期（9～11年）チームの目的・目標・ミッションがメンバーに共有される。

メンバー相互の信頼関係が構築される。積極的に新たな課題に取り組もうとする。

目標：チームとしての課題解決へのチャレンジ。

機能期（12年～）メンバーがチーム目的・目標・ミッションを理解している。

メンバーが常に互いの成長をコミットしている。自発的に課題を発見、問題解決に向かう。

目標：持続可能なチームとメンバーの成長発展。

○対話を止めない（場づくりが大切）

そのために、はまようちえんでの取り組み

はまようのしゃべり場メニュー

1. 園内研→キックオフ合宿、階層別研修
2. 学期ごとの個人面談
3. 終礼からEMTへ→itime（一人一人、自分が気づいたこと、面白いことなんでもいいから話す。）
4. 反省会からふりかえりへ→学びシュラン®（自己評価）
5. 期のねらいづくり（役に立つねらいづくり）
6. 公開保育
7. Eat&Talk→HFD、学期毎の打ち上げ、ハタろう会
8. 雑談（好きなこと、悩んでいること等対話1番大事）

最も重要な園内研修は、自己紹介。→保育の質が高まる。

→自分が何者であるか、お互いのことを知り合う。

○チーム作りの原点となるオープンウインドウ（自己紹介）→やり続けることが大切。

ねらい お互いをちょっと深く知り合い心理的安全性を高める。

学びシュラン®

目的 自分の目標について振り返り、良さや課題に気づく評価をすることで、保育の質の向上につながる。（個人のふりかえり、部門のふりかえり、園としてのふりかえり、園としての目標設定）

KPT

Keep（できたこと、続けたいこと）

Program（課題、問題）

Try（具体的な行動目標）

→なぜこの手法でおこなうのか？ A：現場の教職員チームにとって「誰もが簡単に実施でき、園の質の向上につながる評価（方法）として実績がある。

○浜私幼モデルの何が良いのか？

全員参加型

一人ひとりの自分事感が増す

お互いをわかりあえる（対話を通して自己開示とフィードバック）

チームに一体感が醸成される

義務感ではなく、必要感からの評価になる

なんとなくではなく、具体的な目標が定まる

「教える専門家から振り返りの専門家へ」「子どもの姿をまんなかに同僚同士が語り合うことから始まる評価」

自己評価サイクルを回し続けることによってチームの風土が醸成される→語り合う文化

○グループワーク

5～6人のグループに分かれ、オープンウィンドウ（自己紹介）とKPTを体験。

（はまようちえんで使っている書式と同じもの実際に書いて、それを元に話し合う。）

《グラウンドルールを意識する。》

- ・人の話をよく聴く。自分事になって聴く。
- ・思ったことを素直にだして、ホンネで書いて話す。
- ・話す長さ（時間）を決めて平等に話す。
- ・書いた用紙を見せながら話す。
- ・KPTの話す順番は固定しない。
- ・書き方は自由。絵を添えてもよい。
- ・人の話を遮らない、腰を折らない、ツッコまない。
- ・発表を批評したり批判したり優劣をつけたりしない。
査定評価に用いない。
- ・質問するときは「質問していいですか」と相手に尋ねる。
- ・質問で答えられないのはOK。→答えられないことを非難しない。
- ・楽しんでする。笑顔をたいせつに。



【研修を終えて】

対話することがチームづくりの中で重要であることを改めて感じた。自己紹介をグループワークでやってみて、短い時間で相手のことを知ることができ、自分とも向き合える時間となった。自園でも、園内研修等で取り入れて新たな発見や対話が生まれるきっかけになると感じた。今回の研修で学んだことを活かして、よりよい保育、チームづくりができるようにしていきたい。先生の話聞いて、やってみたいな、取り入れてみたいなとわくわくする気持ちになり、楽しく学ぶことができた。

〈中核・専門リーダー向け〉第2回教職員研修会

期 日 令和7年10月22日(水)
会 場 山形ビッグウイング(山形市)
記録者 学校法人キリスト教若葉学園
認定こども園若葉幼稚園
保育教諭 柳田 宏美

【概要】

テーマ 学びの土壌を支える園文化の醸成
演 題 自園の良さと課題を理解した上で、園全体で改善に努める
講 師 学校法人札幌豊学園 認定こども園札幌ゆたか幼稚園 理事長・園長
ECEQ®コーディネーター 丸谷 雄輔 氏

【内容】



I) 幼児教育の本質を探る～良質な幼児教育とは？～

- ・養護を通して育まれる自己肯定感
 - ・一人ひとりの発達や特性に応じて可能性や資質を引き出す
 - ・社会情動的スキル(非認知能力)の育ちを重要視する
 - ・「遊び」を発達支援上の重要な“価値”として位置付けている
- ↳ 早期教育や小学校教育の前倒しではない幼児期の特性を踏まえた教育

- ・「環境を通しての教育」の意味(“ねらい(意図)”のある間接的な教育)
↳ 保育者は自発的に関わりたくなるような「環境」を整える
- ・直接的・具体的な体験の保障
↳ 言葉(概念)の理解が発展途上なため…
- ・社会文化的価値との出会いを通して育む社会性
- ・保育の営みは…

子ども(社会)の“今”と“未来”の両方の幸せを願って、子どもの心持ち(内面)を捉えながら、「共感的」な姿勢と「新しい問い」を創り出すプロセスを繰り返し、「子ども」と「保育者」が織りなす宛らの生活において、互いに育ちあう営みである。

「共感的」⇒子どもに考えるような声掛け、新しい答えと一緒に考えるような問いかけ。

幼児教育は「子どもの想い」と「大人の願い」の両方を大切にした教育である。

自立心を育む⇒ゆたかな心を育てる

集団の中で人と人が関わり、遊びを通して色々な気づきがある。遊びや生活の中で他者と関わり合うことで自他と向き合う。まだ知らない事に出会い、考えたり、人と協力したりすることで自分作りをする。子どもたちは色々な環境を通して遊び込む事で賢くなる。

目の前の“今”“この瞬間”の子ども的心持ちを捉え、すぐそばにいる私たちが介入するか、見守るか、そこを見極める事に保育者の専門性を感じる。子どもたちが日々の保育の中で主体的

に遊びに関わり、自己表現することで生涯にわたる人格形成の基礎が培われる。

「遊び」は重要な「学習」で幼児期は遊びを大切にされた教育。幼児教育は、社会性を育む心の教育である。

II) “保育が育つ”園の在り方～幼児教育の本質を探り続ける営み

- ・新しい園文化の醸成（時代の変化を捉えて新しい価値を創造する）
- ・目指したい幼児教育の在り方（遊びの価値の創造）を模索
- ・「子ども観」「保育観」の問い直し
- ・教育課程の再編成⇒「保育の在り方の再考」「行事の見直し」etc
↳理想の幼児教育の在り方を探り続けながら当たり前の日々（保育）を問い直し続けること…
“保育が育つ”園の在り方を模索…

～認定こども園札幌豊幼稚園が大切にしたいこと～

幼稚園文化と幼稚園らしさを大切に、子ども側の立場や視点を第一に考えた「札幌ゆたか幼稚園スタイル」を基本とした認定こども園を…

- 教育目標**
- ・ゆたかなこころ→自分を信じて他者を信じる心
一人ひとりの気持ちを受け止め、自己肯定感の根っこを育みます。
 - ・たくましいからだ→意欲的な生活を送るための身体
全力で遊び込み、意欲的に生活を楽しむ中で、心と身体の調和を図ります。
「やりなさい」ではなく「やってみよう」と思える環境
 - ・たどしいかんがえ→思いを巡らせ、他者と共に考える力
「自己選択」「自己判断」「自己決定」「自己表現」ができる環境を保障します。
“そうだね”“どう思う？”→共感と共有を…

育てていきたい子どもの姿

“ゆたかなこころを育てる”→豊かな感性（表現する力）

モットー 自分らしく周囲の人と共に生きる喜びを見いだせるよう、子ども達一人ひとりの「心の根っこ」を支える。



私は“わたし”でも私は“みんなの中のわたし”

一人ひとりの「その子らしさ」と「心の動き」を大切に…

（その子らしさを見つめ、成長のきっかけとなる環境の整備と適切な助言を…）

自分らしく生活を楽しみ、ゆっくと友達の影響を受け入れていく…

「私は私」の心→「自己主張」「自信・自己肯定感・自分らしさ」

「私は私たち」の心→「協調性」・社会性」「信頼感・安心感」

両方を併せ持った心のありよう⇒**主体性**→自分の力でバランスをとれるように…

III) ミドルリーダーの立場と役割～保育の質を高め合う保育者集団の在り方～

学びの土壌を支える園文化の醸成のために… ミドルリーダーとは…

- ・園の課題に向き合い続ける存在 保育者の専門性を高める存在
- ・保育者の質を問い直す（資質向上のプロセスを探る）
- ・保育の質向上を目指す保育者集団の在り方を模索する

- ・“チーム保育”を創造するための新たな保育者集団の構築
 - ↳保育者として専門性を高める園文化の醸成
 - ↳重層的な学びの土壌の必要性
 - ミドルリーダーが中心となり、「園内研修」を活用して“学び合い”を支えていくこと…
- ・**保育の変革**
- ・園長を中心に理念と変革のビジョンを持ちマネジメントする
 - ↳ささやかな変化を継続すること…（試行錯誤）⇒不易と流行 昔からやっている行事などの見直し（本当に必要なのか？）

なぜ保育の見直しが必要なのか？

～高度成熟社会を生きる子ども達～ ～新しい時代に求められる教育の価値～

- ・変革を推進する管理職（リーダー）の存在が必要不可欠
- ・ミドル（中堅）層が“様々なリーダー”の役割を担うことが重要
 - ↳「断層的リーダーシップ」と「分散型、協動的リーダーシップ」のバランスが大切
- ・園外との繋がり（外部研修、他園の見学、団体との繋がり）
 - ↳自分自身または自園を客観的且つ俯瞰的に捉える
- ・園内風土（文化）構築と働き方（働きがい）改革、人材育成
- ・「保育の見える化」の工夫
 - ↳専門家の視点で丁寧に保育を伝える（幼児教育の理解）

IV) 学び合いの価値を創造し可能性を探る～園内研修の可能性を探る～

【園全体で保育の質を追い求める保育者集団を目指して】

- ・子ども理解の質向上に向けて（**保育の感性を磨く**）⇒保育は生もの⇒今日の子どもの姿を自然に話し合えるのがよい
- ・保育者集団（チーム）の「子ども観」の接点の共有とズレの修正
- ・保育者相互の学び合い（同僚性の中で信念を共有する）
- ・子どもの姿を中心（子どもを主語）に語り合う文化の形成
 - ↳日常の振り返り⇒何を振り返るのか？振り返りの方法とは？
 - ↳具体的な場面での対話が大切（決まった答えが一つもない）
 - 問う→学びの時間→明日の保育を作る＝保育が育つ
- ・PDCA サイクルの精度を上げる（4人グループがよい）
 - ↳記録、対話、省察、評価、計画→「プロセスの質を向上」〈園内研修〉＝学び合いの価値を創造する営み
- ・目的は“保育の質の向上（子どものより良い育ちを支えるために）”
 - ↳「保育観（子ども観）」の共有、保育のスキルアップ
 - ↳教育課程で描いている子どもの姿を目指した保育実践のために…
- ・キーワードは“対話”“チームワーク”⇒「協働型園内研修」
- ・豊かな“学び合い”を支える環境作り
 - ↳**自主性を尊重する（必用感に基づいて…）**→自分の思いを言語化していく
- ・小さな変化に価値を置き、決して正解志向に陥らない（**正解なき課題**）
- ・計画性を持ち、長期的な目線で“学び合い”を支える
- ・保育者個人のキャリアアップイメージ



↳「子どもを知る」⇒「保育を知る」⇒「理想の保育者をイメージする」⇒

「子どもを理解する」⇒「保育を理解する」⇒「同僚と保育を語る」⇒「同僚と保育を創る」→
ミドルリーダーを中心にキャリアサポート体制を整える

・理想の保育者集団とは？

↳同僚性を創出する（互いを尊重し、尊敬し合える関係性）

↳それぞれが“志”を持ち続け互いに高め合える環境が大切

“学び合い”を支えるのは「リーダーの役割」

一人ひとりの子どもの成長を願って…学び合う保育者集団が幼児教育の現場を支える

・園内研修の可能性を探る～毎日取り組む小さな園内研修～

「今日の保育」「10分研修」「月のねらいと子どもの姿」「エピソード記述」「ポートフォリオ～発達の理解～」「自己評価～課題～共有」「文化・風土」

～保育者同士が共に成長し合う場を目指して…～

日常の保育の振り返りが園全体で学び合える環境になり、結果的に一人ひとりの保育者が常に高い意識を持ち続けることに…

【質の高い保育者集団を目指して学び続ける…～求められる良質なミドルリーダー像】～

自分らしさを大切にしながら常に**向上心**を持ち、多様な体験を通して**視野**を広げ**柔軟な思考**を養う姿勢が大切である…社会や園の組織の中で中核を担う一員として**責任**を持って**役割**を果たし保育者間の**対話的関係の構築**を図り**同僚性**を発揮し合いながら**学び続ける保育者のモデル**として歩み続けよう…

【子どもへの眼差し…～学びのプロセスを大切に作る保育者を目指して～】

目に見えない心をいかに見ようとするか…

一人ひとりの子どもの**良き理解者**として、専門性を高めていく**プロセス**を歩み続ける…

子ども達の日常の何気ない営みに**沢山の学び**が潜んでいることを理解し、見逃すことなく、一瞬一瞬を大切に**子どもの足跡を肯定的に捉え**、**子どもの姿を面白い**保育者であり続けたい…

【研修を終えて】

改めて自園の教育課程を見直し時代の変化を捉えた新しい園文化の醸成が必要と感じた。良質な保育を目指しミドルリーダーが中心となり、毎日の保育を振り返り保育者同士が同僚性を高め、明日の保育に生かせるように。社会を担う子ども達の今と未来の両方の幸せを願って子どもの心持ちを捉えられるような保育者でありたいと思う。

保健衛生・安全対策研修会

期 日 令和7年5月26日(月)
会 場 山形県私学会館(山形市)
記録者 学校法人安達学園 河北幼稚園
教諭 保角 麻美

【概要】

テーマ 健康的で安全な園生活の提供
講師 白梅学園大学 名誉教授、小児科医 小林美由紀 氏

【内容】

◎発育と発達

- ・ 2歳未満・・・水平身長計測
- ・ 3歳～・・・垂直身長計測

※定期健診は1年に1回、
計測は1カ月に1回実施している園が多い

*発達曲線を基準にして判断(身長体重、成長ホルモン、甲状腺ホルモン)

- ・ 急な体重の増減は要注意!!

⇒⇒⇒食生活の見直しの必要性はないのか ※ご兄弟はいかがですか??

外遊びの推進

※園でもできる対策

家庭環境の変化はなかったか

※変わったことはなかったですか??

- ・ 発達の偏りとは・・・3パーセンタイル値未満のとき

グラフを見せながら保護者へ伝えるのが効果的

97パーセンタイル値を超えるとき
2つの曲線を横切るとき



○子どもの病気

*体調不良時の観察ポイント

- ・ いつもと違うか全身を見て判断する。
- ・ 食欲、睡眠、活動性に問題がないか、観察する。

熱性けいれん・・・5分くらい続く(10分以上止まらなかったら救急車)

白目、唇が紫色になる、泡をふく

激しい嘔吐

窒息の防止(横を向かせる)

※ダイアップの使用については、眠気が出るので使用後は時に注意が必要。

喘息、気管支炎・・・咳が続く時は、体を起こして背中を叩く。

部屋を加湿する。

水分を飲ませる。

「大丈夫？」に反応しなくなったら、危険のサイン

○感染症

*施設における感染対策

- ・スタンダードプリコーション（手洗い、マスク、咳エチケット、物品の個別化、手袋）
- ・季節ごとの感染症は R7～戻りつつある

*予防

- ・子ども達への指導（手洗い、咳エチケット、生活習慣）
- ・吐物の処理の仕方
- ・日々の消毒の仕方
- ・感染症の流行状況の情報共有
- ・スタンダードプリコーションの徹底

◎乳幼児の安全な園生活

○事故

*緊急時の役割分担

- ・どんな場面でも対応できるように全員がそれぞれの役割を理解し、動けるように練習しておくことが、いざという時に役に立つ

緊急時・・・呼吸確認 乳児・・・腹式呼吸なのでおなかを見る

幼児・・・胸式呼吸なので胸を見る ※胸骨圧迫

窒息・・・声が出せない。 ※胸部突き上げ法、背部叩打法、腹部突き上げ法

食事の姿勢、大きさ、スピード、集中度、睡眠時の呼吸 に注意

出血・・・圧迫、心臓に近いところをしぼる、寝かせて足を高くする、水を拭きとる

やけど・・・流水でそのまま冷やす、水膨れの時にはビニールかラップで保護。ガーゼは NG
アナフィラキシーショック・・・エピペン（中身・・・アドレナリン）の使い方を全員で理解してから預かる。模擬練習が必要

熱中症・・・高温多湿を避ける、熱中症計の活用、短時間で死に至る

○安全な園生活のポイント

- ・全職員が応急処置を行えるような知識を持ち、急変時にも役割分担を行いながら対応できる体制づくりが、子ども達の安全を守る手段となる。
- ・子ども達の目線で園内外の環境を見回ることにより、危険な個所を把握したり、安全な環境を整える。
- ・危険な事は禁止にするのではなく、子ども達自身が危険に気づいたり、教え合いながら自分の身を守る知識が育つ関り（絵本や紙芝居 等）を取り入れることが大事。

【研修を終えて】

コロナ感染を経験し、手洗い・うがいが習慣化している事や換気や消毒が定着した事で感染の広がりが少なくなったと感じている。しかし、マスクの着用が任意になった事で、季節ごとの感染症の流行も増えてくると思うので、園内の感染予防は引き続き行っていきたい。

また、園生活の中でいつだれであっても、緊急場面での応急処置ができるような知識の必要性を感じた。安心して登園し過ごせる環境を意識して提供していきたいと思った。

食育研修会

期 日 令和7年6月23日（月）
会 場 山形ビッグウイング（山形市）
記録者 学校法人酒田幼稚園
認定こども園酒田第二幼稚園
教諭 柿崎 美里

【概 要】

テーマ 健康的で安全な園生活の提供
演 題 子どもの食事と食育
講 師 上越教育大学大学院学校教育研究科 教授 野口孝則 氏

【内 容】

〈食育として何ができるか〉

- ・日常保育の中に食育はある。
自園調理の場合→調理用に運ばれてくる食材があるため、園で育てていない食材の実物を見せることができる。
*実物を見せること…野菜や魚のどの部分を食べるかに興味をもつ姿に繋がる。
「食べるのがかわいそう」といった命の大切さを感じる。
そのものの大きさ、重さを感じるができる。
- ・食材の宝庫である、スーパー、道の駅、産直等に子ども達と行ってみる。
- ・子ども達が食べている食材を知る。
目で見えるもの、鼻でにおいを感じられるもの、口に入れて口の中で硬さや柔らかさ、すりつぶしやすさを感じられるものを子ども達は感じながら食べることができる。
- ・固い食材には、事前に伝えることで子どもはしっかり噛んで食べるようになる。
固い食材は事前に調理員から保育士に伝えてもらうことで事前に子ども達に知らせることができる。

〈苦手な野菜がある〉

- なぜ苦手な野菜があるのか
 - ・子どもは味覚が大人より鋭いため、苦手な食材があるのが普通。
(特に苦味、酸味)
口に入れ、苦み、酸味を感じたら毒の可能性があると反応し、飲み込まないよう口から出すという本能で出している。(硬さに関しても、硬いものは食べてはいけないものだと思います、出すという行為になる)
- 総称して「野菜苦手」と言っていないか
 - ・子どもの苦手なもの（1つ、2つの野菜）をできてないところ探し（増やし）をしている大人がいる。
 - ・意識して減らしてあげる。食べられるものを褒めてあげる。



- ・ 食べること（苦手な野菜があること）も一人ひとりの個性である。
- 食べるということを学ぶ
 - ・ 苦手な野菜の食べ方を教えていくということ。酸っぱさ、苦みのおいしさを伝えていく。
 - ・ 子ども達が「食べることができる」ものを増やす。
 - ・ 食べる楽しさを味わってもらうことが大事。
 - ・ 食べやすい食材から、その食材も食べやすい調理をして、子どもに提供をする。
 - 苦手なものを食べることができた！という喜びに
 - 例) ほうれん草を少し茹でこぼす→食べることができるほうれん草に
- 園では食べるけど家では食べない
 - 家…大人味。食材の大きさが大きめ。
 - 園…大きさは小さく刻み、味は薄味になっている。
 - 硬さもゆっくり煮込んで柔らかくなっていることが多い。
 - 保護者にも伝えていく。大人が子どものために工夫する。
 - 「がんばってたべなさい」は食べることが努力の目標のひとつになってしまっている。
 - 子どもに食べることの喜びを伝えていく。
- ミニトマトの除去をすることで安全な給食になるというのは間違い
 - 食べ方を学ぶことが大事。食べ方が分からなければどこでも事故は起こりうる。
 - 食事をするということは食べ方を学ぶということ。

子どものために
さりげなくやっていること

〈コロナ禍で食育ができない〉

毎日の食事の提供こそが食育であり、食事が提供されていることが子ども達への最大の食育実践である。

○ イベント型食育について

- ・ イベント型食育とは、食育に対する「気付き」や「きっかけ」を強く与えてくれるものである。
- ・ ねらいを定める。

「以前からやっているから」という食育ではなく、何のために行うのか、子ども達のどんな成長につながるのかを考える。

例) 芋掘り…数か月で何メートルにもなるさつま芋。なぜ大きくなるのか。

長いつるの先に大きい芋があるのか？短いつるに大きい芋があるのか？

掘り方は教えた方がよいのか？（仮説を立ててみる）

*もし、失敗したら…

大人がフォローする。

失敗したことを次どうしたらよいか考えてみる。

1個目より2個目、3個目が上手に掘れた！という経験

芋掘りは芋が見えないからおもしろい！

何に気付き、何を学ぶきっかけになるのか。
マニュアル人間をつくる場ではない。
いろんなアイデアが出たり、チャレンジしたりする力を養う。

〈グループでの話し合いより〉

○ 栽培活動について

- ・ 栽培を通して、知ることができたからこそ育てたものが好きになることに繋がる。
- 触った時の感触、冷たさ、大きさは実際に見て触れてみないと分からない。

- ・スーパーに売っているまっすぐな野菜だけではないことを知る。(プロとは違うこと)
曲がったきゅうりをおいしく食べることに意味がある。

○センター調理でもできる食育

- ・見えてないからこそ想像を膨らませることができる。献立のメニューから考えてみる。
例) 献立名「野菜たっぷりお味噌汁」
何の野菜が入っているかな? たっぷりだから野菜は何種類かな?
- ・蓋を開けるまでにできることがある。

○バケツリレー方式

- ・一列に並んで給食室まで運ぶ方式。
- ・園庭でキャベツや白菜、レタスを育てなくても、食材を理解する食育ができる。
- ・朝の時間でも子ども達全員に経験させることができる。
- ・野菜一つ一つの重さや大きさの違いを感じられる。
(すべての野菜は一つ一つ違うということ)
- ・調理員から「ありがとう」という言葉をかけてもらえる。
→子ども達の嬉しさに繋がる。



○くいしんぼうの保育者を演じる

- ・食べるということに興味をもつ。いろいろなものを食べてみたいと思うこと。
- ・蓋を開ける保育士の顔、表現を大事にする。喜びの表情で大人が手本を示す。
例) 「うわ〜」(言葉いらず、喜びの表情) →食べたい気持ちを食べる前に高める。
- ・お腹が鳴ることは恥ずかしいことではない。
例) 先生、お腹ペコペコだ→子どももお腹が減ってくる

〈食べたい気持ちを高めるために大人ができること〉

○食べることが大好きな子が増えて欲しい

- ・食事は生きることに大切。
“体にいいから”という理由では子どもは健康なので気付かない。
“美味しい” “おなかいっぱい” “お腹が満たされる”ことは子どもも実感できる。
→食べて生きるを実感させる。

○お腹がすいて食べることこそ、おいしい食事の基本

- ・お腹がすく=食育である。
- ・午前中の遊びや過ごし方を工夫することで、お昼に向かう気持ちを高めることができる。
例) 体を動かす、頭を使う、ダンスする

○家庭でできる食育

- ・コロナ禍でも食育を続けた(食事を提供し続けた)というのは意味があること。
- ・「親子一緒に料理」は家庭でできること。
- ・保護者の方が調理している姿、準備している姿を見せていることが食育に繋がる。
- ・食べるということを嫌いにならない食事の場。

お家にいてもお腹をすかせればいい。お腹がすいて食べるご飯が基本。
怒られながら食べるご飯はおいしくない。

毎日食事こそ食育である

【研修を終えて】

研修に参加して、食育とは毎日の食事と繋がっていると感じる事ができた。受講する前は、食育とは子ども達と調理をしたり、栽培をしたいという活動を通して行うことだと考えていたが、毎日の調理で使う野菜をみんなまで運んで、重さや形を感じたり、給食の蓋を開ける瞬間に子ども達の食べたい気持ちを高めたりという日々の保育が子ども達の食への関心を高めていくことに繋がっているのだと知ることができた。“野菜を食べない子”ではなく、“この野菜が食べられる”という視点も新たな視点だったので、子ども達の個性を認め、食べられる食材を増やしていけるような援助をしていきたい。日々の食事を大切に、保護者の方と一緒に子ども達の楽しい食事を支えていきたいと感じた。

新規採用・若手教職員研修会

期 日	令和7年6月17日（火）
会 場	山形ビッグウイング（山形市）
記録者	学校法人羽陽学園 羽陽学園短期大学附属幼保連携型認定こども園大宝幼稚園 保育教諭 伊藤 藍加／佐藤 杏優

【概 要】

テーマ	組織の一員としての自覚と役割
演 題	たたずまい教育1年生 ～社会人の第一歩～
講 師	株式会社日本総合音楽研究発達心理研究所課長 小松朋子 氏

【内 容】

1. 集団の中の自己認知「自立」

○職場、組織とは

職場とは「仕事をする場である」。園の保育目標に向かって素早かつ確かな行動（仕事）ができ、自身の理論に裏付けさせていくことでより良い保育者になることができる。

組織とは、社会通念や一般常識等を踏まえたうえで、目指す目標を同じくする者同士が秩序正しくつくりあげた強固な集合体である。そして、保育園・幼稚園は就学前の乳幼児を預かり、就学に充分耐え得るような教育を施すことを目的としたひとつの組織である。



○集団と保育

連盟では幼児期の発達過程で、家庭を第一集団・地域の友だちグループを第二集団・保育現場を第三集団と呼んでいる。

- ① 家庭（第一集団）は人間の「心」を創る巣
- ② 友だちグループ（第二集団）は遊びやけんかを通して仲間との交わり方や遊びの知恵、共同心が育つ場
- ③ 保育現場（第三集団）は遊びと学びの融合によって心と体を創り、豊かな感性を育みながら個を確立する場

保育現場は自らの機能に加え、家庭と、地域の友だちグループの機能を融合一体にした環境を構築しながら、ケースワーカーとしての心や技を身につけていく必要がある。

2. 判断力 正直・すなお きびしさに耐える心

○職場での基本心得

職場での心得として、「人の話を良く聞く」「呼ばれたらすぐに返事をする」「誰よりも先に動く」の3つを意識して守ることが大切である。

また、下記の項目を意識し、努力目標を確立していく。

- ① 園の基本方針を正しく理解する
園の基本方針・保育目標等を正しく理解し、園のカリキュラムを把握する。

職場で強固なチームワークを作り、目標に向かって努力していく。

② 先輩から学ぶ

わからないことは積極的に聞き、不明な点を残さない様にする。
また、知ったかぶりをしないで謙虚な気持ちを忘れない事が重要である。



③ 仕事に早く慣れる

考えるよりもまずは行動をして実践的な経験を積むことに徹する。

④ 仕事を創造的に行う

先輩たちの助言を素直に受け入れ、ひと工夫加えてオリジナルティ溢れる内容を創り出せる柔軟性が必要である。

⑤ 報告・連絡・相談をする

失敗や間違いが起きた時は速やかに伝え、素早く事後処理を徹底して行う。

1. すぐに事実を先輩・園長先生に報告 …指示を待つ
2. 素直に謝り、指示を受ける …自分の非を認める
3. 自分のミスは極力自分で処理する …責任を持つ
4. 処理の結果を報告する …いつまでも迷惑をかけない
5. ミスの原因をきちんと究明する …自分自身への問いかけ
6. 二度と同じ失敗をしない …胆に銘じ、次の成長へのステップにする

⑥ 身だしなみ

社会人の第一印象が大切である。園の顔という自覚を持ち、たたずまいを意識していく。

⑦ 人間関係

職場でのコミュニケーションは職場の活性化を図る意味でも重要な役割を果たしている。

誠意ある対応、ひたむきな努力、爽やかな笑顔が良好な人間関係へと繋がり、子ども達も引き付けられていく。

3. 知性言語

○知性言語（音声語）とノンバーバルコミュニケーション（体語）

「体語」とは、話し言葉が発音される時、同時に顔や体全体からにじみ出てくる表情そのもの（意思感情）を表す。子どもは大人の口形を見て発音・発語を学ぶ。

○話し方の基礎知識

（1）話し方のポイント

- ① 話の目的や内容を把握し、事前に要点を整理する。
- ② あらすじを組み立てて、明確に感情豊かに表現する。
- ③ はっきりと発声し、語尾を明瞭にする。
- ④ 自分の癖を具体的に把握し、直す努力を怠らない。
- ⑤ 言葉使いに注意し、言葉には常に関心を持つ。



（2）言葉の使い方

敬語の種類には「尊敬語」「謙譲語Ⅰ」「謙譲語Ⅱ（丁寧語）」「丁寧語」「美化語」の5種類がある。下記のように使い分けがされるため、立場や状況に応じて使い分けながら相手を敬う気持ちで接することが基本となる。

敬語3分類 (旧)	敬語5分類 (現)	敬語の型	意味
尊敬語	① 尊敬語	「いらっしゃる・おっしゃる」型	相手の動作などを高めることで、その人物に対する敬意を表す。
謙譲語	② 謙譲語Ⅰ	「伺う・申し上げる」型	自分の動作をへりくだることで相手を高めて、その人物に対する敬意を表す。
	③ 謙譲語Ⅱ (丁寧語)	「参る・申す」型	自分の動作をへりくだることで丁寧な表現をする。高める相手がない場合に使う。
丁寧語	④ 丁寧語	「です・ます」型	丁寧な言葉づかいによって相手への敬意を表す。 高める相手の有無を問わず幅広く使う。
	⑤ 美化語	「お酒・お料理」型	上品な言葉づかいによって相手への敬意を表す。 高める相手の有無を問わず幅広く使う。

※参考：文化審議会答申『敬語の指針』（平成19年2月2日）

（3）起承転結を考える

話を上手に組み立てるためには起承転結をよく考え、より明確に自分の意見を知らせる配慮が必要である。下記の事例のように、指示された仕事内容に対して冒頭で結論を述べ、次にその理由を明確な箇条文で補い、さらにそれに対する対処の方法を私見として付け加えると良い。

【A例】先日指示を受けました「送迎バスの運行ルート」について報告いたします。いろいろ調べました結果、〇〇主任先生より提示がありましたルートは、1時間で回るのはたいへん厳しいという結論となりました。その理由としては、①極端に離れた地区から6人の園児を乗せなければならないこと ②近道と思われるルートが、つい先日一方通行になってしまったこと ③国道△号線とバイパスとの交差点が朝のラッシュでかなり渋滞すること…などが挙げられます。そこで、巡回時間を1時間30分位に伸ばすか、遠隔地区の6人の園児を別の送迎バスに乗せるようにすることを提案します。

(4) 電話対応の基本

電話の対応の基本的な注意点は、話し方の基礎知識を踏まえて、できるだけ丁寧な対応を心掛ける。また、対応用語を使い、簡潔に対応すると良い。

【研修を終えて】

新採・若手教諭にとって、今回の研修で社会人としてのたたずまいを学ぶ事ができ、とても良い経験になった。

質の高い幼児教育を実践していく為には、まず園の目標をしっかりと理解し、子ども達とかかわっていく事が大切だと感じた。先生方から沢山の事を学んでいながら、園の一員としての自覚を持ち、色々な事に挑戦しながら積極的に行動していきたいと思う。

山形県幼児教育研修大会

期 日 令和7年11月5日(水)
会 場 山形ビッグウイング(山形市)

【概要】

テーマ ヒトの脳と心の発達
演 題 AI 共生時代にこそ必要となる次世代の育ち、教育、環境について考える
講 師 京都大学大学院教育学研究科 教授 明和政子 氏

知的財産保護の観点から記録の一般公開はしていません

後継者養成講座

期 日	令和7年11月26日(水)～28日(金)
会 場	大阪府高槻市(学校法人成城学園) 大阪府豊中市(学校法人ひじり学園) 大阪府大阪市(学校法人あけぼの学園)
記録者	学校法人菅藤学園 南山形幼稚園 副園長 風呂 哲平

【概 要】

- テーマ 次世代リーダーのマネジメント(経営・組織管理)
1日目:現代の幼児教育・保育制度の目的・制度の理解
2日目:次代のリーダーを育てる
3日目:自園の理念・方針の理解と実践
- ねらい ①山形県外の園を視察し、多角的な視点で訪問園の考え・実践を捉え、山形の教育・保育の「質の向上」に繋げる。
②県内の後継者同士で交流を行い、横のつながりを深めていく。
③多くの先生と繋がり、人間関係の構築を図る。

【内容(1日目)】

学校法人成城学園認定こども園日吉幼稚園

●園内視察

約1時間半園内を視察させて頂いた。園内では、廊下には様々な絵画が掲示されており、高さも不均一にし、子ども達と大人が絵を見て語り合ったり、インスピレーションを受けやすい様、至るところに設置されていた。保育室内では子ども達の絵を飾り、自分がイメージを形にしたい時にすぐ取り掛かれるようハサミ・画用紙・廃材など環境を整えており、作品の展示も一か所ではなく、展示されている。

園庭では、多種多様な植物や身近な生き物を観察できる(捕まえてきた)用渡り廊下に水槽を用意したり、園庭で育てている旬な食べ物を収穫したり、動植物から興味関心の幅を広げ、生体の不思議に気づかせる環境の工夫をされていた。

年長組では、当番係(生き物・図書・大型絵画・エスエル・・・等)があり、係が集まってミーティングをし、自分たちで考え、計画し、実行するPDCAサイクルを5歳児が実現させている。教師は、子ども達が困った際に、寄り添いながら話を修正していき、常には対話の中心には子どもを置いていた。





●研修会

2時間半水谷先生より①保育と保育環境②私学振興③エビデンスの効果的な使い方についてお話頂いた。内容は下記の通りです。

① 保育と保育環境

- ・日吉幼稚園では、基本子どもに指示・指導をすることはない。子どもが自ら選択し、try&errorを繰り返せるように環境を整えている。(このエラーの部分でどう考えたかが重要！)
- ・先哲の知識(深い対話的な学びに必要)は、とても大事ですが、やらされる・強要される学び方では、意味をなさない。幼児期の学びは「環境」が大事であり、常に一緒もおかしく今の子ども達にあった環境を引き出し設定してこと。また、その教育・保育の考えを丁寧に保護者に伝え理解してもらうことも大切であり、園長としての役目でもある。
- ・「対話的学び」は、会話をするだけでなく、図鑑を見て自分で調べることや、親に聞いたりすることも対話的な学びに繋がっている。小学校では対話的学びを話すことに焦点が当たっていることが多い。
- ・園によって保育の活動が違うのは、5つの領域(健康・人間関係・環境・言葉・表現)で説明することが出来、そのために教育課程がある。そのため、各年次の教育課程を作成しモデルステップの出口を探っているため、園によって違うのは、各園の活動でどう生かしていくかが重要である。
例:「考える力」はサッカーであろうと、音楽であろうと、絵画であろうと考える場面は作れる。その場面を作ってあげられるかがとても重要。
- ・2歳は自我、3歳はやりたいことをする、5歳は自分の思いを伝える+調和をしていくという成長過程があり、特に2・3歳の自己主張がとても大切(自分の意見をしっかり持つことに繋がり、小学校以降いじめに繋がらない)。第一反抗期をしっかり受け止め、認めてあげることが1人1人の子どもの成長にプラスに働いていく。
- ・年長児は、担当(給食・大型絵画・生き物・植物・・・etc)ミーティングを行い、各クラスに内容を伝え、共有している。先生は、補助的役割を行い、基本項目を決めるのは、子ども達!!そこでは自分たちで必要なことをメモしたり、計画を文字化したり、自分たちがやるという責任感や意見を出し合い、認め合う協働性の姿が見える。それに必要な教材も先生からではなく、これまでの経験を含め、子ども達から提案してくる姿見られる。年長児は、ルールや遊びの中での話し合いで1つのことをまとめ合える時期であり、自分たちでルールを作れるように成長して言っているため、当番活動ができる。

② 私学振興

- ・教育を理解してもらうために県議・市議を園に呼び、子ども達の活動を見てもらうことがとても重要であり、教育の現場見てしっかりと国に重要性を伝え、補助金を当ててもらえるように常日頃から関係性の強化していかなければならない。そして、保護者にもその意図を丁寧に説明し、PTAでの懇談会で感謝をしてもらうようにしていく。議員と保護者がつながること、保護者から要望や質問が出来てきて意見の集約（エビデンス）も取れるため、信憑性が上がる。しかし、批判を前提に話をする傾向もあるため、園が修正しながら今の時代に合わせた援助が必要であり、みんなで面白いことをどう作っていくかが重要。（幼稚園新派をいかに増やしていくか）
- ・認定こども園になって、福祉は均等、教育は多様性ととても実感するため、いかに私学助成のように「子ども達がのびのびと成長できる」環境を自由に作っていけるような認定こども園もしていくことが今の課題である。

③ エビデンスの効果的な使い方

- ・誰通のあり方では、現在愛着問題があり生後8か月（人見知りの時期）の親との関係性がとても重要。親と子の心が繋がっている安心できる基地があるから探索に行動に移せるため、園募集のために誰通を始める事は本当に良いのだろうか？と考えさせられる。これからは、2月まで親子通園であったり、本当に子どもまんなかなのかを考えていく必要がある。
- ・小学校の不登校の児童を園に来て一緒に遊んでもらい、求められる・認められる経験を園で出来る様にする。（園は勉強の匂いが薄いため、当園しやすい環境のため。）
学びが生活の一部になるように、やらされる勉強ではなく、自然にできる環境を整えていく必要性を感じました。



【内容（2日目）】

学校法人ひじり学園幼保連携型認定こども園せんりひじり幼稚園・ひじりにじいろ保育園

●園内視察

安達かえで先生より園の方針やクラス配置の説明をしていただき、園内を1時間半ほど拝見させて頂きました。年中クラスでは、みんなで決めたテーマを基に1人1人が思い思いに製作を楽しみ、自信を持って見せたり、一緒に遊びの輪の中に入れてくれた。そこには、自分感性や他者を認め、遊びを発展させていく姿があった。年長児の「お化け屋敷プロジェクト」では、小学校の先生を巻き込み、招待状を渡し、自分たちの活動を見てもらおうと園から発信しての「幼少接続」を展開していた。お化け屋敷を展開していく中で、デザインマップを子ども達と「対話」をしながら先生と子ども達が共に作り確認し、話を進めていく姿が見られた。園内研修でもマップを使いながら「子ども理解」を深めていくことを行っており「相似形」のように園全体で展開されている姿に感銘を受けました。

また、園外での活動では、人工芝でのサッカーや自然の中で五感を使ってままごとが展開されていた。誕生会では、朝園内を見回った際に見つけた落ち葉を話題に上げ、さりげなく自然へ

の興味関心を広げたり、誕生会の司会を年長児に裁量を与え、3歳児・4歳児との縦割りでの活動展開にし、人との関わりや今後の見通しを持てるよう配慮しながら保育展開をしていた。



●研修会

安達譲先生・かえて先生より視察や質疑応答に約2時間回答していただいた。内容は下記の通りです。

- ・せんりひじり幼稚園では、作品を作り飾るだけではなく、使って遊びこむことが重要と捉えている。その背景には、以前は作品を飾っていたが、保護者は見てすぐ素通りしてしまうことに疑問をもった1年目の先生が「もっと作品で遊ばせたかった」という意見から作品の展示は無くし、思う存分遊びこみ、その過程をドキュメンテーションとして掲示するように変更し、保護者からも活動のプロセスを知ってもらうきっかけとなった。

1年目の先生が自分の思いを言葉にし、しっかり伝えることが出来たのは、リーダーのファシリテーションと研修に参加した先生方の「自分と違う意見も認め、共感してくれる雰囲気」があったからできた。

- ・園内研修では、先生方が「今困っていること」・「環境で悩んでいること」をテーマに最低週3回学年ごとに行っている。子ども理解を深め合うことで次の日から実践に移せること・また、自分以外の意見を知り取り入れることで新たな保育展開に繋がり、保育の仕事が楽しくなることが出来ている。研修では、語る先生は写真を用意し、吹き出し書いていく（子ども理解）→写真を撮った人が語り、周りの人達が解釈し話をする事で自分では見てなかったことに気づかせてもらえる。研修は、園全体の研修を年5回、学年ごとの研修を毎日、15時から1時間、チームでの研修やリーダー研修をグーグルにて管理し、実施することでスケジュールの共有も出来るようにしている。こういった研修を通して、自分自身が「園を変えていく」という意識を持ち、学びことが生活の一部であり続けられる環境を整えていた。特に1・2年目の先生方には、こどもの「事実」をしっかり捉えられるようにし、リーダーの先生を始め、周りの先生と共に手立てを考えていくことを重要視している。「失敗を面白い」ことができ

ると成長し続けると思う。

・同僚性では、やる事が決まっていると自分の意見を主張しぶつかりあってしまうため、園としての理念をしっかりと示し、道すじに寄り添っていきと思いがぶつからず紡ぎ合う形になっていった。(大妻大学岡先生の研修にて) 同僚性は、仲が良いだけではうまくいかないため、互いに高め合っていくことが重要である。



最後に、教育・保育の仕事をしていて楽しいと先生が思わなければ、子ども達も楽しく活動展開できない。自分の思いを持ち、実践し、振り返る、その中で繰り広げられる try & error の過程を言語化・可視化し、自分の学びの糧として日々継続していくことが重要と感じました。

【内容（3日目）】

学校法人あけぼの学園あけぼのほりえこども園

●園内視察

安家力先生より約1時間園内を案内して頂いた。園舎には子どもの気づきや継続して遊び込める工夫があり、空庭では雑草を植え、高層マンションが立ち並ぶ地域の中に自然に触れ合える場をと2階に建設した。クラス名と同じ野菜を年長児が種を撒き育てていた。保護者に販売をして、売り上げで自分たちが欲しいものを購入する「リアルお店屋さんごっこ」へと遊び方発展していくケースも多くあり、環境から学びにつなげていた。月1回おかあさん先生として、保護者が保育者の仕事を体験できるようにしていた。自分の子どもの様子を知るだけでなく、園としての取り組みやねらいを伝えていくことができる仕組みづくりをしている。各保育室でも3・4・5歳児の保育室を各階に設定し、自然と異年齢交流が出来る設計にし、人間性（繋がり）を持てるようにしていた。

園庭では、身体の発達に合わせた遊具や食育に繋がる植栽をして1つ1つに意図を持たせ、配置をしており、職員にも共有されていた。



●研修会

あけぼのほりえこども園の歴史や力先生の思いを約1時間お話して頂いた。

公立の幼稚園から民営化にしていく過程や

- ・働き方や園の保育の環境を整えていくことで求人募集はかなり上回る人数が来てくれている。その背景には、職員が自分の友達に口コミみたいに良さを伝え、呼んできてくれることもあり、配置人数以上を満たし運営出来ている。
- ・令和7年度の幼児教育実践学会で口頭発表「ゴールではない行事の在り方～日常の遊びの広がりで行事を形作る～」とても好評で、自園の取り組みの振り返りやこれまでの考えを認めてもらえ、発表したことがとても良い影響を受けている。
- ・園の理念は振り返りで確認することで留め、保育実践は常にアップデートしていくことが大事であり、それぞれのキャリアを生かした適正の配置を心掛けている。
- ・ポートフォリオを、月1回行い、その中で1番いいポートフォリオを園長が選び上位3名が、園長と食事に行くコンテストを実施している。保育内容の充実かつ保護者からもポートフォリオが好評。今まで文字で伝えていた以上に園の取り組みを理解してもらっている実感がある。
- ・マルシェ（契約している調理会社）や給食も地域に向けて配信し、子ども達が口にする食べ物の安全生や栄養バランスを理解してもらおう様にしている。
- ・1口3000円での卒園生に対し寄付の配布（目に見える形でお金を使うことを公言する）ツリーハウスを次は園庭に作ると公言し、子ども達の遊びの環境を継続的に続けるために行っている。
- ・児童発達支援センターを設置し、配慮が必要なお子さんの環境も整えている。集団でいることでの子どものストレスを軽減しながら、その子の成長に合わせて活動展開が可能になった。しかし、予算等なかなか収支に見合わない部分もあり、苦勞をしている。



第 2 編

個人研究・
共同研究発表

保育実践研究

一人ひとりの「こどもがまんなか」をまもる質の高い幼児教育を

～社会全体でつむぎ未来へつなぐために～

学校法人菅藤学園 南山形幼稚園

研究主題 幼保小連携・接続の取組み

○背景

幼稚園・保育園を卒園後、一人一人が期待を持って各小学校へ就学します。これまでの経験を生かし、自分の好きなこと・得意なことをその後の学びや生活に発展させ、自分らしく主体的に生活の基盤を確立してほしいと願っています。中にはなかなか馴染めず、行き渋り等も見られ、子どもによってはハードルが高い現状もあり、今後、小学校との連携は必須と考えています。

そんな中、昨年度より「南山形小学校」との連携が図られ、小学校の先生方が当園に来園され、保育の様子を参観して頂いています。「小学校の先生方と円滑な信頼関係を」を第一の目標に、互いに訊きたい事・伝えたい事を話し合える場を設け、それを継続していく事を目当てに、今回の「幼保小連携研修会」を実施致しました。校長先生始め、主幹教諭・1年生の先生方が参加して下さい、昨年よりも更に内容の濃い研修会になった事を実感しています。

○テーマ

これまでの本園の交流活動を振り返ってみると、以前より、子ども同士の交流会（本園でいう「小学校見学」・2月の「公開質問会」）は行っておりました。しかし、教師間の連携は、

- ・就学前に幼稚園の職員が小学校へ行き、進学する子どもの情報提供を行うこと。
- ・就学した1年生の授業を参観すること。

子どもの情報提供においても、就学する子ども全員の様子は伝えつつ、どうしても支援が必要な子どもの話が中心になってしまうことが多かったように感じます。また、小学校の先生方は転勤があり、一人一人の子どもの情報提供や引き継ぎが上手くできているのか、そして難しさを感じることも多くありました。

それと同時に、私たち保育者が小学校について、小学校の先生方が幼稚園・保育園についての理解がまだまだ浅いのではないかなと思うようになりました。そこで、連携の第一歩は互いに「歩み寄る」ことではないかと考えました。

令和5年度より南山形小学校の協力を得て、

- ・小学校の先生方を保育現場にお招きする機会

・私たち保育者が小学校の授業を参観する機会を設け、その後の懇談会を通して互いに理解を深め、連携の推進を図ることにしました。

○参観について

保育参観には、校長先生・主幹教諭・1年生の先生方が来園し、年長児の活動を参観されました。

10:00~11:30までの間に入れ替わりで参観し、今年から、幼稚園・保育園より「見ていただきたい視点」を提示し、付箋に記入して頂きました。

・見ていただきたい視点は

- ① 印象に残った子どもの姿（黄色の付箋）
- ② 子ども同士・先生（小学校の先生含む）との会話ややりとりで印象に残ったこと（青色の付箋）
- ③ 小学校でも実践できる活動や環境設定はありますか。（ピンク色の付箋）

と分けて、気付いたこと、見つけたことをたくさん記入して頂きました。

活動では、初め保育園で「お化け屋敷ごっこ」を、幼稚園では「自由遊び」を参観して頂きました。合築園舎ということもあり、幼稚園の年長・年中・年少組も「お化け屋敷」に遊びに出掛け、楽しむ姿を参観して頂きました。お化け役の子ども達も年齢に合わせ、驚かせ方を変えてみたり、お化けを止める「御札」の効果を教えたりと様々なアイデアを出し合い、遊びを発展させていく様子を見て頂きました。

幼稚園では、保育室に「コマコーナー」・「ピタゴラスイッチコーナー」・「ままごとコーナー」等、子ども達が自分で考えた遊びに集中出来る環境設定をし、遊び込む姿を見て頂きました。遊んでいく中で、「ピタゴラスイッチで作った作品でコマを回すとどうなるのか」という問いが生まれ、試行錯誤しながらコマを回したままで落とせるよう、幅や斜面の角度を調整しながら製作していく様子も見て頂きました。

その後、片付けをし「全員リレー」を参観して頂きました。リレーでは、子ども達がチームで順番について話し合い「勝つためにはどうすればいいか」作戦会議をし「自分の考え」と「チームの一員としての立場」で心の葛藤を乗り越え、バランスを取ろうとする姿があり「個」から「集団での社会性」を学んでいる様子を、そして、先生方との楽しい駆け引き・やり取り等も見て頂きました。

保育園では「かかし作り」が行われ「お米を守るには?」「昨年 of 年長組が作っていたかかし!」と振り返りながら事前の準備をしていき、どんな「かかし」がいいのかを絵で描き「プレゼンテーション」をして決め、製作している様子を見て頂きました。かかしの骨組みから製作し「服を着せられない!」と悩むも「思いっきり引っ張ればいける!」という意見から、力を合わせなんとか服を着せることに成功した姿は、目の前の課題に対し意見を出し合い、まずやってみる「TRY & ERROR」をしていく姿が見られました。

今回の参観を通して、小学校の先生方が来園されるという事で、子ども達の就学に対する意識や期待、活動の様子を見て頂けたことは、頑張ろうとする意欲や熱意に繋がったと感じました。

○懇談会

15:30～はと組・ひばり組にて懇談会を行いました。自己紹介をし「今熱中していること」を発表してもらい、仕事の話以外の事を伝え合うことで、互いの距離を少し縮められたと感じました。また「本日の保育について」幼保共に3分ほどお伝えし「対話」に移りました。今年初めての取り組みとして「えんたくん」を取り入れ2グループに分かれて各視点に基づいて話を進めていきました。話し合いは、終始活発な意見が飛び交い、小学校の先生方の考えや取り組みを直にお聞きしながら、自園の取り組みをお伝えし、理解を深めて頂くとても良い機会となりました。

① 印象に残った子どもの姿（小学校の先生方の付箋や会話の中から）

- ・活動に加わってないように見えるが、それなりに別の遊びもしつつ気にかけている。学校では、大人から「〇〇する時間」と声をかけて取り組ませてしまう事が多かったが、本日の保育指導から、その子の“やってみよう”という気持ちになるまで待つことも大切だと感じた。
- ・待ち時間や活動の合間も飽きさせることなく、歌を歌う（みんな自ら体育座りをし、歌い出していた）
- ・体操順に並ぶときも、速やかに、スムーズに並んでいた。
- ・製作の時「ガムテープが欲しい」→「誰か頂戴」と聞き、周りの子が先生に伝えに行く。
- ・小さい子にもやさしい。
- ・自分のやりたいことを精一杯やっている。自分達の活動を楽しんでいる。
- ・手先が器用。
- ・話かけると明るく応えてくれる。
- ・アイデアが豊富
- ・友だちとの関係性が良い。「もう一回やってみよう！」と声かけがある。
- ・一人遊びをしている子は、皆と一緒に行ってはいないがまわりを気にかけている。
- ・虫の話がたくさんしてくれる。（自分事のように）

② 子ども同士・先生（小学校の先生含む）との会話ややりとりで印象に残ったこと

- ・先生の話し方が穏やかで静かで安心した。
- ・目線を合わせて指示・説明をしていた。
- ・シリコンマットを用いて、子ども達がわかりやすい様に順番の工夫があった。
- ・バトン渡しも口頭ではなく、子ども同士で見本を見せることで、より理解しやすくしていた。何が良いか内容を広げて伝えていた。
- ・物怖じしないはきはきした受け応え。
- ・挨拶がしっかりできる（背筋ピンツ！挨拶の仕方は先生のまねをしていた。）
- ・「どうする?!」という声かけをし、指示ではなく自己決定を促していた。

③ 小学校でも実践できる活動や環境設定はありますか。

- ・大豆の変身（3年生の教材）を「ドキュメンテーション」でパネルに貼り、今までの活動が見れる様にしていく。
- ・どこに何をしまうのか環境が整っているため、分かり易い。1つ1つ決められた場所にはな

く、園で行っていることの延長線上で個々の空間（ロッカー）にしまう等、ある程度の経験からの自己決定が出来る様にしていく。

- ・小学校に入学すると適応指導（見本通りにランドセルを片付ける・教科書をしまう等）になってしまうが、子ども自身が考え、どちらが良いか決める体験も大切なのではないかと感じた。
- ・幼稚園・保育園と小学校との違いは、学びに「言語表現」が出てくること。「パネル」や「ドキュメンテーション」で言葉を使い、振り返り等をしていく。
- ・活動に対し「問い」の連続性を持たせている。
- ・遊びのルールを自分達で考えていく。
- ・ボンド・はさみ・ガムテープの使い方が上手なため、環境設定で自分達で使える様に！

～会話の中で（幼稚園・保育園から）～

- ・自分で出来ることは、自分で取り組む様に、失敗しても、なぜ失敗したのか経験から学び、次のステップに進めるように援助している。
 - ・片付け等も、なぜ片付けるのか、理解した上で行うことで、自ら片付けが出来る様になる。
 - ・認められることで、どんどん自信もつき、教師との信頼関係も深まってくる。
 - ・全て遊びを通して学んでおり、子ども同士、互いに気付いたりアイデアを出し合ったりすることで、自分達で解決出来る力も備わってきている。
 - ・物事の順序立てや、今、何をしなければならぬのか、行動を起こす前に見通しを立てて動けるように促している。小学校では自分ですることが多くなるので、何から始めれば良いのか、優先順位を決めて、自分で順序立てて落ち着いて取り決めるようになってほしいと思い、注視して関わっている。
 - ・小学校では1番下でも、園では頼れるお兄さん・お姉さんとして園を引っ張ってくれている存在である。
 - ・先生主導ではなく、子ども達にある程度任せ、選択肢を与え、子ども達が主体的に考え活動に繋いでいけるよう、教師の声がけや子どもの姿の捉え方を大切にしている。
 - ・教材の使い方（はさみ・セロテープ・ボンド等）は、年齢に応じ約束を決め、安全な使い方を教わり、使ってよい時間を設けたりした積み重ねが、今の年長児の姿になっている。
 - ・「かかし作り」 昨年の年長の姿、今年度の実体験や「本沢農産」の方との関わり、図鑑で調べたりする等、様々な経験の積み重ねがあるため、皆、意欲的に取り組んでいる。また「ドキュメンテーション」で保護者の方へ伝えている事もあり、保護者の方も協力的である。（かかしの服・ハーブは家庭から協力してもらっている。）
 - ・子ども達が疑問に思ったこと、面白そうと話していることを丁寧に拾い上げ、本で調べたり、PCを使ったり、実際の活動に取り入れ、遊びが発展していくよう工夫している。
- 小学校の先生方のご協力のもと、様々な意見が飛び交い、大変有意義な時間となりました。

○子ども同士の交流会（一年生との）

小学校の先生方に保育参観をして頂いた後に、1年生の生活科の授業の一環として「秋の自然物で作ったおもちゃで遊ぼう」という授業に、年長組の子ども達を招待して頂き「交流会」を行いました。1年生のお兄さん・お姉さんが工夫を凝らした遊びやお土産に、瞳をキラキラ輝かせ楽しんで参加してきた子ども達を見て、小学校の雰囲気を味わいながら、就学へ向けて、より一層、期待が膨らんだようでした。また、この「交流会」に留まらず、後日、子ども達から小学校のお兄さん・お姉さんにお礼がしたいという声が上がりました。子どもたちが絵や文字でお手紙をかき、小学校へお礼の手紙を届けに行くという交流にまで発展していきました。

「交流会」を通して、子ども達の成長を感じた部分として「意識」と「関わり方」です。本園の年長組の子ども達が「楽しかった」・「おもしろかった」等、感想を述べている横で・・・1年生の男児が一生懸命話を聞いてくれています。感想を発表している女兒も、1年生のお兄さん・お姉さんが温かく見守りながらしっかり聞いてくれているので、とても良い笑顔を浮かべていました。年長児に合わせて自然とその場にしゃがみ、目線を合わせて話を聞いてくれている姿は、誰かから教えてもらったわけではなく、自主的に気づき「交流会」を通してその場に必要に関わり方を学んでいる瞬間です。

後日、教えて頂いた話なのですが・・・予定では、手を挙げてくれた子ども達全員の感想を聞いてあげたい！という思いがあったそうです。時間の都合上、全員に聞くことはできなかったのですが「招待した園児を喜ばせよう！という相手を思いやる気持ち、そして、自分より小さい子ども達とどのように関わると良いか考える優しい心等、環境を整える場を設けることで、大人が教えなくても、子ども達には自分たちで学ぶ力が備わっています。

「交流会」を通して、幼稚園の子ども達は、来年小学校へ就学するという「期待」や「意識」が高まり、小学校という場所が子ども達にとってさらに身近な存在になりました。また、小学校の子ども達にとっては、自分たちより小さい子ども達との「関わり方」に変化が見られ、目線・聞く姿勢・接し方を工夫したり「来年度からは自分達がお手伝いしてあげよう！」という気持ちの高まりにも繋がった様です。

○横とのつながり

就学して3ヶ月半経った子ども達の姿について、南山形小学校の1年生の先生方にも話をお聞きしました。まず、4月から環境が変わり、5月のGW後には登校渋り等も予想されましたが、現在南山形小学校の1年生は「不登校0」とのこと、子ども達からは「もっと勉強したい！」という声が自然と上がったり、授業の場面だけでなく、小学校生活の中でも「自発的に行動が出来る」また「生活リズムができています」等の1年生の成長を教えてくださいました。

子ども同士の関係性でも、互いに「認め合える関係性」が築けていることから、自分のことだけでなく、周りの人が自分を支えてくれていることに気づき、その思いが子ども同士で浸透していたり、集団の中でも自分の思いを「自分の言葉」で伝えられる姿も多いとお聞きしました。実際に小学校の先生方の生の声を聞き、思いや考え、卒園生の成長の様子を知れることは、私たちにとっても何より嬉しく、とても貴重な機会となりました。

併せて、卒園までに育てない「10の姿」や育てていきたい資質・能力は、本園の職員だけでなく、幼児教育機関全体で共有していく必要があり、つまり「ヨコとの繋がり」も大切であることを実感するようになりました。

小学校の先生方は転勤されることを考えると、幼保小連携を持続的に進めていくためには、幼児教育機関同士で「ヨコの繋がり」を密にし、「育ててほしい子どもの姿」を共有し、小学校に伝達していく必要があると考えます。

○アプローチカリキュラム

本園のアプローチカリキュラムの考え方のテーマは「自園の保育を振り返り、遊びを通した学びの繋がり・重なり（5領域）を確認しながら共通の視点で、小学校の先生方と語り合える形式」です。

最初に考えた重点目標としては、日々の保育を丁寧に振り返ることから始めました。その上で、遊びや生活を通しての子ども達の「学びの繋がりや重なり」はどの部分にあるのかを確認しました。そして、この考えを基に「アプローチカリキュラム」を作成し、小学校の先生方との「語り合い」を通して、子どもの姿を共有していこうと考えました。

育てて欲しい幼児の姿では、小学校教育でも共通している「知識及び技能の基礎」・「思考力・判断力・表現力の基礎」・「学びに向かう力・人間性等」を記載しました。活動の柱では「考える力」・「豊かな心」・「健やかな身体」の3つの柱を立てました。これは、山形市教育振興基本計画基本方針1にある「豊かな心」・「確かな学力」・「健やかな身体」を参考に立てました。「確かな学力」については、幼児教育では「考える力」に置き換えました。

具体的に、幼児教育では

- ・「考える力」とは、自ら気づき、遊びを工夫、発展させながら学びを重ねる「学びの芽」のこと。
- ・「豊かな心」とは、先生や友だちと積極的に対話を楽しみ、共感・協力しながら新たにアイデアを生み出し多様な体験を通して育まれる「人との繋がり」のこと。
- ・「健やかな身体」とは、身支度や日々の生活リズムを整える「生活習慣」のことではないかと考えました。

今回の「アプローチカリキュラム」で特に工夫した点は、この活動ストーリーです。

ここでは、子どもの姿をより明確に、イメージしやすく記載できるよう「ストーリー」という言葉を用いました。「ナラティブ」という言葉には、物語や語り口といった意味があります。子ども達の遊びや生活は途切れることがなく、連続しているもの、だからこそ、子どもの遊びや生活の姿を中心に、その中に「教師の関わり方」や「環境構成の工夫」を記載することが出来れば、小学校の先生方にも子どもの姿がイメージしやすい「アプローチカリキュラム」になるのではないかと考えました。

「アプローチカリキュラム」の最後には、「連携・接続」という欄を設けました。子どもの育ちには、家庭・小学校との連携も必須です。その為、これまでどのような連携をしてきたのを見て

わかるように記載する欄も設けました。「アプローチカリキュラム」作成においては、東北文教大学付属幼稚園の先生方・南山形小学校の先生方・山形市教育委員会先生方のご協力をいただき、何度も作り直しを重ね、今の形になりました。

○最後に

現在、文部科学省が推進している事業である事と、子ども達がより良い教育を受け、新たな学びへ意欲的に取り組み、今後の日本の発展を担うためにも必要な事業であると感じました。これからは、Society 5.0 という、サイバー空間（仮想空間）とフィジカル空間（現実空間）を高度に融合させたシステムにより、経済発展と社会的課題の解決を両立する、人間中心の社会の中を生き抜かなければならず、先が見えない時代でもあります。「教育」という、人と人が関わり、互いに思いを伝え、学び合う場をないがしろには出来ないと思います。教師は、人を繋ぎ、未来へ繋ぐ大切な仕事であるからこそ、一つ一つを大切に積み重ね、一層の連携に努めていきたいと強く思います。

これからも、南山形小学校との連携を更に深め、子ども達が就学後も楽しく学べる様、子ども達の姿を的確に捉え、就学前のまとめの保育に取り組んでまいります。南山形小学校では、20の幼稚園・保育園から児童を迎えられ、それぞれ生活経験の異なる子どもの姿を捉えていくのはとても大変なことであると思います。今回の連携を経て、当園の卒園生についてだけでなく、日頃から、幼児と児童の交流・保育や授業参観・情報交換等を定期的に行い、疑問に思ったこと、訊きたいことをいつでも忌憚なく話し合える関係性を構築していく事で、スムーズな接続へと繋がっていくと考えます。

就学する子ども達一人一人が、これからの未来を担う子ども達です。子ども達に関わる幼稚園・保育園・認定こども園・小学校・行政等、全ての大人が「自分ごと」として捉えること、そして互いに語り合い、情報共有し、理解し合い、一人一人の思いを「紡いでいくこと」で、これからの幼保小連携の形が、より良いものに繋がっていくと考えます。

保育実践研究

一人ひとりの「こどもがまんなか」をまもる質の高い幼児教育を

～社会全体でつむぎ未来へつなぐために～

学校法人不動学園

認定こども園寒河江第二幼稚園

研究主題 保育の計画と実践・評価・改善

～園行事の取組と子どもの育ち～

主題の設定理由 (ねらい) 本園では、行事は子どもが成長できる機会、そして子どもの成長を感じることでできる機会と捉え、季節にそった行事を毎年行っている。園児だけの行事もあれば、保護者参加の行事もあり、前年度の反省をもとに次年度の年間スケジュールを立てている。詳しい内容はその年々の子どもの姿から見えてくる、育ち、遊びの傾向を踏まえ、各年次で今興味のあるもの、楽しんでいるものを内容に組み込んで行うことにしている。研究にあたり、子どもの今の姿、育ちを感じてもらおうことのできる行事にするために、保護者と共有したいことは何かを捉え、職員の中でこれまで以上に共通理解を図れるような保育の計画を再考する。又、保護者の行事に対する思いにも触れ、園と保護者が一体となった行事の在り方を探っていく。

1. 研究方法

- (1) 研究主題についてよく話し合い共通理解をする。
- (2) 年間行事の中から、3～5歳児は5月に行われる「ふれあいピクニック」、0～2歳児は10月に行われる「運動会」を例にあげて、子どもの育ち、遊びを保護者と共有し、保護者の想いを行事に繋げていけるよう、保育の計画を考え実践していく。

2. 研究内容

<3～5歳児>

- (1) 保育計画を、月案→日案→週案会議→月案に反映→日案へと繰り返し、記録の見える化を行う。
- (2) 5月に予定しているふれあいピクニックに向けて、参観に繋がっていきそうな自然遊びを、各クラスで子どもの遊びから探っていく。
- (3) 子どもが興味を持って遊んでいる自然遊びを月案から切り取り、日案を参考にしながらさらに詳しくウェブ型で担任間で書き表して、子どもの経験や活動の展開、繋がりが見えるようにしていく。見えてきたことから子どもの理解を深め、「ふれあいピクニック」で子どもと共有したいことは何かを担任間で話し合う。
- (4) 話し合ったことをもとに、次の保育に向けて環境を構成、計画を立て実行していく。
- (5) 行事終了後、反省会を設けた後に、自分が感じたことと改善策、今後の課題を用紙に記入し、クラスで回覧する。保護者に行事に参加しての感想、意見を書いてもらい、行事への思い、感想を図型にまとめ、保護者や保育者の想いを来年度にどう繋げていくか話し合う。

<0～2歳児>

- (1) 保育計画を、週月案→保育での子どもの姿→クラス会議（月の反省）→週月案に反映、繰り返し行う。
- (2) 10月に予定している運動会に向けて、運動遊びに繋がっていきそうな遊びを、子どもの日々の姿や今楽しんでいる遊び、運動機能を各クラスごと考え、探っていく。
- (3) 保護者の方へ、子どもの遊びの様子や運動遊びの様子を知らせ、「保護者の方はどんな運動会にしたいか」について、アンケートを事前にとる。
- (4) 子どもが楽しんでいる運動遊びを週月案から切り取り、さらに詳しくわかるようにウェブ型で担任間で書き表し、子どもの運動遊びの経過や遊びの変化、保育者の働きかけからの子どもの反応や遊びの展開、繋がりが見えるようにしていく。見えてきたことから子どもの理解を深め、運動会で子どもと保護者と共有したいことは何かを担任間で話し合い、運動会の競技内容の決定を行う。
- (5) 3～5歳児の(4)(5)と同じ

3. 事例 ①

4月 3歳児 ちょうちょうみ

〈ふれあいピクニックへのつながり〉

〈あそびの経過〉

春になり、園庭に様々な草花が出てきて、身近に感じたことで、外に出て見つけた所からいろんな遊びに取り入れようとしていたり、保育者の提供する物に関心を持ち、やってみようとする。

〈あそびに対する保育者の願い〉

広い園庭や畑に豊富にある草花に興味を持ち、触れたり、遊び方をいろいろと知って試してみしてほしいと思う。

★…始まり

環境構成

— …あそびの流れ

→ …あそびの変化

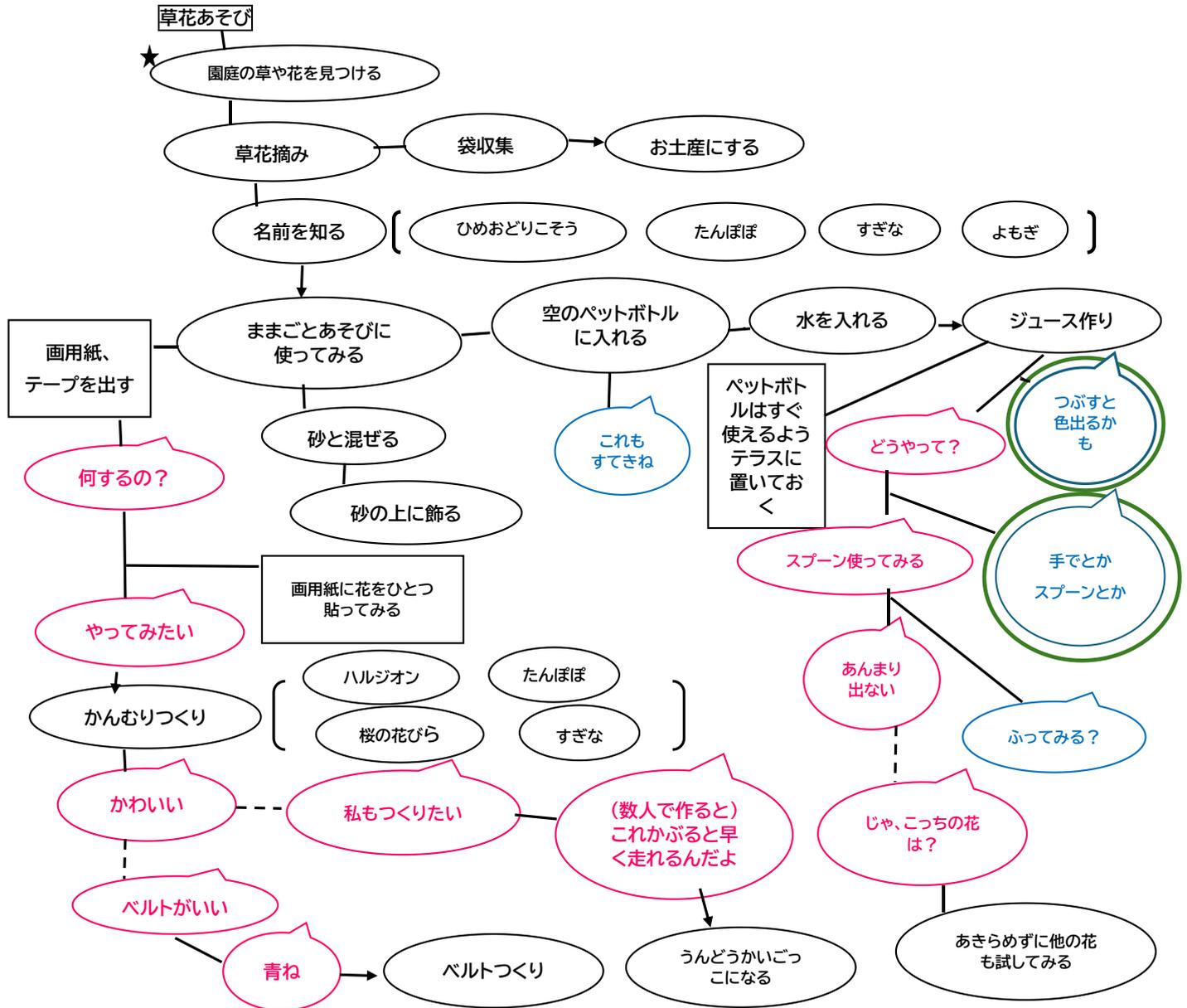
- - - …子ども同士のつながり

子どもの姿

子ども

保育者

保育者の援助



〈子どもの姿の考察〉

・ジュース作りでは、簡単に色が出ないことにどうやったら色が出るのかを疑問に持つ姿があり、道具を使うことやペットボトルを振ってみたらどうかに気づき、試してみたり、色が出る花、出ない花があることもだんだんわかっていった。
 ・かんむりベルト作りでは、草花の新しい使い方に興味を持ち、どの草や花がいいか、どのくらいの量がいるかなどを考え、種類を知ったり、自分で作り、完成させることに楽しみを感じる姿があったようだ。

〈次の保育に向けて〉

・他のクラスの草花あそびの面白さにも気づき、関心を持てるようにもしていきたい。
 ・親子ピクニックで親と一緒に今月の遊びの中から一緒に取り組んで作れるものはないかを考え、その遊びをより楽しめるようにしていきたい。

〈あそびや学びのプロセスを捉えよう〉

4月、保育者に付いて遊ぼうとする子どもも多く、保育者が何かをすると「何しているの?」と関心を持ち始める子どもも多い。そこから自分のやりたいことを見つけ楽しんだり、試してみても疑問を持ったり、難しさを感じたりする姿が見られ、探究心へもつながったのではないかと草花あそびを通して感じた。

〈あそびの経過〉

様々な草花を見つけ、いろいろな遊び方ができることを知り、楽しんでいる。中でも、かんむり、ベルト作り、ジュース作り、ジュース作りは、“自分だけの物を作ろう”と集中したり、どうやったらいいんだろうと考えながら遊んでいる姿がある。

〈あそびに対する保育者の願い〉

4月に、かんむり、ベルト作り、ジュース作りを楽しんだことから、親子ピクニックでも取り入れられるといいと思う。ピクニック当日、ピクニック後も楽しんだり、余韻を感じられるようにしていきたい。

★…始まり

環境構成

子ども

子どもの姿

保育者

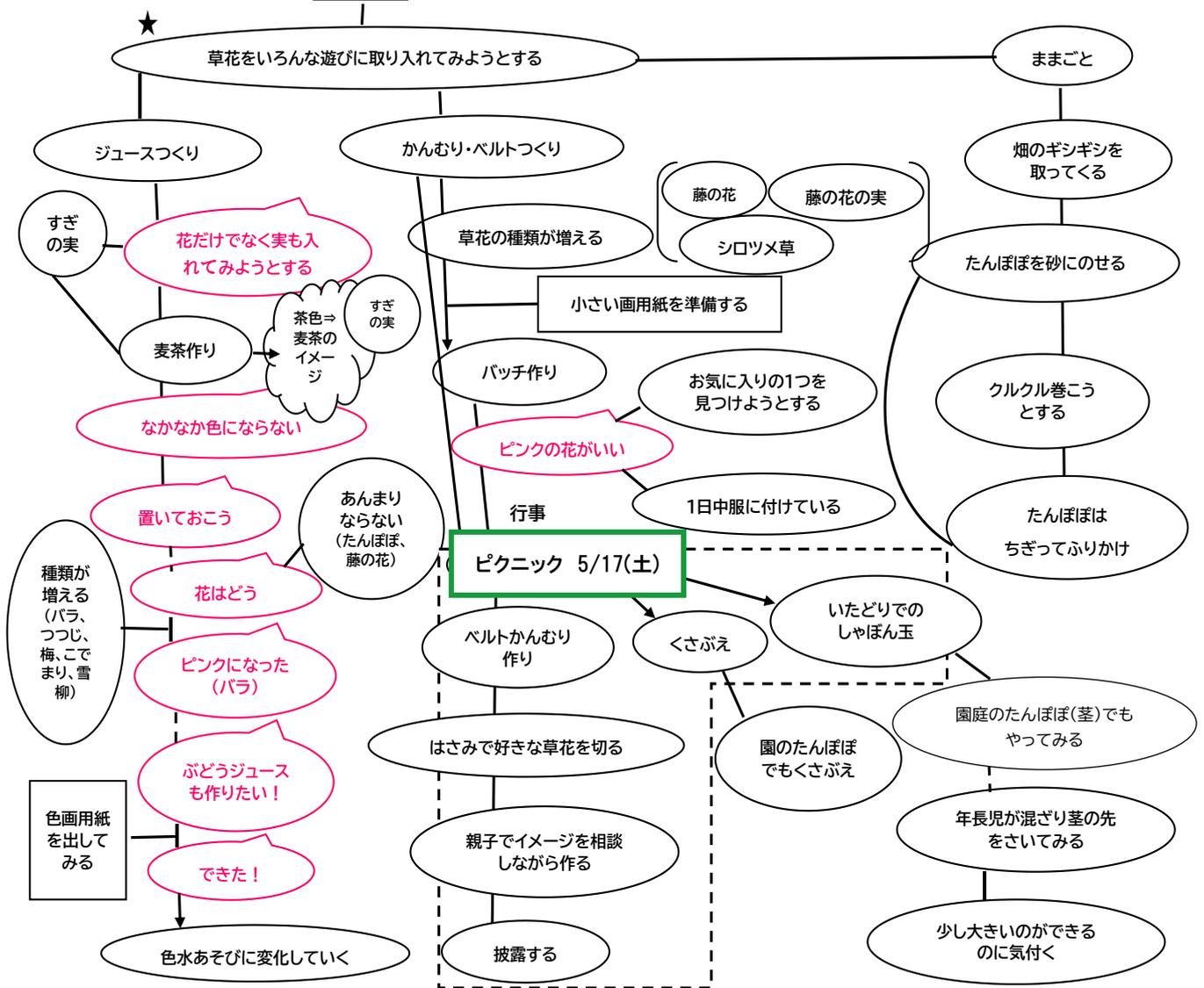
保育者の援助

— …あそびの流れ

→ …あそびの変化

- - - …子ども同士のつながり

草花あそび



〈子どもの姿の考察〉

・ピクニックでは、楽しんでできたかんむりベルト作りに張り切り、親をリードして作る姿が見られていた。園では、手で採っていた草花をはさみで切れることも嬉しく、次々と切って採取する姿があり、楽しめる要因の1つにもなったと思った。これまでの遊びが、親と一緒に思いを形にしていけるということにとっても集中した時間になったようだ。
・ジュース作りでは、草花を入れることでの綺麗さと、色の付かない難しさを経験しながらも、バラで色が付いたことへの嬉しさから、次の色への意欲が見られたと思う。

〈次の保育に向けて〉

・色水あそびへの変化が見られたので、どんな素材で色が出るかを試したり、どんな色が作れるかを楽しんでいきたい。
・遊びの中の気づきや発想を大切に、遊びの変化に合わせて楽しめるようにしたい。
・ピクニック前までの遊び、ピクニック当日の遊び、ピクニック後の遊びのそれぞれの経験を来年度につなげるようにしたい。

〈あそびの学びやプロセスを捉える〉

楽しんだ遊びをピクニックで親子でやってみることで、イメージを持って取り組めた。ピクニック後の園庭で年長児が関わり、示してくれたことで、気付けたこともあり、学びにつながっている。

〈R7.5.17(土) ふれあいピクニックより 3歳児〉

○気づいたこと ○感じたこと	○自分はどう感じたか	○改善点 ○今後の課題
<p>〔行事中〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ・天気が雨で、体育館活動のため、親子でゆったりしている感じに見えた。 ・雨の活動のため、様々なことに(移動、カップ)時間がかかる。 ・雨の中でしおりを広げると濡れるし見づらい。 ・草花あそびでは(かんむり、ベルト作り)子どもの思いを聞いて作ろうとしてくれる親が多い。 ・子どもたちの草花の好み、作り方に違いがあるのが見られる。 ・草花採取時に、子ども中心ではさみを使っている。 ・親子での草花あそびはいい経験に感じた。 ・草花あそびだけでなく、歌・手遊びを喜んでくれる保護者がたくさんいた。 ・体育館内からのしゃぼんだまあそびは限られたスペースになるが、親子で譲り合っていた。 ・吹き方を教えてもらいながら挑戦し、しゃぼんだまができる親子で喜んでた。 ・親子の触れ合いだけでなく、友だちとのつながり、親同士のつながりの機会にもなっているようだった。 <p>〔行事後〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ピクニックが終わっても、かんむり・ベルト作り、しゃぼんだまあそびを楽しむ姿があるようだった。 ・行事前よりいろんな草花に気付き、より具体的なイメージを持って作るようになった。 ・しゃぼんだまがどうしてうまくできないか、何をいうといいかなど疑問を持ったり、考えようとするようになった。 ・草花への興味、関心が広がったように感じる。 ・しゃぼんだまでは、他のクラスの子どもたちも関心を示し、3歳児の遊び方には出ない遊び方、方法を見せてくれ、刺激になったり、異年齢児の関わりにつながった。 ・保護者の反応が、アンケートでは概ね良かったが、直接、要望を申し入れてくる家庭もあり、様々だった。 <div data-bbox="119 1915 327 2049" data-label="Image"> </div> <div data-bbox="359 1881 550 2049" data-label="Image"> </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・天気のせいか、集合時間ギリギリのように思った。開始が遅れると終了も伸びてしまい、他のクラスとの兼ね合いが崩れるかもと思っていた。 ・準備時間を含めると、活動時間が短くなるため、何かを削って活動時間を確保したいと思った。 ・カップで動きづらいうえに親子で互いに居場所の確認や、しおりやはさみや、袋やと視界、行動が不便そうだった。 ・早く完成させようとせずに、じっくり子どもと向き合っている保護者が多いことに嬉しく思った。 ・子どもたちも飽きたりせず集中する様子があり、満足いく完成になるように時間をとろうと思った。 ・草花を使ったかんむり・ベルトでも、作品の個性が出るなどと思った。 ・はさみの刃先を人に向けたまま動いている子どもいたので、扱い方の話が必要だったかなと思っていた。 ・草花あそびを知らない保護者もいるようだった。貴重なことだと思う。 ・親子で向き合っている手遊びにたくさんの笑顔が見られたと思う。 ・再度カップを着て外に行くには時間がないので、体育館内からでも楽しめると思った。 ・しゃぼんだまは、ピクニック前に園であそびに取り入れず、親とのやりとりや達成感を味わいながら楽しむ形がいいのではないかと考えていた。 ・保育者が雨でも楽しもうという気持ちが大事だと思った。 ・行事をすることで、子どもたちの遊びに広がりが見られた。意欲が変化したように思う。 ・子どもたちの変化によって、草花あそびの幅をもっと広げていきたいと思った。 ・遊びを通して自然と異年齢児との関わりが見られるのはいいなと思った。これに限らず様々な遊びでも刺激が受けられるように援助ができればいいと思う。 ・兄弟がいる家庭では代わり映えしないと感じている方もいるようだ。意見を参考にしながら、ねらいをよく考え、内容を精査していけるといいのではないかと考えた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・早目の集合につながるようなお知らせの書き方できるといい。 ・カップの準備がある程度できた所で、まとまって外に出た方がいいかと思ってやってみたが、親子が一緒なので、それぞれで外に向かった方が草花の採取時間ももっととれたかもしれない。 ・雨の場合は、活動を絞って時間を使った方がいいようだ。 ・全体ボードなどを作って活用する、雨対応のしおりの工夫など。 ・活動時にはさみの話をする。 ・見せるものと、楽しむものを取り入れられるといい。 ・父の参加も多くなっているので、体を動かす活動も入れてみてはどうか。 ・雨でたんぽぽの茎がぬれていたり、使いづらいことも考え、毎年イタドリは準備した方がいい。 ・イタドリが、節の長さでしか切れないので、しゃぼんだま液の容器の大きさを検討した方がいい。 <div data-bbox="1300 616 1460 784" data-label="Image"> </div> <div data-bbox="1077 1220 1284 1444" data-label="Image"> </div> <div data-bbox="1284 1220 1492 1444" data-label="Image"> </div> <p>〔担任の思い〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ・4、5月と楽しんだ遊びとして、草花を取り上げ、ピクニックで親子で楽しんでもらうのは、多くの保護者も喜んでくれていることや、保育者のねらいの観点からも、今後も継続していきたい内容だと考える。天候や季節の進み具合に左右される所もあるので、検討しなければいけない部分はあると思う。 ・子どもの遊びの姿を見てもらう、親との触れ合いの時間を楽しんでもらう機会に来年以降もしていきたい。 ・もっと、ピクニックに親子で期待が持てるように、ピクニック前の草花あそびの様子や子どもたち同士の関わりをドキュメンテーションなどで、保護者に知らせていけると良かった。

自然が満喫できた

子どもたちの楽しい様子が見れた

雨の中でマイナスイオンを感じた

黄色いカッパ姿の子どもたちが
アヒルみたいでかわいかった

ハサミを使う姿が成長

イタドリでのしゃぼんだまが上手く
できず悔しかったようだ

手遊び歌が上手だった

もう少し草花集めや遊ぶ時間が欲しかった

草花でのベルト（かんむり）
作りが楽しかった

自然との触れ合いを大事にしたい

子どもが「楽しかったー」
と満足そうだった

子どもと2人きりで過ごす時間が
楽しい時間だった

先生が大好きなことが嬉しく思った

<保護者の想いを来年度にどうつなげていくか>

- 雨でも雨なりの草花遊びができるようにしたい
- 草花を通して、また手遊びなどを通して親子が触れ合える時間としていきたい
- 時間の組み方を検討し、活動の時間を十分に取れるように工夫していけるといい

事例 ②

9月 2歳児 ことりぐみ

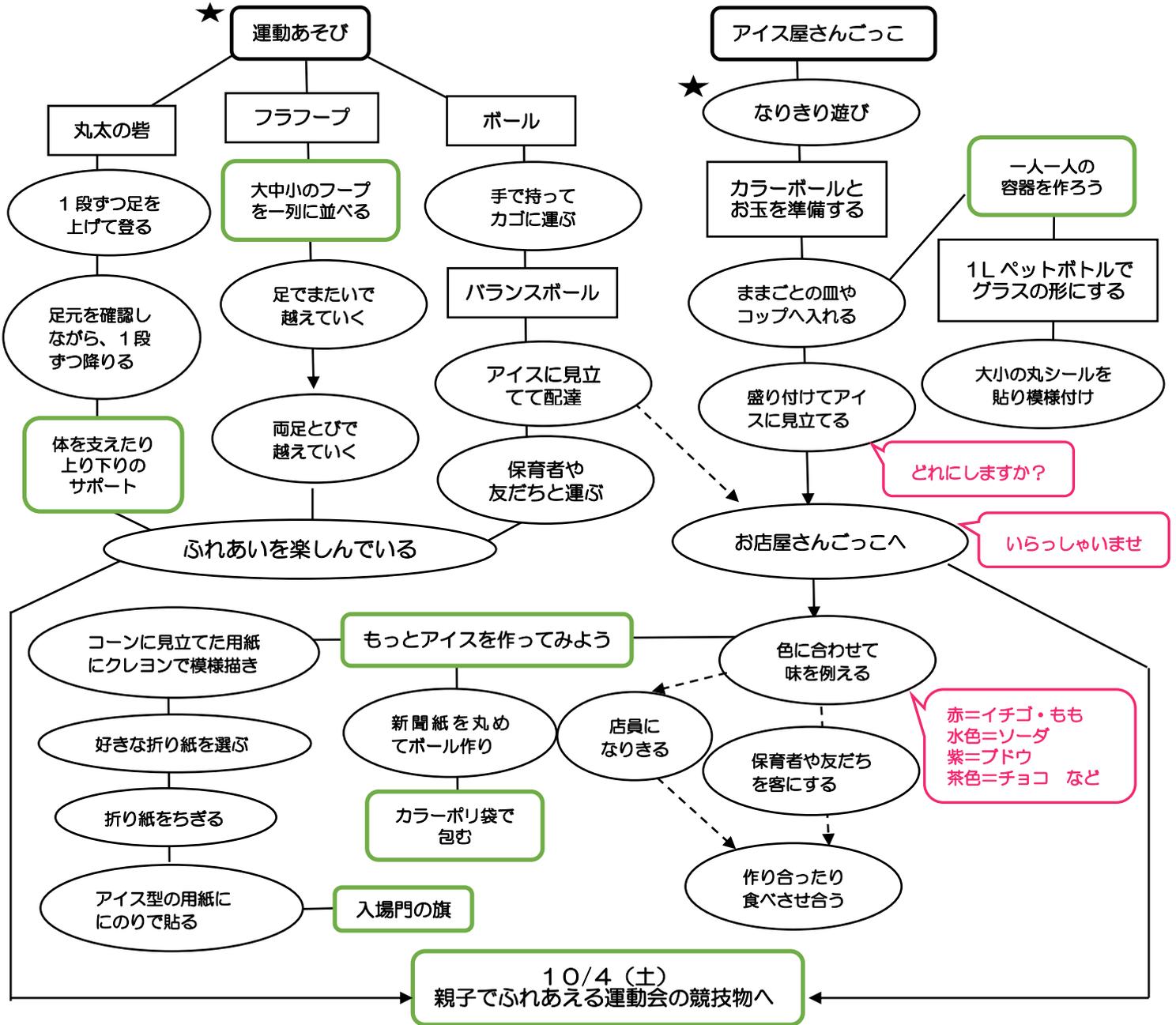
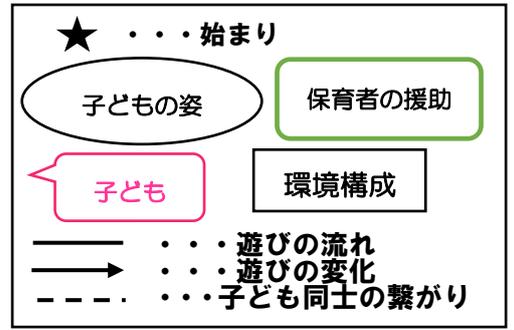
＊遊びの経過＊

- ・猛暑日は、戸外あそびを控えていたので、久しぶりに園庭へ出ると、遊具遊びを好んで楽しんでいる。
- ・プール遊びで楽しんでいたアイス屋さんごっこを部屋でも、手作りボールを使って、楽しんでいる。

〈運動会にむけて〉

＊遊びに対する保育者の願い＊

- ・子どもたちが楽しんでいるごっこ遊びなどを運動会の競技に取り入れ、友だちや保育者と一緒に、体を動かすことを楽しんでいきたい。
- ・保護者からのアンケートと、子どもたちの遊びを取り入れ、親子で楽しめる運動遊びを考えていきたい。



＊子どもの姿＊

- ・プール遊びのアイス作りの延長で室内遊びでも、アイス屋さんごっこが盛り上がった。新聞紙でアイス作りやアイスを入れるグラス作りなど、アイスに必要なものを一緒に作っていた。また、運動遊びでは、大きなボールを運んで保育者とカラーコーンに乗せて大きなアイス作りを楽しんだ。

＊次の保育に向けて＊

- ・運動会では、子どもたちが楽しんできたものを親子と一緒に触れ合いながら楽しんでほしい。
- ・運動会後も、競技物を使って、運動遊びやごっこ遊びの余韻を楽しんでいきたい。また、秋を感じながら、自然物にも触れていきたい。

＊遊びや学びのプロセスを捉えよう＊

- ・今年は、保護者とどのような運動会にしたいかアンケートをとったところ、親子でふれあいが持てるものという声が多くあった。そのため、今楽しんでいるごっこ遊びや、運動遊びを取り入れた運動会ごっこを楽しんできた。アイス屋さんをイメージできるように、一緒にアイス新聞紙で作ったり、自分だけのグラスをペットボトル容器で作った。遊んでいく中で、カラーボールの色を見て、「赤はイチゴ味」、「茶色のチョコ食べたことがある」、「カップのアイス知ってる」など、子どもたちの声や経験から、色とアイスの味をリンクさせ見立てることが出来るようになっていく。運動会では、子どもたちの遊びの取り組みを連絡帳やクラスだよりなどで伝えたことで、親子でふれあいながら楽しんでいる姿が多く見られた。

〈R7.10.4(土) 第二幼稚園の運動会 2歳児〉

保護者の声	保育者の思い	当日気づいたこと・感じたこと
<p>・家でも、ストライダーが大好きなので、取り入れてもいいのかなと思います。(普段と違う環境なので、乗りたいがらないかもしれませんが、その時は、抱っこでもいいのかなと思う。</p> <p>・お友だちと話をしたり、コミュニケーションを取ることが、出来るようになってきたので、お友だちと楽しく一緒にできるような運動会を見たい。</p> <p>・せっかくの親子競技なら子どもとふれあいながら、できるのが良いのかなと思います。(二人三脚とか、抱っこしてパン食い競争など)年齢によって制限とありますが。</p> <p>・夏祭りで、トンネルをくぐったり、すべり台をしたり、様々な動作があるのがとても楽しそうだったので、運動会でも、そのように挑戦する姿をみたい。</p> <p>・お友だちを応援したりして楽しんだりしたい。</p> <p>・男の子は戦いもの、女の子はプリンセスなどになりきって、1本橋を渡ったり、ボールを蹴ったりしたりする運動会</p> <p>・競技の話と違いますが、クラス全員でも良いので、全員で写真を撮りたいです。せめて、家族での写真を撮っていただけたら嬉しいです。</p>	<p>→ストライダーを取り入れたいと考えているが、まだ乗れない子もいる。他のクラスとの兼ね合いを考慮し、ストライダーは次年度で考えていく。</p> <p>→やりとりを楽しめる場面を作っていこうと思う。</p> <p>→親子で十分にふれあい、楽しめる競技を考えている。その中でも、子ども自身の成長を感じられる場面も入れていきたい。 (2歳児の運動機能やアレルギー対応を考えると、2人3脚やパン食い競争は難しい)</p> <p>→友だちや大きい子の遊びを見て、丸太の砦に登ることに挑戦しているので取り入れていきたい。また、普段楽しんでいる運動あそびのボールやフラフープなどを取り入れていきたい。</p> <p>→みんなで応援したり、遊びの中でも、友だちを応援したり楽しい雰囲気を作っていく。</p> <p>→興味を持って楽しんでいるごっこ遊びから考えていきたい。</p> <p>→検討 競技後のクラス活動で、集合写真を撮り、購入してもらう形にしていく。</p>	<p>・丸太の砦を子ども一人で登れたことに、驚いていた保護者がいて、子どもの成長を喜んでもらえて良かった。</p> <p>・競技が終わると、応援をしたり、親子で作ったアイスクリーム・グラスを見て、会話が弾み、楽しんでいただけた。</p> <p>・当日は、競技前から父、母どちらと競技をするのかなど、子どもたちの意思を保護者が十分に受け止めてくれたことで、笑顔で競技のスタートを切れる姿に嬉しく思った。</p> <p>・行事への思いを聞けたことができた。保護者の思いが全て取り入れることが難しいが、特にふれあうという所をポイントにし、親に手伝ってもらう内容よりも、一緒に運ぶことや登り下り等でのふれあいを当日も親子で楽しんでくれていると感じた。</p> <p>・撮影した物を写真販売で買えることを伝えていなかったため、事前に知っていたら、両親で写真に入って撮影できたのにと、思う家庭もあったかもしれないと感じた。当日は、競技後に解散、年児で時間差もあるため、全体写真だけでなく、解散後に、大きなアイスとコーンを会場の邪魔にならない所にフォトスポットとしておいたりすると、祖父母や兄弟など、家族みんなで思い出を作ったりもできるのかとも思った。(次の競技もあるため、時間制限は大切だと思うが…)</p>
		

改善点・今後の課題

・アイス屋さんになりきり、カバに装した大人に「はい、どうぞ」と声をかけるところを役員さんをお願いしたが、競技として先々に流れや緊張があったため、やりとりするという所まではいかなかった。園内の職員が行った方が、やりとりができたのか、親子で一緒に言葉のやり取りをするなど工夫が必要だった。

・事前アンケートよりいただいた意見を今年は反映し、全体写真をとる時間を設けた。事前に伝えていなかったが、早く撮影できた。なかなかクラスで集合写真を撮る機会がないので、機会があってよかった。

・アンケートを取ったことで、どんな姿が見たいのから保護者から聞くことが出来た。連絡帳やクラスだより、そだちえによる写真の販売で子どもの運動あそびに対する姿を見ることで、一層運動会を迎えるまでの過程を親子で楽しみにすることが出来、会話が弾んだりする姿がある。今後も、アンケートにて、保護者による行事に対する声を聞いたり、運動あそびの様子を配信をしたりして、親子で運動会を楽しみにし、子どもの成長を感じられるようにしていきたい。

<保護者の感想より・2歳児>

しっかりやる時は
やりきる姿を見て
感動した。

大人が思うより、
子どもはたくましく
なっていた。

直前まで抱っこだったが、と
っても上手に返事が言えたり、
抱っこどころか、走る姿
に感動した。

お土産をもらうとき
も、みんな並んでえら
いなと思った。

クラスみんなが集合
した時に安心して、競
技を楽しめた。

お家でも楽しかった思い
出として、運動会の話
を何回もしてくれている。

小学生が参加できて
とても助かった。

南部小学校へ行くところ
が渋滞になっていた。

見学席で保護者方々がクラス
の競技が終了するごとに席を
ゆすり合う姿が見られ、温か
さを感じられた。

戦隊が今年で最後で
少し寂しいですが、今
年は5人の登場で素
晴らしかった。

丸太の砦の上まで自分
で登る姿に感動した。

先生方の素晴らしいア
イディアいっぱいアイ
スクリーム屋さんを親子
で楽しみながら行えた。

お土産のトロパンが
入っていてびっくりし
た。親子でおいしく頂い
た。

園の親子行事はクラスの友だち
との関わりや仲良くしてくれる
友だちの親御さんと話ができる
貴重な機会なので、大切にしてい
きたい。

運動会の計画・準備・
暖かいサポートとご
指導が成功に導いて
いた。

<保護者の思いを来年度にどうつなげていくか>

競技が始まる前まで抱っこを求めていたが、自分の番になると、自分の足で競技に参加できたり、友だちと一緒に頑張ろうとしたりと成長を感じられたという声が多かった。来年度は、好きな遊びから競技へとつなげていき、親子と一緒に楽しめる競技を考えていく。また、親子行事は、クラスの子も同士・保護者同士の関わりを大切に取り組めるようにしていく。

4. 取り組んでみての保育者の気付き・成果

<3歳児 ちょうちよぐみ>

子どもたちが普段遊んでいる様子を、初めての場所で、どのように伝えたり、見せたりすることができるかは、工夫次第なのではないかと思った。それには、いつもどんなことに関心を持って楽しんでいるかを見て、一緒に楽しんでいくことが大事で、大きなテーマは毎年同じにしたとしても、内容は、その年々に合わせ、変化があることが必要なのではないかと思った。

今年度はその点で言うと、「草花で作ろう」を1つに限定せず、ベルトかかんむりの好きな方と選択できるようにしたことで、親子で相談することが生まれ、子ども主体で楽しむピクニックができたのではないかと感じた。

また、雨天でも中止せず、雨の日の遊び方を楽しんでみようとして活動したが、ほとんどの家庭から雨の日でも楽しかった、貴重な経験だと感想をもらい、晴れてないといけないという考えではなく、雨でも室内で、できることを考えていく柔軟な発想が大事ではないかと思う気付きがあった。

行事の結果や反省点ばかりをこれまでは振り返ることが多かったが、遊びの経過や保育者の思い、保護者の思いなども踏まえ、含めていくことで、一つの行事が、より深い内容になり、この取り組みが良い機会になったと思う。

<2歳児 ことりぐみ>

ことりぐみは、プール遊びの時の遊びをプール遊び後、部屋でのごっこ遊びへとつなげたあそびを運動会でのテーマにつなげた。丸太の砦で、全員出来るものの、久しぶりの固定遊具遊びで怖がる様子があったが、鈴をつけた看板にタッチをするというような遊びを取り入れたことで、怖さを克服して楽しめるようになった。

アイスクリーム屋さんを作ろうと、新聞紙を丸めて、どんなアイスを作ろうと話をしたり、自分だけのグラスに丸シールを貼って作ったりし、サンバイザーを身に付けてごっこあそびをしたことで、よりアイス屋さんになりきっていたように感じる。

運動会当日は、緊張からか「どうぞ」という言葉のやりとりがむずかしかったものの、丸太の砦に登って驚いたという声もあり、子どもの成長を感じ、ゴールを目指すことが出来、競技の内容には無理はなかったようだった。

今回、アンケートを取ったことで、保護者の運動会を見る視線を感じる事が出来、連絡帳やクラスだより、そだちえによる写真など、当日の子どもの様子を通して、子どもの成長を見られてよかったという声が聞こえて良かった。

今回の研究では、マップ式を採用し、まとめてみた。また、指導計画の一部もウェブ式にしたことで、あそびの展開や行事に向けての取り組みを見たり、考えたりできて良かった。

5. まとめ ねらいからの達成は？

①子どもの育ちを感じてもらう行事にする

<0~2歳児>

・研究の中で、行事を取り上げ、運動会について研究を進めてきた。今回は、運動会について保護者はどのように行事を考えているか、行事についての思い、保育者の行事に対する共通意識、保護者との思いの共通点などを、事前にアンケートをとり、運動会の競技の内容などへ反映させた。アンケートやクラスだよりで内容や写真を掲示し、これまでの遊びの様子を知らせていたことで、運動あそびへの成長を事前に感じてもらい、当日参加していただくことができた。

<3~5歳児>

・子どもの育ちを理解してこそ行事が成り立つものと再確認し、担任間で遊びから行事へと繋げていく意識が高まったことで、子どもの育ちを感じてもらう行事へ繋げていくことができた。
・ピクニックで、親子が楽しい時間を共有できる場(機会)をもてるよう、日々子どもの成長に気付いていくことが大切。
・(実行にうつすため)担任間での共通理解、協力体制、行動力が求められた。

②保育者同士の共通理解が図れるための保育計画

<0~2歳児>

・今回、ウェブ型の方法で研究を進めていったことで、日々の遊びが図に見える化されたことで、これまでの記録からは、見えてこなかった遊びの変化や保育者の動き、展開が見てすぐに分かるようになった。また、このウェブ型を考えていくにあたり、担任だけでなく、クラスの副担任も交えて、保育者全員が図に書き込んでいったことで、様々な視点からの活動への見え方ができ、このウェブ型は今後の保育にも活かしていけると考えられた。

<3~5歳児>

・新たな書式を取り入れ、可視化し、複数担任が協力して記録に取り組んだことでクラスでの子ども理解、情報交換がスムーズになった。記録の大切さを改めて感じた。
・何が今最善であるかを、子どもの姿から見て、感じて、考えようとする心持ちを持つことが大切で、それが保育の計画、実践、評価、改善へと結びついていく。日頃の保育を大切にして、保育の計画を立てていきたい。

③園と保護者が一体となった行事のあり方

〈0～2歳児〉

- ・運動会の当日の様子や、事後の感想から、事前にアンケートをとり、子どもの遊びの様子をクラスだよりや、アンケートの冒頭で知らせていたことで、運動会当日だけでなく、行事の前から保護者も運動会へ対する熱量を高め、参加できていたと考えた。保育者の視点からも、保護者の意見を取り入れた運動会は、競技全体を保護者と一緒に作り上げられたという達成感が感じられ、事前にアンケートをとる方法も今後活かしていけるのではないかなと思う。

〈3～5歳児〉

- ・保護者から行事への感想を寄せてもらうと、行事を通して楽しい時間を、親子やクラスみんなと一緒に共有できた等の内容が多く寄せられた。園に対して安心感をもってもらえていることにも繋がったと考える。
- ・感想の中には、自分達の保育に気づかされ、改善点や今後に関わる内容もあった。保護者の想いに触れながら、連携して来年度に向けて再考していく。
- ・誰のための行事、保育なのか、言うまでもなく子ども、保護者のためであることを重視して取り組みたい。



保育実践研究

一人ひとりの「こどもがまんなか」をまもる質の高い幼児教育を

～社会全体でつむぎ未来へつなぐために～

学校法人法音学園 米沢西部こども園

保育教諭 金田 亜由実

研究主題 「やってみたい！」から育つ子どもの姿
～畑の活動から考える～

1. 主題設定理由（ねらい）

近年、子ども達を取り巻く環境は目まぐるしく変化している。スマートフォンやタブレットの情報機器が身近な存在となり、子ども達の家庭での遊びの形態やコミュニケーションの方法は多様化してきた。その一方でこうした生活スタイルの変化に伴い、自然の中で身体を使って遊ぶ機会や主体的に試行錯誤するような直接体験が減少傾向にあり、人と向き合い自分の思いを言葉や態度で伝えるという経験も少なくなってきたように感じる。

このような状況だからこそ、自然に触れる活動は子どもが五感を働かせて豊かな感性を育むだけでなく、生命や環境への関心を深める貴重な経験として改めて重要性が高まっていると考える。

自園では毎年、子ども達の年齢に合わせて畑で野菜を育て収穫をする体験をおこなっている。土や植物、虫などに触れて感触や匂いを肌で感じることで意欲を刺激し、作物がうまく育つように試行錯誤し知識を深める経験を行っている。また、収穫物を手にし達成感や満足感を味わうことで心の成長にもつながっていると考える。

今回、畑の活動を通して「やってみたい！」という好奇心がくすぐられるその気持ちがどのように生まれ、どのように育まれていくのか、また学びや成長にどのようにつながっていくのかを読み取っていききたい。また、子ども達の主体的な活動を支える保育教諭として、意欲を引き出すような関わり方や専門性を高めていきたい。

《目指す子どもの姿》

- ・自分で考えて行動できる子
- ・何事にも興味・関心をもてる子
- ・意欲をもって取り組める子
- ・思いを表現できる子
- ・相手を思いやり、友達と協力できる子

2. 研究方法

- ・子ども達の実態を把握する。
- ・年長組が自園にある大きな畑で経験する活動から育つ姿を捉えていく。
- ・畑の年間計画に沿って、季節ごとのねらいを立て進めていく。
- ・子ども達同士の話し合いの場を意識して作り、子ども達からの声に聴いていく。
- ・子どもと一緒に活動の振り返りをしながら、環境を再構築していく。

3. 研究内容

《研究計画》…畑の年間計画に沿って、季節ごとのねらいを立てて進めていく。

(子ども達の興味や関心、活動の流れによっては柔軟に対応していく)

- 春・畑作りの始まりとして子ども達と一緒に土に触れたり、どんな野菜を育てたいか話し合い、畑での活動への興味を引き出し、期待感を持たせる。
 - ・種蒔きなどの活動を通して、自然に触れて関心を膨らませると共に、「自分たちの畑」という意識も育てる。
- 夏・存分に自然に触れ、野菜が成長していく変化に気付く力を育てる。観察することを楽しみ、発見や疑問を友達と話すことで、興味や関心を深めることができるようにする。
 - ・友達と協力して草むしりや水やりなどの世話に取り組み、協同性を育む。
- 秋・収穫の喜びを実感し、友達と共有する。収穫物を実際に食べることで食への感謝の気持ちを持つ。
 - ・天候や自然の影響を受けることも考えられるため、失敗からの学びも大切に取り上げて深められるような関わりをする。「またやってみたい！」という意欲につながられるようにする。

以上のことを踏まえながら実践していく。

《春》

戸外遊びをする中で、畑のことを意識し始める様子が見られる。昨年経験したことや、年長児がどのような活動をしていたかを思い出して、今年は何を育てようかと期待を膨らませながら友達と話す姿が見られた。



去年の年長の姿や、自分の好きな物などロク々に話し、畑での活動に意欲的な様子がうかがえる。職員間でも話し合いをおこない、じゃがいもの栽培に挑戦することを子ども達と一緒に決定した。

事例① ジャがいもを植える

園児の姿	つぶやき	保育教諭 ○援助 ●思い ☆気付き・読み取り
<p>◎種芋を植える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・種芋に興味をもち、気付いたことを話しながら、喜んで植え付けを行う。 ・土に触れることに抵抗がある子がいる。 <p>・ジャがいもの成長を楽しみにする。</p> <p>～その後～</p> <ul style="list-style-type: none"> ・図鑑を見て、ジャがいもがどのように成長するか期待を膨らませる。 <p>・種芋の絵を描き始めた。</p> <p>・日付を書き入れる。</p> <p>～2週間後～</p> <ul style="list-style-type: none"> ・発芽していることに気付き、嬉しそうに友達や保育教諭に伝える。 ・ジャがいもの芽だけでなく雑草もはえてきたことに気付く。 <p>～数日後～</p> <ul style="list-style-type: none"> ・花が咲いていることに気付いた。観察日記に花の絵を描いていた。 	<p>「これが種なの？本物のジャがいもみたい！」 「トゲみたいなのあるね」</p>  <p>「早くジャがいもできないかなあ」</p> <p>「あのトゲみたいなの、芽なんだって！」 「へ～そうなんだ！」</p> <p>「種芋にツノみたいなのあったよね！」 「バイキン城みたい！」</p>  <p>「そっか！書いてみよう」 「5ってどうだっけ？」 「こう書くんだよ！」</p> <p>「芽が出てー！」 「葉っぱも出てきてる！」</p> <p>「あれ？芽じゃないのもあるよ！」 「なんの葉っぱ？」 「草じゃない？」 「草むしりしよう！」 「どれが草？」「これ？」 「図鑑で見たのはこれ！」 「ジャがいもおっきくなるように！」 「見てー！いっぱい取れた！」</p> <p>「花咲いてるね！」 「すごーい！」 「図鑑で見たのと同じだ」 「絵描こう！」</p>	<p>○援助 ●思い ☆気付き・読み取り</p> <p>●土や種芋に触れ、存分に感触を味わってほしい。 ☆普段食べるジャがいもとの違いに気付くことができた。 ●土に触れるのが苦手な子も少しでも経験できるといいな。</p> <p>「いつできるかな？楽しみだね！」</p> <p>○ジャがいもの成長について調べられるように図鑑を用意する。 ☆図鑑で見たことを友達と話し、新しい知識を得て言葉で伝え合うことができています。 ○種芋からの成長していく様子を目で見て分かるよう、コピー用紙を冊子型にしたものを用意する。 ●観察日記としてジャがいもの成長を記録していき、興味が持続していくといいなあ。 ☆じっくりと観察して細かいところまで表現しようとする力が育っている。 ○文字や数字にも興味をもち始めたので、日付を書くことを提案してみる。 「いつ植えたかわかるように日付も書いておくといいね！」</p> <p>「すごーい！やったね！」 ☆ジャがいもの成長を楽しみにしていたからこそ、目に見える成長を喜んでいる。</p> <p>●草むしりすることに気付いてくれるといいな。 「そうだよ、栄養いなくなっちゃうね。」 ☆図鑑で調べ、ジャがいもの芽や葉がどのようなものか知り、雑草との違いを友達同士話し合いながら草むしりに取り組むことができた。 ☆自分たちで植えたジャがいもに愛着がわき、大切に世話をしようとする気持ちが芽生えた。</p> <p>☆よく観察し花の細かいところにも気付き、忠実に描いている。</p>

〈考察〉

初めてのじゃがいもの植え付けの体験から植物に興味をもつことができた。普段食べているじゃがいもの違いに気付き、不思議に思ったことを自ら調べて畑でその知識が活かされる場面も見られた。また、調べてわかったことを周りの友達に伝え、知識を共有し実際に触れた種芋や花の絵を描くことで、じっくり観察することができた。観察日記は日付も書き入れることで数字に興味を持つことができた。自分たちで植えたじゃがいものに愛着をもち、園庭で遊んでいるときも畑の様子を気に向け、発芽したとき大喜びし友達同士で嬉しい気持ちを共有することができた。じゃがいもの成長を喜び、収穫することを楽しみにしながら、世話をすることができた。

〈夏〉

畑一面、じゃがいもの葉に覆われて、楽しみにしていた収穫の時期になる。

事例② じゃがいもの収穫

園児の姿	つぶやき	保育教諭 ○援助 ●思い ☆気付き・読み取り
<p>◎じゃがいもの収穫をする。</p> <p>・茎をひっぱるとじゃがいもがゴロゴロと出てきて喜んでいる。</p> <p>・どうやって収穫しているか戸惑っている子ども、友達が掘ってくれたところからじゃがいもを見付け満足そうな表情であった。</p>	<p>「じゃがいもいっぱいとるぞー！」 「本当にじゃがいもあるかな…？」 「いっぱいなってるー！」 「おりゃー！！」</p>  <p>「どうしたらいいんだろう？」 「ここにあるかもよ！」 「Mちゃん、とっていいよ！」</p> 	<p>●じゃがいもがどんなふうになっているか気付けるかな？ ☆じゃがいもができているのか、不安と期待感がうかがえる。 「じゃがいも土の中に残ってないように全部とるんだよ〜！」</p> <p>☆自分たちで育てたじゃがいもがたくさんとれて、笑顔が見られ、満足感を味わっている。</p> <p>☆戸惑っている友達に心を寄せて、協力し合っている！思いやりの気持ちが育っているんだな。</p>

〈考察〉

じゃがいもの観察をしながら収穫を楽しみにしていた子ども達。愛情をもって世話をした分、期待感をもちながら収穫することができた。いぎ茎をひっぱってみると、ゴロゴロと出てくるじゃがいもに大喜び。一人一人が夢中で取り組むことができ、満足感を味わうことができた。中には、友達の戸惑う様子に気付き、自ら進んで手伝う姿も見られ、心の成長を感じた。収穫したじゃがいもは給食で提供してもらい、野菜が苦手な子ども「これ、畑でみんなでとったじゃがいもだね！」と喜んで食べる姿が見られ、食べ物への興味・関心が高まった。

〈秋〉

じゃがいもを収穫してから空いた畑を見て、「また植えたいよね！」「次はどんな野菜にしようか？」と、栽培したい野菜のことを話し合っていた。するとA児が「おじいちゃんの畑で大根の

種蒔きしたんだよ！大根の種ってちっちゃいんだよ！」と話す姿をきっかけに「大根植えてみようよ！」と盛り上がっていた。じゃがいもの栽培を経験し、畑での活動に自信をもった子ども達から「大根育てたい！やってみたい！」という声上がり、大根の栽培に取り組むことになった。

大根の小さな種をこぼさないよう丁寧に種蒔きを行い成長を見守る。大根の芽が伸び、白い部分が顔を出すころ、「もうすぐ抜けるね！！」と期待いっぱいの様子だった。



大根の収穫では、たくさんの葉の中から大根の頭を見付け出し、力いっぱい引き抜くと、自分の足より太い大根が抜け、大興奮の子ども達。「もっと抜く！」と楽しんで次々に収穫していた。大きな大根を抜くときは「手伝って！」と声を掛け合い、絵本で見た“おおきなかぶ”を思い出し友達と協力する姿が見られた。泥で汚れることも気にせず夢中で取り組み、大・中・小様々な大きさの大根を収穫することができ、達成感を味わうことができた。

山積みになった大根を見て「やったー！」「すごい！」「たくさんとれたね！」と喜ぶ子ども達。子ども達から上がった声の中に「だいこんやさんやろうよ！」という声があり、「やってみよう！」との声がたくさん聞かれた。子ども達のだいこんやさんをやってみたいという気持ちを大切にしたいと思い、職員間で話し合いを行った。



事例③ 大根の販売

園児の姿	つぶやき	保育教諭 ○援助 ●思い ☆気付き・読み取り
<p>・だいこんやさんに向けて、何を準備したら良いか話し合う。</p> <p>・お店やさんをするのに何が必要か話し合う。</p> <p>・お家の人と買い物に行ったことを思い出しながら話し合う。</p> <p>・だいこんやさん開店に向け準備にとりかかる。</p> <p>①看板作り</p> <p>・お店の様子をイメージしながら友達と意見を出し合い、張り切って文字を書いたり、色を染めたりして看板の製作に取り組んだ。</p> <p>②役割を決める</p> <p>・お店で働く人を思い浮かべ、やりたい仕事を話す。</p> <p>・どんな仕事がしたいか友達に伝え合っている。</p> <p>・どうやって決めるか話し合っている。</p> <p>・それぞれの役割がどのような仕事をするのか話し合う。</p> <p>・役割が決まり、だいこ</p>	<p>「お金！何円にするか決める！」</p> <p>「お金いるよね！」</p> <p>「看板！！だいこんやって書くの！」</p> <p>「うーん…」</p> <p>「あっ！レジの人！」</p> <p>「売る人！」</p> <p>「売ってる物を並べる人もいるよ！」</p> <p>「おかし買う！」</p> <p>「おもちゃがいいよ！」</p> <p>「そっか。ぐるぐる回ってるんだね！」</p> <p>「うーん…どうしよう。」</p> <p>「おかし食べたらなくなるし…」</p> <p>「大根の種買ったら？」</p> <p>「また大根が育てられるね！」</p> <p>「それが良いね！」</p> <p>「画用紙ちょうだい！」</p> <p>「テープもほしいね！」</p> <p>「大根が売ってるってわかるようにしないと！」</p> <p>「私書けるよ！」</p> <p>「大きく書くとわかる？」</p> <p>「僕は色染めるよ！」</p> <p>「レジの人やりたい！」</p> <p>「売ってる物を並べてる人もいるよ！」</p> <p>「いらっしゃいませって言う人もいる！」</p> <p>「レジの人ずっとやりたかったの！」</p> <p>「順番でやろうよ。」</p> <p>「じゃんけんで決めよう」</p> <p>「いいよ！勝った人から決めよう！」</p> <p>「どうしてもやりたい！」</p>	<p>「だいこんやさんをするのに何を準備したらいいかな？」</p> <p>●お店やさんをするにはどんな役割があるか子ども達だけで気付いてほしいなあ。</p> <p>「あと何かあるかな？」</p> <p>「お家の人と買い物に行ったときを思い出してみたら？」</p> <p>○子ども達から出た意見をホワイトボードに書き出し、ほかにどのような役割が必要で、何を準備したら良いのか整理していく。</p> <p>「売って、もらったお金どうする？」</p> <p>○作る→売る→買うの生産のサイクルについて話をする。</p> <p>「おかしやおもちゃを買っちゃったら、お金なくなっちゃうね…」</p> <p>●何か良いアイデアが出ないかな？</p> <p>「良いね！大根の種買おうか！」</p> <p>「良いアイデアだね！」</p> <p>○子ども達から出た必要な材料を用意する。</p> <p>☆自分のできることに取り組み、自然に役割分担ができています。</p> <p>☆お店の様子をイメージし、友達と活発に話し合いながら協力して製作している。</p> <p>○子ども達のやりとりを見守る。</p> <p>☆自分の考えを言葉で伝えたり、友達の意見を聞いて解決しようとしたり、とても充実した話し合いができています。</p> <p>○じゃんけんで負けた子には「頑張ろうね」など励ます。</p> <p>☆一人一人が自分の役割を理解し、自分の仕事をする！と張り切っている。責任を持ってやり遂げようとしている様子が</p>

<p>んやさんの開店を楽しみにしている様子が見える。</p>		<p>見られる。 ●みんなで決めたこと、最後まで頑張っ てほしいな。</p>
<p>～販売当日～ ※朝と夕方の2回行う。 ◎いよいよだいこんやさん の開店！ ・玄関に机を運び大根を 大ききごとに並べる。</p> <p>・恥ずかしさもあるのか 呼び込みの声は控え目である。</p> <p>・一人、また一人とお客 さんが来てくれ、嬉しそうに 声をかけるようになる。 ・買ってくれた人に自然と 「ありがとうございました！」と 伝える。 ・買ってくれた大根を丁寧に 新聞紙で包んでお客さんに 渡す。</p> <p>・夕方の販売は朝の経験 を元に、大きな呼び声が 飛び交い、活気に溢れていた。</p> <p>・用意した大根が完売し 喜んでいました。</p>	<p>「ドキドキするね～」 「お客さんきてくれるかな？」 「このおっきい大根はこっ ちに並べよう！」 「ちっちゃいのはどこ？」</p> <p>「いらっしゃいませ…」</p>  <p>「いらっしゃいませ！ 大根買ってくださーい！」 「100円でーす！」</p> <p>「ありがとうございました！」</p>  <p>「大根おいしいですよ！」 「大根サービスします！」 「おまけでちっちゃい大根 もつけますよ！」</p>  <p>「楽しかったね！」 「いっぱい買ってくれた ね！」 「お家の人、嬉しそうだった ね！」</p>	<p>●みんなで協力して準備してきたので、 楽しめるといいなあ。 ●保護者の方にも子ども達が頑張っ ている姿を見てほしい。</p> <p>☆実際にお店屋さんができることが嬉 しい様子だが、緊張している様子が見 える。 「お客さん来てくれるように元気にい らっしゃいませ！って言う！」</p> <p>☆恥ずかしがっていた子も友達が元気に 声をかける姿を見て、自然と大きな声 でお客さん呼び込んでいる。</p> <p>●買ってしまった方に心を込めて挨拶 している。自分がしてもらって嬉しか ったことなのかな？</p> <p>☆朝より元気いっぱい！だいこんやさん になりきって、呼び込みや感謝の言葉 が自然に出てきている。</p> <p>●一生懸命準備してきたので、大根が 売れて良かったなあ。 ●だいこんやさんをやりきることができ て、みんなの良い表情から満足感を 味わえたことが伝わってくる。</p>

〈考察〉

子ども達の「やってみよう！」から始まった大根屋さん。店を作り上げる過程で自分の思いを伝える表現力、相手の話を聞こうとする態度、販売でいろいろな人と関わる社会性など、一体的に育むことができたのではないかと思います。みんなで“だいこんやさん”というひとつの活動をやり遂げたという経験をしたことで、子ども達は大きな自信をもつことができたのではないかと思います。大根屋さんの活動を通して、子ども達が遊びの中で学ぶ姿を保護者の方に見ていただくことができ、良い機会となった。

4. 成果と今後の課題

- ・子ども達の「やってみたい！」という気持ちを起点に主体的に行動する姿が多く見られた。大根を売ってみたいと子ども達から提案があり、看板作りやお店を開くための役割分担など、ひとつひとつの過程に子ども達の意欲と主体的な関わりが見えた。
- ・意欲や関心が高まったことで、思ったことを自然に言葉で表現する姿が多く見られるようになった。新しい気付きがあったとき、初めは気の合う友達に知らせていたが、保育教諭に知らせたり、みんなの前で発表することにも自信をもつことができるようになった。友達と話しをすることで嬉しい気持ちを共有することができ、相手を思いやれる心の育ちにつながった。
- ・疑問に思ったことに対して、友達と一緒に探究しようとする姿が見られ、図鑑を見たり詳しい人に聞いて調べることで、知識を深めることができた。興味、意欲をもつことでより多くの学びを得て、「やってみたい！」という気持ちが膨らみ、さらには子ども主体の自分の力を発揮する姿につながっていくのではないかと思う。
- ・今回、畑での活動を通して、畑は子ども達の五感を刺激し好奇心を育み「やってみたい！」を自然に引き出してくれた。土の感触や虫や植物との出会い、収穫の喜びなど本物に触れる体験は幼児期に大切とされる感性や主体性を育ててくれる場だということを改めて感じた。
- ・この実践を通して、子ども達は自ら考え、仲間と協力しながら一つの目的をやり遂げる経験ができた。単なる畑活動にとどまらず、栽培から販売という“社会的なつながり”にまで広がり「またやってみたい！」と次への意欲につながっていった。子ども同士で気付き、考え、工夫するといった試行錯誤を繰り返すことで知識を深めて充実感を味わうことができるのだと思う。
- ・保育教諭は子どもの「やってみたい！」の思いを温かく受け止め、理解して共感し、子ども達が伸び伸びと遊び込めるよう環境を整えながら、時には子ども達と共に環境を構成していくことが大切であると再確認した。
- ・今後は、子ども達の発想をより自由に展開できる環境作りや、地域の人々との交流を取り入れていく中で、子ども達なりに楽しんだり取り組める体験を計画し、地域との交流を広げ深めていきたい。

保育実践研究

一人ひとりの「こどもがまんなか」をまもる質の高い幼児教育を

～社会全体でつむぎ未来へつなぐために～

学校法人天竺学園

認定こども園小松幼稚園

主幹教諭 田村 聖子

研究主題 一人ひとりを大切にする保育の在り方

～わくわく保育を目指して～

1. 主題設定理由（ねらい）

子どもを取り巻く環境が急激に変化していく昨今。子ども達や保護者の様子を見てみると、近年のメディアの普及や防犯対策などから偏った体験を余儀なくされていたり、大人のペースに合わせることを求められ急かす教育がされていることがあるようだ。そのことにより、自分の興味関心を追及したり、失敗を恐れずに挑戦したり、他者とかかわりながら学ぶことなどの力が低下しているように思う。そのような背景があるなかで、子ども達がわくわくしながら喜びをもって学ぶためにはどうしたらよいかを改めて考える必要があると思う。また、気になる子や特性を持った子についても援助を考えるあまりわくわくが後回しになる場面もある。まずは子ども達一人ひとりを理解し、保育者自身も楽しさを充分に感じながら保育をしていきたいと考えた。

2. 研究方法

- 子ども達が園生活の中で、喜びをもって学ぶということはどういうことであるかを職員同士で共通理解し、同じ目標に向かって進む姿勢を改めて整え研究を進めていく。
- 遊びのミーティングにおいて、各クラスの議題を持ち寄り「今なにをたのしんでいるのか」「どんな環境設定が必要か」を話し合いながら、子ども理解を深め保育を語る環境を整える。
- 気になる子や特性を持った子についての理解を深め、肯定的に受け止める。

3. 研究内容

～喜びを持って学ぶとは～

わかる、できるという実感をもつ

自分の興味関心を追求する

つまらないことやいやなことをのりこえて達成感を味わう

自分の身に付けた内容を記録する（製作・思い出帳など）

他者との対話で敬意をもって（いいね！共感）学ぶことで感情的な繋がりを強化する

五感を使って外界と触れ合ったりする

事例Ⅰ【街づくりからの広がり（年中児）】

子どもの姿

保育者の思い・かかわり

効果

子ども達と保育者が相談しながら、動物園やバスなど街にあるものを増やして行く中で「水族館」に興味が高まった子ども達。「すいぞくかんいったことある！」と体験したことを教えてくれたり、海の生き物の図鑑をじっくり見たり、特徴をとらえながら絵にしたりする姿があった。



描いて楽しんでいるが、水族館を表現するにはどうしたらいいかな…
まずは水槽を作ってみよう！



新聞紙、トイレットペーパーの芯、プチプチ等いろいろな素材を使って水槽を表現。

プチプチの点が「おさかなのあわみたい！」とイメージが膨らんだよう。中には、手でダイナミックに描く子ども。「これはおおなみなんだ！」と水の流れも表現。それぞれの表現方法が組み合わせさり素敵な水槽が完成！

「うみにおよいでみたい！」
「わたしはここにおよがせる！」とイメージを膨らませながらオリジナルの水族館作りを楽しむ姿があった。
「イルカショーもあるよね！」
「イルカっておおきいんだよ！」
「え？どれくらい？」
「う～んと、こーんぐらい（両手を広げて）」
自分が経験したことを思い出しながら遊びに活かそうとする姿があった。



子ども達の、イルカの大きさに気づいた着目点を大切にしたい！
実際の大きさを子ども達に知らせるのも面白いかも。



保育者が用意したイルカやクジラの大きさが書いている掲示を見て、メジャーで実際の大きさを測り大判用紙でイルカを作ってみることに。
自分たちが想像していた以上の大きさに驚く子ども達！
「こんなにおおきいの！」「えー！！」



遊びのミーティングにて

☆実物と同じ大きさのイルカを作ってみたが、子ども達が想像していた以上に大きかったよう。このイルカをイルカショーに発展させるにはどうしたらいいか…大きすぎて子ども達には大変かも。

★子ども達の興味関心を大切にしながら満足感を得られるようにするには、子ども達が描いたミニイルカに棒を付けてミニイルカショーでもいいのか？



実物大に興味を示したことも新たな発見につながったが、イルカショーをしたい！という子どもの気持ちに寄り添うことを優先してみたところ満足感に繋がり更に遊びを深めることができていた。

「イルカショーにはボールがひつよう！」「おんがくかけて！」とイメージを形にする姿があった。「イルカのなまえはももちゃんです。ジャンプがとくいです！」となりきって遊びを進めていた。

【考察】

一つの遊びを自分の経験を通して広げていき、その中で興味関心を深めていく姿があった。子ども達のイメージを形にするために材料を充実させたり、掲示物を準備する等の環境を整えたことでその後の遊びがより深まりを持ったように思う。また、友だち同士で教え合ったり考えを伝え合うことで感情の繋がりを強めることができていた。実物大を作ったがどうしようかと行き詰った時は遊びのミーティングを通して、遊びの発展の種を植えるポイントを絞ることができたように思う。

事例2【虫遊びの広がり・繋がり】

子どもの姿

保育者の思い・かかわり

効果

夏、年長児が飼育していたカブトムシを見せてもらったことをきっかけに夏の虫に興味を持ったA男。
「ヘラクレスオオカブト!!」と知っている虫を沢山教えてくれる姿があった。

遊びに発展したら楽しそう！
夏の虫の塗り絵を準備してみた。

遊びのミーティングにて
☆虫への興味をさらに追求できるような遊びは？
★年中児で楽しんでいる昆虫屋さんを見にいったら？
★虫取り遊びも楽しそう！

塗り絵は塗って満足してなかなか遊びに発展しなかった。
「むしになりたい」と突然の発想💡
段ボールで角の形を切ったものに色を付けたり、羽の色を決めてつけて楽しんでいた。

異年齢から刺激をもらうことで、自分の想像の世界や可能性が広がるきっかけに！

年中児のお兄さんから刺激をもらったA男。虫作りに没頭するようになった。
その中で、足の数に気づいたりテープの留め方を工夫したり、様々な気づきをしながらたくさんのお兄さんの虫を作り楽しんでいた。
その姿から、以前は虫に興味のなかった友だちも「つくってみたい!」と興味を持つようになり、虫遊びの輪が広がっていった。

年中児のお兄さんから「おうちがないと」というアドバイスをもらい、さっそく空き箱を利用してお家を作ることになった。
「きもひつよう」「きからみつがでてるんだよ」と知っていることを教えてくれる保育者と力を合わせてイメージを形にしていっていったA男。
虫になりたい欲は落ち着いたよう。



その頃年中児の昆虫屋さんには…
盛り上がっていた昆虫屋さんも落ち着きはじめ、中心となって店員役をしていた男児も別の遊びへ行ったり。しかしA男は昆虫屋さんで昆虫ゼリーを買いたくてずっと待っていたり…



遊びのミーティングにて
☆求めている子、遊びから離れていく子。どうバランスをとれば？
★昆虫屋さんがマンネリ化している？新たなアイテムを商品にしてみたら？年少児で使っていた昆虫変身セットを商品にするのも楽しそう！



異年齢同士の遊びが繋が
り合い遊びの深まりが生ま
れ、興味関心を追及する環
境が作られていった！

年少児が使っていた昆虫変身セットを、昆虫屋さんと商品にしてもらえないか保育者から相談されると「いいよ！！」と承諾。昆虫屋さんの一角に陳列。今までの昆虫屋さんと変わったことで興味を持つ子の幅も広がり、落ち着き始めていた昆虫屋さんが再び輝き始めた。



【考察】

興味のあるものについて、どのような環境を設定するかによってそこから遊びが派生していったり、消滅していったりすることが改めて分かった。年少児では考えられないようなアイデアを他の学年の友だちから聞いたり見たりすることで、より興味が深まっていったよう。そのことによって自分でも作れるようになった！という達成感や満足感を味わうことができ心の成長に繋がっていたように思う。異年齢からの刺激の大きさを実感した。

事例3【気になる子：年少児】

現状	園での対応
<p>○入園当初は初めての環境に戸惑う姿があり、お支度や遊びなど積極的に動こうとする姿が少なかった。時間の経過とともに日々繰り返すお支度などはやり方を習得し、自ら動くことができるようになった。</p> <p>●本児のやりたいことができなかつたり意に反したことが起きると泣いてパニック状態になることがある。落ち着くまで20～30分、状況によってはそれ以上の時間を要する。 (給食のごちそうさまに間に合わない際、パニックになることが3回あった)</p>	<p>パニックになった際は必要以上に言葉など掛けずに落ち着くまで見守る。保育者がいることで用件を訴えたい気持ちが大きくなるようであれば、少し離れた所で見守る。落ち着いたタイミングで次の行動を促したり、なぜ今できないのかを伝えられている。</p>
<p>短期目標</p>	
<p>気持ちを切り替えて給食を食べる</p>	

〈気になる子ミーティングにて出た対応案〉本児の様子を踏まえて網掛けの案を試してみた

- ① 食べ始める前に「増やしたい」と教えてくれる時があるようだが完食してからおかわりにしてみる。
- ② ごちそうさまに間に合ったらご褒美シールを貼れるようにしてみる。(ゴールがあるものだとより頑張る気持ちが高まるかも)
- ③ 給食中に疲れてしまう姿があったら、砂時計を利用して休憩時間を決めて休んでみる。
- ④ 本児専用の時計表を机に貼ってみる。(スケジュールが分かるように)

〈その後〉

- ① ➡「ピカピカになったらおかわりしようね」と伝え続けた。完食をしたらおかわりができるという成功体験を重ねることで理解して完食できるようになってきた。
- ④ ➡クラスの時計に『おかわり』『ごちそうさま』のイラストを表示し、見てわかるようにした。同じ表示を本児用の時計表と共に机に貼ると「あと少しでおかわり終わりの時間だね」「あと1分でごちそうさまだね」と意識して食べ進められるようになってきた。

【考察】

繰り返し行うことで身に付くという本児の力を把握し、根気強く伝え続けるという対応をしたこととおかわりすることが、ごちそうさまに間に合わないマイナスなことではないという意識に繋がって自信になったよう。また、終わりを見える化したことでしっかり理解したうえで取り組むことができ給食に対する意欲に繋がっていたよう。

事例4【気になる子：年長児】

現状	園での対応
<p>●年少児の頃は自分の思い通りに行かないことがあると大声を出して癩癩を起すこともあったが、年中に進級する頃には気持ちの成長もあり癩癩を起すことが大幅に減った。しかし、質問に対して的外れな答えを言ったり、会話が成り立たなかったりなど言葉を理解する力が乏しい様子があった。</p> <p>年長に進級すると、理解力不足が更に目立つようになり集団の中では周りを見て行動したりすることはできるが、個別にやることを聞いてみると理解していないことが多くある。</p>	<p>個別に話す際は本児が理解しやすいように言葉を区切って話をする。</p> <p>自分で考えて答えた場面では、本児の気持ちを受け止めつつ褒め、自信に繋がるようにする。</p>
<p>短期目標</p>	
<p>保育者の話を注目して聞く (言葉の意味を理解して)</p>	

〈気になる子ミーティングにて出た対応案〉小学校進学を見据えて網掛けの案を試してみた

- ① どこまで理解しているのかを把握する
- ② 全体に話をした後、個別に言葉を砕いて分かりやすいように伝える
- ③ 端的な言葉で伝える(1つ目は○○、2つ目は○○)
- ④ 個別から小集団へステップアップして声を掛けてみる
(○月生まれの人、○○小学校へ行く人、男の子…など)

〈その後〉

常に自分のこととして話を聞く意識を持てるように「今日は誕生日が同じお友だちから呼ぶね」等と事前に伝え考える時間を設けてから問いかけることを心がけてみた。小集団で声を掛けることによって自分のことを理解しようとする意識が芽生え、○月生まれや年齢などをスムーズに言えるようになった。また、「△君○月うまれなの？ぼくといっしょだね！」と自分が理解したことで友だちと会話を楽しむ姿が見られてきた。

【考察】

年少時から気になる姿があり、その都度本児の様子からどのような関わりが良いかを探ってきた。来年の進学を見据えた関わりを心掛けたことで理解するという面において成長を感じることができた。本児が楽しみながら生活したことで、自分のことや話の内容を理解しようとする意識の芽生えが育まれたのだと思う。今後の園生活、そして学校生活において本児の力になることを願う。

〈成果と今後の課題〉

子どもたちの日々の遊びをよく観察し、どんなことを考えているのかな、どんな環境を必要としているのかなとアンテナを張り子ども達を見取る目をしっかり開いて関わることで遊びの深まりや広がりが無限大になっていくことを感じた。遊びのミーティングにおいて様々な視点からアイデアを出し合ったことで自分では気づけなかった子どもの気持ちに気づけたり、環境の工夫をすることができ、「それいいね!」「やってみたい!」と保育者同士でワクワクしながら話し合いをすることができた。自分たちが楽しむことが子どもたちの楽しいを作るきっかけになるのだと改めて気づくことができた。今後も大人が目線が介入しすぎないように、子ども達と一緒に楽しみながら保育をしていくことを心掛けながら、保育者同士の語り合いを大切にしていきたい。

気になる子・特性を持った子についても、保育者間のアイデアを基にその子の生活が心地よいものとなるようにする環境を整えることができたように思う。その反面環境を整えることで精いっぱいになってしまう場面も多々あった。その子の良さ、その子らしさを大切にしながら一緒に楽しさを生み出す伴走者となれるよう今後も子ども理解に努めていきたい。

保育実践研究

一人ひとりの「こどもがまんなか」をまもる質の高い幼児教育を

～社会全体でつむぎ未来へつなぐために～

学校法人平和学園

新庄幼稚園認定こども園

教諭 畠腹 玲奈／上野 美由紀

研究主題 心動かされるワクワク・ドキドキの経験を通して地域社会とのつながりを育む
～新庄という地域における人と文化との出会いを大切に～

1. 主題設定理由（ねらい）

幼児期から自分たちが暮らす地域に目を向け、そこに住む人々の思いや歴史、日常に触れることは、社会とのつながりが実感出来ると考える。本園の子どもたちは、年少・年中期より地域にとって伝統的な夏祭りである「新庄祭り」に親しみをもち、ごっこ遊びと言うとお祭りで沿道に立ち並ぶ出店ごっこが始まるほど、祭りを楽しみにする姿が多く見られてきた。年長児となった今、これまでの「楽しい」「また見たい」と感じてきた経験を出発点に、新庄の地域や文化についてさらに関心を広げ、「新庄っていい町」「新庄大好き」という思いを持って欲しい。そこで、年長児を対象に自分の住んでいる「新庄市」の魅力や特色に触れることで、愛着を育む一助につながってくればという考えのもと、本研究に取り組むことにした。

2. 研究の方法

年長児の1年を通しての研究テーマ 「GoGo！ゆり組探検隊！ ～ディスカバー新庄～」

(1)新庄祭りを題材とした製作活動

新庄祭りについて話し合いながら、山車や装飾などを製作し、祭りの特色や地域文化に親しむ。

(2)新庄市内の施設見学

新庄市内の公共施設や地域の施設を訪れ、新庄の歴史や地域の役割について知る。

(3)年間を通した継続的な取り組み

1年を通して地域を知る活動を行い、子どもたちの気付きや興味関心の広がりを見取りながら保育を進める。

3. 研究内容

保育実践① 「新庄祭りをもっと知ろう！」

〈内容〉

幼い頃からお囃子の音を聞いて育ち、地元の祭りである『新庄祭り』が大好きな子どもたち。も

ともとは夏祭りであるものの1年を通して、お祭りごっこや、お囃子ごっこが流行するほど、親しみのあるお祭りである。新庄祭りと言えばダイナミックな山車の競演なのだが「山車を作りたい！」という声上がるものの、空き箱を組み合わせた山車に見立てた物を、ひっぱるだけの遊びになってしまっていた。山車を作りたいものの、作り方が分からない子どもたちの助けになればと山車が展示されている「新庄ふるさと歴史センター」を訪問した。その後、より新庄祭りを知れるよう、年長時に毎年お楽しみ行事のサマースクールで「山車作り」を取り組んでみることにした。

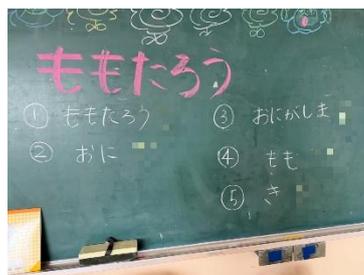
以下の活動の流れ

時期	子どもの様子・活動	実際の取り組み場面
6月	<ul style="list-style-type: none"> 活動はまだ始まっていないが、少しずつ新庄祭りごっこが流行し始める。 園にある法被を着用し、保育者が製作した太鼓を叩いてお囃子を楽しむ姿が見られる。 	 
7/2	<ul style="list-style-type: none"> 定期的に行っている子ども会議の話題として、新庄祭りはどんなお祭りなのか意見を出し合い、全員で知り、学ぶ時間を設ける。 <p>お祭りと言えば、お客さん、見物人という話から、サマースクールの時にお家の人に見せようの意見がでる。</p> <ul style="list-style-type: none"> サマースクール(7/26)までに山車を完成させ、当日は「ゆり組新庄祭り」を開催しよう！と目標が決定し、嬉しそうな様子が見られた。 	 <p>「おうちの人を喜ばせられるよう頑張ろう！」</p> 
7/7	<ul style="list-style-type: none"> 「山車ってどうなってるの?」「どう作ればいいのか?」という疑問から、実物の山車を見学に行く。新庄駅に展示されてある山車を見ながら、「何の素材が使われているのか」や「何が飾られているのか」などを間近で観察し、目に焼き付けていた子どもたちであった。実際に見ることで、よりイメージが膨らませることができた。 	<p>「お花大きいね」 「お花紙かな?」 「幼稚園のお花紙で作れるかな?」</p>  <p>「人形はどうやってとめているのかな?」</p> 

7/8

●山車制作スタート

① 題材は「ももたろう」に決定し、自分が山車のどの部分を作りたいかを、全員で話し合う時間を設けた。(桃太郎・桃・鬼・木・山の5つの中より)



7/9

②和紙貼り

・新庄祭りの人形作りには和紙が使われていることを知り、めったに使わない和紙に触れながら製作を行った。「やってみたい!」という声が意欲的に聞こえ、保育者が指示するのではなく、まずは自分たちで工夫して貼る。実際に触れたことで、山車作りの難しさを痛感した子どもたちであった。

「たくさんの糊を使っているんだね」
「ここは丸く丁寧に貼ってみよう・・・」
「難しい～!!」



7/11

③色付け

・絵の具を使い、それぞれのイメージをもって人形に色付けを行った。仕上げにニス塗ることで本物により一層近づいた。
・イメージの色を共有したり、相談したりしながら、協力して進める姿があった。



「桃はピンクにしよう!」
「Aくん、こっち側塗ってくれる?」

「山は塗るところいっぱいあるから、協力して頑張りよう!」



7/15

④飾り付け、最終仕上げ

・お花や、垂れ幕、若連の文字を作り上げ、最後までクラス全員で協力してやり遂げた。
・お互いの役割を大切に、共に作り上げる楽しさを感じているようだった。



7/17	<p>★「お囃子も作ってみたい！」と声が上がリ、自分たちで廃材を集め、笛や鐘など祭りに欠かせない楽器を工夫して作る姿があった。</p>	
7/26	<p>【サマースクール当日】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保護者を招き、子どもたちが作り上げたお祭りパレードを披露する。 ・子どもたちは「山車引き」と、「お囃子演奏」に分かれ、保護者の前で堂々と山車を披露する姿が見られた。 ・最後に全員で「新庄市民歌」を歌い、山車のパレードは大成功に終わった。新庄市民としての誇りと、達成感に溢れていた子どもたちの姿があった。 	 <p>「お祭りできて楽しかった」「見てもらえてよかったね」「本当のお祭りも楽しみだね！」</p>
8月 下旬	<p>⑤山車解体 本物同様、お祭りが終わった後の解体作業にも取り組んだ。 一生懸命に作り上げたからこそ、解体も心を込めて臨む姿があった。</p>	 <p>「ありがとう～人形たち♡」</p>
11月	<p>★新庄の名所やご当地キャラクターなどを子ども達と一緒に覚えながら、共同制作を行った。新庄市に住み、大好きな街を囲む子どもたちをイメージし、1つの作品として完成させた。 →新庄市で行われる「最上学童展」に出展し、ゆめりあ（新庄駅）に展示し沢山の方に見ていただいた。</p>	

〈考察〉

新庄祭りを題材とした活動を通して、年長児は地域の文化を身近に感じながら主体的に関わる姿を見せた。山車、人形作りなど、和紙で形を作り、絵の具で色付けをする工程を重ねる中で、「本物みたいになりたい」「ここは赤がいい」など、自分なりのイメージをもって活動する姿が多く見られた。また、友だちと意見を出し合いながら製作を進めることで、協力する姿や相手の考えを受け止める姿も見られた。このような活動は、年少・中期から親しんできた新庄祭りの経験を土台とし、年長児の発達段階に応じて「作る」「表現する」活動へと展開させたことで、より深い

地域理解に繋がったと考えられる。山車作りを通して、新庄祭りが自分たちの生活と結びついたものとして捉えられ、地域への親しみや愛着が一層深まった。

〈課題〉

活動内容によっては祭りの一部に関心が集中し、歴史や背景までは十分に理解することが難しい場面も見られた。今後は、製作活動だけでなく、地域の方の話を聞く機会や、写真・資料を活用した活動を取り入れることで、より理解を深めていけるのではないかと考えた。

保育実践② 「新庄ってどんなところ？」

〈内容〉

新庄市に住む子どもたちだが、新庄市の施設への関心は薄く、この土地の良さを知る機会になれば自分たちの学びも含め、市内にある施設を出し合い、実際に施設を訪れ、そこで働く人との関わりを通して新庄の歴史や地域の特色について知ることにした。実際に行くことによって、「新庄っていい町」「新庄大好き」という思いや地域への関心を深めていけるようにと計画してみることにした。

【5月下旬】

『新庄ふるさと歴史センター』へ

→新庄祭りの山車展示や、地域の歴史資料を見た事で、子どもたちはもちろん、保育者も新庄の歴史文化や暮らしの移り変わりについて具体的に学ぶ機会を得た。実際に使われていた昔の農機具や、暮らし方等 展示品を通して新庄での暮らし方へのイメージが膨らみ、「こうやって使ってたんじゃない?」「どうやって作ったんだろう」と興味を持ってくれた。もともとは、山車作りの意欲につながってくればとの思いで歴史センターを訪れたが、雪国新庄での昔の暮らしを知る機会となった。

【7月上旬】

『新庄駅内のゆめりあ鉄道ギャラリー』へ

→新庄駅は3つの路線が交わる鉄道の要所であることを知り、目の前にある鉄道のジオラマにも興味津々の子どもたちであった。実際に入ったことがある子もいれば、初めて入った子も多くいた為、新庄にある施設の1つとして覚えるきっかけにもなった。

【11月下旬】

『雪の里情報館』（新庄市の地域歴史博物館）へ

→雪に関する展示や、雪国の暮らし等の歴史資料に触れ、子どもたちは新庄が「雪のふるさと」であることを具体的に知る機会となった。情報としては少し難しい部分もあったが、体験型の展示物やクイズもあり、20~30分ほどの見学も、しっかりと興味を持てた子どもたちであった。



「昔はこんなに寒かったんだね」



「新庄方言カルタ」
新庄弁もなかなか味わいあるっちゃ!



「昔の新庄はこんなに雪が積もったんだね!」

～今後の予定と保育者の願い～

【1月下旬】

『東北農林専門職大学』へ

→新庄のまちが「農業」「林業」「畜産」などと深い関係にあることを知り、地元に対する理解や、地域を支える大切な仕事であることを知る機会になってほしい。子どもたちにとっては難しいが、「こうした施設が新庄にもあるんだ！」という新たな発見や、興味関心に結びついていければと思う。

【2月上旬】

『進学予定の小学校見学』へ

→小学校を見学することにより、進学後の生活に安心感と期待をもてるようになってほしいという願いと、子どもたちは「新庄市で育つ子ども」としての意識を高め、地域への親しみも持つきっかけとなってほしい。

〈考察〉

新庄市内の公共施設を見学したことで、子どもたちは自分たちの住んでいる地域には、生活を支える様々な施設や人々がいることに気付く姿が見られた。これまで行事や遊びを通して親しんできた新庄のまちを、公共施設という視点から捉えることで、地域への関心が具体的で深いものとなった。また、新たな発見を友だちや、家族と共有し、子どもたちは自分たちなりに新庄の良さを学び、地域と自分とのつながりを意識する姿が見られた。

〈課題〉

今回の公共施設見学では、施設の説明を受けることが中心となった為、子どもたち一人一人が疑問をもったり、深く調べたりする時間が十分とは言えなかった。今後は、事前に「どんな場所だと思うか」「何を知りたいか」を子どもたちと話し合い、目的意識をもって見学に臨めるようにすることが課題である。また、見学後に得た学びを継続的な遊びや活動へとつなげる工夫を行っていきたい。

〈全体のまとめ〉

本研究では、年長児を対象に新庄祭りをはじめ、新庄市内の公共施設見学を通して、自分たちの住んでいる新庄について知り、「地域とつながる学び」を進めてきた。新庄祭りの山車を実際に作り上げる体験では、地域の伝統や文化への関心が高まり、「新庄のお祭り」＝「自分たちの祭り」という意識が育まれた。

また、施設見学を通して、「新庄はこんなに素敵な町だったんだ！」という気付きや、人々の暮らしを支えるさまざまな施設や役割、多くの人によって地域が成り立っていることを知る機会になった。これらの活動を年間を通して継続的に行ったことで、子どもたちは新庄への親しみを深めるきっかけにつながったと感じる。地域を知る学びを積み重ねることは、子どもたちが自分の生活と社会の結びつきを感じ、社会の一員であると言う意識と学ぶ意欲につながっていくための大切な土台になっていくと考える。

今後は、地域を知る学びを行事や見学だけにとどめるのではなく、遊びや生活の中へ意識的に取り入れていきたい。例えば、子どもたちの「なぜ」「もっと知りたい」という声をきっかけに、子どもたち同士で「調べてみたい！」と思える活動や、自由に表現できる活動へと発展させていくことで、より主体的な学びにつながっていく。また、地域の人々との関わりをさらに深め、実際に話を聞いたり、共に活動したりする機会を設けることで、『新庄』という地域がより好きになり、より身近に感じられる保育を目指していきたい。幼児には難しい内容だったかと思う場面もあったが、まずは体験してみる事を第一に今後も色々な方向から取り組んでいきたい。

保育実践研究

一人ひとりの「こどもがまんなか」をまもる質の高い幼児教育を

～社会全体でつむぎ未来へつなぐために～

学校法人鶴岡城南学園 城南幼保園

保育教諭 齋藤 圭子

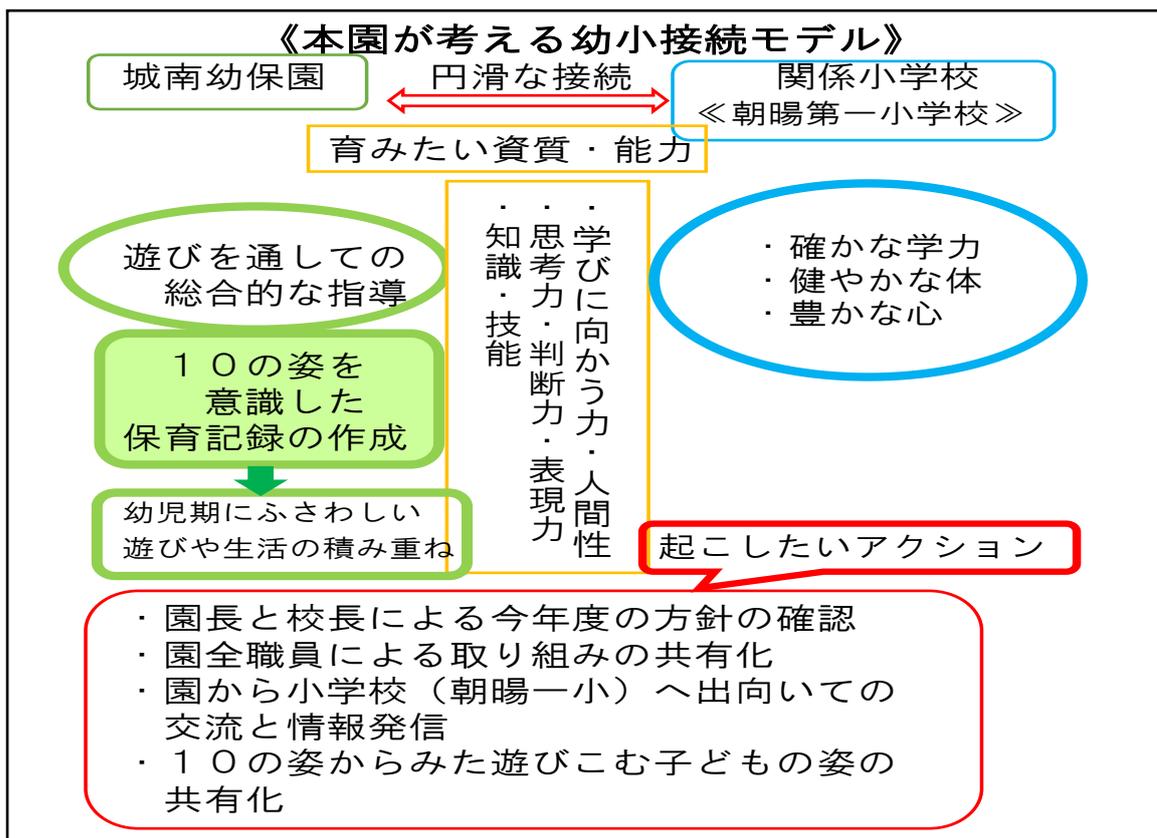
研究主題 一人ひとりの「こどもがまんなか」をまもる質の高い幼児教育を
～社会全体でつむぎ未来へつなぐために～

1. 主題設定理由（ねらい）

本園では昨年度より『遊びこむ子どもを育てる』を教育目標に掲げ日々の教育・保育を営んでいる。そのためには、子どもの育ちや記録を大切に、子ども一人ひとりが『もっとやりたい』と思えるような環境づくりに職員集団で力を入れている。具体的な子ども像は次の4つを設定している。

1. 「もっとこうしたい」と意欲的に遊ぶ子
2. 自分の思いや考えを伝え合える子
3. 人とのかかわりを楽しみながら遊ぶ子
4. 思いやりをもって遊べる子

特に今年度は『主体性』と『思いやり』を育てる保育を心がけながら幼児教育と小学校教育の円滑な接続に向けた取り組みを進めている。文部科学省がいうスタートカリキュラムをもとに本園が考えた接続モデルが次である。幼児教育側も小学校教育側もそれぞれの質を高めながら、架け橋プログラムを進めるといふ共通の目的に向かって、未来へとつながるようにとの願いを込めての接続モデルである。



2. 研究方法

前図に示した幼小の共通の柱立てとなっている『育みたい資質・能力』を実現させるために本園では次の3点を実践の土俵としてきた。

○遊びを通した総合的な保育を組み立てる

○幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿を意識した環境構成を構築するために、具体的な保育記録をとる

○保育記録を自分で振り返ると共に、他の保育者の保育記録を読んで自分の保育の参考とする

その上で、幼保園での経験が小学校以降に繋がる学びの基礎となり、滑らかな接続となるよう、子どもの姿をまんなかに据えた保育を心がけている。

3. 職員間で共有したこと

《共有1》

保育記録をとることの有効性

その1. 子どもをみる見方が変わる。

その2. あの子この子は何に興味があるのかが見えてくる。結果、子どもたちの今に気付いたり、考えたりする時間が増えてきた。

《共有2》

他クラスの保育記録を毎月見合う機会を設けることの有効性

その1. 他の保育者の保育記録を読み、感じることで自分の見方との違いや援助方法、その保育者の保育観に触れることができた。

その2. 結果、自分の保育に生かしたり、学びにつなげたりできるようになってきた。

《共有3》

自分の保育記録を分析することの有効性

その1. 学期に一度、自分の保育記録を分析することでその時の保育について自分なりの考えを主張し、課題を見出すことができた。

その2. 発表し意見や感想をいただくことで次の学期からの取り組みをイメージすることができた。

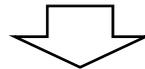
4. 具体的な取り組み

- ① これまでの保育記録の様式を見直し、幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿を意識しながら記録できるようにする。

【以前の保育記録の様式】

保育記録 昨年度までの様式

		月 日 () 天気	月 日 () 天気	月 日 () 天気
欠席者				
反省・考察				
幼児の姿 ● 保育の記録 ● 思い ● 願い ●				



【新しい保育記録の様式】

保育記録 今年度からの新しい様式

		月 日 () 天気	月 日 () 天気	月 日 () 天気
欠席者				
反省・考察	<div style="border: 1px solid yellow; border-radius: 50%; padding: 10px; display: inline-block;"> 10の姿を意識できるように… </div>			
10の姿 ア・健康な心と体（健康） イ・自立心（人間関係） ウ・協同性（人間関係） エ・道徳性・規範意識の芽生え（人間関係）	オ・社会生活との関わり（人間関係） カ・思考力の芽生え（環境） キ・自然との関わり・生命尊重（環境）	ク・数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚（環境） ケ・言葉による伝え合い（言葉） コ・豊かな感性と表現（表現）		
幼児の姿 ● 保育の記録 ● 思い ● 願い ●	<div style="border: 1px solid black; border-radius: 50%; padding: 20px; display: inline-block; width: 80%;"> 具体的な幼児の姿と 10の姿をリンクさせた 記録に変えました </div>			

- ② 教育目標『遊びこお子どもを育てる』の具現化に向け、子どもの事実に基づいた育ちの記録を大事にし、子ども一人ひとりが『もっとやりたい』と思えるような環境づくりを工夫する。

【実践例：魚釣りごっこ】

年中組 6月

※表中二重線は環境づくりへの配慮点

・ 幼児の姿	★保育者の援助 ♡保育者の思い、願い
<ul style="list-style-type: none"> ・「釣れた釣れた！大きい釣れた！」とリールを巻きあげ、魚釣りをしている仕草をして楽しんでいたT男。 ・T男「釣り竿作って一緒に魚釣りしよう」 ・竿やリールのイメージを細かく保育者に伝えるT男。 ・周囲にいた子たちも関心を示し、集まってきた。T男と一緒に作り始める。 ・大勢で「釣れた釣れた！」とエア魚釣りを楽しむ。 <p style="text-align: center;">10の姿：ケ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ♡★エア魚釣り楽しそう。家庭で魚釣りを経験したのかな。保育者も魚釣りをした時の話をし、盛り上がる。 ★釣り竿作りに使えそうな素材を用意。Tから出されるイメージを受け、一緒に作る。 ♡周囲も関心を示してきた。みんなでイメージを出し合い、大勢で楽しめたらいいな。 ♡★魚や生き物も作って楽しめるといいなと思いつつ、釣り竿作りに夢中の子が多かったため、<u>魚の写真を用意し、釣ることを楽しめるようにした。</u> ♡ナイスアイデア！ ★R子の思いを聞き、必要な用具を準備したり、一緒に描いて楽しむ。
<p>(次の日)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・手作りの魚と写真の魚、両方での魚釣りで盛り上がる。 ・S男「海があればいいんじゃない？」 ・S男「あ～いいね～」とブルーシートを自分たちで広げ、沢山の魚を並べ、再び魚釣りが盛り上がる。 ・海の中で泳ぐ真似をする子。その姿を見て周囲も参加し、「ザブーン」等と波を表現したり、「あ！魚がいた」と叫んだりする子もいる。 ・泳ぎながら作った竿の棒部分で魚を突く仕草をするT男。「先生、魚獲れた」と大喜び。 <p style="text-align: center;">10の姿：キ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ★<u>「いいね。魚って海の中にいるもんね。海っばいもの…」とブルーシートを用意。</u> <p style="text-align: center;">↓</p> <ul style="list-style-type: none"> ♡海ができたことで、子どもたちのイメージも広がった。海での様々な楽しみ方が表現されている。面白い姿！
<p>(数日後)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・S男「海って、タコとかクラゲとかもいるよね」 ・T男「あ～いるいる。じゃあ作ろう」 ・K男「赤い袋で赤いタコできるじゃん」そこから立体的な海の生き物作りが始まった。 ・写真の魚、絵の魚、立体的な生き物、様々な釣りを楽しんでいる。 ・T男「タコって釣り竿じゃなくて網で捕まえたらいいんじゃない？先生、一緒に網作ろう」 ・魚釣り、モリ突き、網、海水浴等シートの上では様々な楽しみ方が盛り上がっていた。 	<ul style="list-style-type: none"> ♡★T男はきっとモリで突く真似をしているのだろう。テレビ等で見たことを表しているのだろう。「すごーい。おめでとう」モリ突きで獲れたことを一緒に喜ぶ。 ♡まだまだ続きそう。ここからどんな風に広がっていくのかな。 ♡釣り方や遊び方が上手くなってきていることを感じる。友だちとやりとりしながら楽しんでいるなあ。 ♡★<u>立体的な形をイメージすることはできているが、それをどう表現、何を用いたらいいかを自分たちで考えるところはまだ難しい。ちょっとずつアイデアやヒントを出して導いていこう。</u> ♡立体的な生き物が仲間入りしたことでさらに盛り上がってきた。 ♡T男の仕草からここまでの遊びが広がった。ちょっとしたきっかけや願いを見逃さずかわり、子ども達と一緒に色んな楽しさ・遊びを見出していきたい。

③ 小学校への情報発信、交流活動

○小学校とはどういうところなのか自分の目で見たり、感じたりすることで期待や安心へ繋げ

ていきたい。

○幼保園生活で積み重ねた資質や能力を入学後も十分に発揮できるよう学校側と幼保園側で連携を図り、『遊び』を『学び』に繋げていきたい。という願いのもと、年度始めに朝暘第一小学校校長と本園園長とで話し合いの機会を設け、交流のプログラムを計画し、実践している。

【具体的な訪問時の写真】 (昨年度より)

《秋の実践》

小学校のグラウンドで遊ぼう！

学校のグラウンドって
すごく広いね

評価

小学校の学区内にある保育園の年長組の園児と共に活動したことによって交流の輪が広がったことと小学校への期待感がさらに高まった。



〈朝暘一小グラウンドにて〉

《冬の実践》



〈一年生の授業参観にて〉

こうやって勉強するんだあ。
早く1年生になりたいな！

評価

2ヶ月後にはこの教室で生活するんだという見通しは着実に持てた。

《交流のプログラム》

鶴岡市立朝陽第一小学校
校長 小澤 敏一 様

令和7年4月1日

幼保連携型認定こども園
城南幼保園長 本田 淳
(公印省略)

常念寺保育園・城南幼保園→朝陽一小「かけはしプログラム」 タイムスケジュールに基づく交流受け入れのお願いについて

本園に通う子ども達の成長と学びが滑らかに接続することを願い、標記の件について下記のように計画いたしました。つきましては、よろしくお取り計らいくださいますようお願い申し上げます。

記

1 願い（目的）

- 来年4月の小学校入学に向け、小学校とはどういうところなのかを自分の目で見たり感じたりすることで一人一人の子へ見通しを持たせたい。
- 入学当初のつまづきを回避し、小学校生活への移行が滑らかな接続になるよう自信をもたせたい。
- 保育園・幼稚園生活で積み重ねたことや力を入学後も十分に発揮できるよう学校側と幼児教育施設側で連携を図ることで「遊び」を「学び」につなげていきたい。

2 具体的なプログラム

7月9日（水）10:50～11:20 「1年生の水泳学習を見に行こう」

1) 9月中旬 「学校のグラウンドで走ってみよう!」（運動会に向けて）
グラウンドの空いている時、時間は45分間。
副園長から教頭先生へ連絡がいきますので、調整願います。

2) 秋口 「1年生の体育を見に行こう!」
昨年度年長のお兄さん、お姉さんのがんばる姿を見て、来年度への見通しをもつ。

3) 12月 「学校の体育館で遊ぼう!」
空いた時間に1単位時間使わせていただければ幸いです。

4) 2月 「学校探検をしよう!」・・・入学期に向け、1年生の授業も覗かせていただければ幸いです。

※ 計画はあくまでも計画であって中止もあり得ます。

3 その他

- 詳細については、副園長から貴校教頭先生へご連絡いたします。その上で調整させていただきます。本交流の窓口は城南幼保園が行います。
- 不明な点は右記へ連絡願います。

24-7164 城南幼保園

5. 詳細な実践事例

テーマ：『幼保園最後の夏まつりに向けての具体的なイメージをもち、

実現に向けての期待感を高めよう!』

実践日：令和6年6月25日

年中組の時の夏まつりでの体験を想起し、今の姿をありのままに捉え、何に関心を示すのか、どのような意欲を示すのか、幼児の発達を見通しながら、育ちへの願いを意図的に環境や援助に取り入れた。

当日の活動案は幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿の『協同性・ウ』と『言葉による話し合い・ケ』を意識して組み立てた。教育・保育要領には10の姿の説明が記されてあるが、それを保育者が自分なりに言語化した活動案となっている。

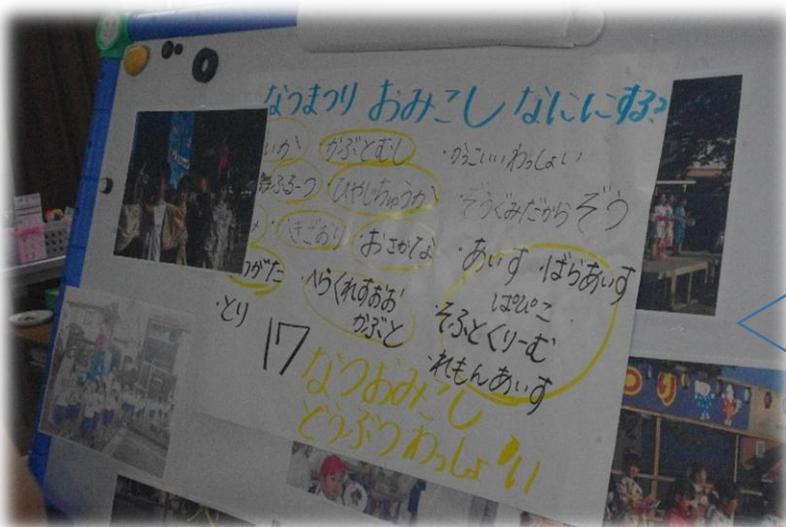
◎発問 **今年はどんなおみこしを作ろうか**

一人ひとりが
自分の意見を伝え
たく手を挙げているところ
I Oの姿
『言葉での伝え合い』



自分たちの考えたことがどう変化し、まとめ、クラス皆のものになっていくかを見て分かるように出された意見や考えをホワイトボードに書き出した。

これがステーションとなり、いつもここに立ち返って活動に向かっていけるといいな。



◎発問 **みんなの考えを『エアおみこし』で担いでみよう**

評価

出し合った意見がまとめ、最後は自分たちが考えたおみこしを想像して『エアおみこし』を担ぎ、楽しみ、当日への期待へとつながった。



わっしょい！
わっしょい！

こんなおみこし
いいんじゃない？

《自評・所感》

当日の活動では、昨年度の夏まつりの様子を写真や盆踊りで思い出し、だったら今年の夏まつりではどんなおみこしを作ろうかと一人ひとりが意見や思いを伝え合った。終始、大盛り上がり話し合い。最後は自分たちの意見がまとまって本番を想像しながらおみこしごっこをして楽しんだ。

言葉による伝え合いが上手くできるようになったこの時期、それに加え、前の週にクラスでの大きな行事を体験したこともあり、クラス皆で力や気持ちを合わせるとこんなに面白いのかという思いを実感した姿がみられた。

保育者として、子どもは遊びこむ活動を通して、沢山の学びを獲得していく。だからなおさら、より遊び込めるような環境づくりを工夫していくことの大切さを学んだ。

6. まとめ

その1. 保育記録を変えたことで、子どものありのままの姿を受け止めることができるようになった。そして、あの子・この子が今、何に興味を持っているのか？遊びこめるようにするにはどんな環境、かかわりが必要なのかを考えるきっかけづくりになっていることをさらに感じている。その上で、小学校への接続に向け、年長児ではどのような力や姿を育てていきたいかというところに焦点をあて、保育者自身や保育者間で考え、実践しているところである。

その2. 園の特色やこれまでの保育を生かした円滑な接続に向けての取り組みが大事であると感じる。今年度、鶴岡市では架け橋プログラムのフェーズⅡの段階へと進んでいる。小学校と園とで互いの現状や取り組みを理解しながら、園の取り組みとしてどう先に進めていけるかを見極めていきたい。

保育実践研究

一人ひとりの「こどもがまんなか」をまもる質の高い幼児教育を

～社会全体でつむぎ未来へつなぐために～

学校法人アテネ学園 アテネ認定こども園

教頭 小松 知良子

研究主題 楽しいね、またやりたいね。

～子どもの主体性によりそった保育教諭のかかわり～

1. 主題設定理由（ねらい）

本園では、令和6年度 第31回 山形県私立幼稚園・認定こども園教員研修大会『酒田大会』の大会主題を受けて、分科会テーマを【楽しいね、またやりたいね。～子どもの主体性によりそった保育教諭のかかわり～】とし研究を進めてきた。令和7年度も引き続き、この分科会テーマにそった園内研修をおこなうことで、より理解を深めていきたいと考えた。

子ども達は、生活や遊びの中で『やってみたいこと』や『知りたいこと』を見つけて自ら興味をもってかかわることで、充実感や満足感を味わうと考える。その充実感や満足感は、「楽しいね。」「またやりたいね。」という子ども達の言葉から伝わってくる。この言葉が聞かれるような活動を展開していくにはどうしたらいいのかを探っていきたいと考えた。また、自分の意思で行動が決定できる力が養われるような支援が求められる。そのためには、自らかかわりたくなり、自ら考えて行動できるようになるための保育教諭のかかわり方や環境構成のあり方を探っていきたいと考えた。令和6年度の研修を活かしながら研究を進める。

2. 研究方法

令和6年度に引き続き、以下のことについて学んでいく。

- 子ども達がどんなことに興味や関心をもち、やってみたい・知りたいと意欲がわくのか、理解を深めていく。
- 子ども達がまたやりたいと思える環境構成のあり方を探っていく。
- 子ども達が活動している場面での、保育教諭の言葉のかけ方やかかわり方を考える。

3. 研究内容

- ・子ども達が、今、興味をもっていることややりたいことは何かを育ちをふまえて理解していく。
- ・子ども達が伸び伸びと好きな遊びが楽しめ、そして、またやりたいと思える環境とはどんな環境なのかを考えていく。
- ・子ども達への声のかけ方は適切だったか、かかわり方は丁寧だったか、を基本に一人ひとりにあった言葉かけやかかわり方を考えていく。

【事例1】

3歳児 年少 ほし組

5月9日(金)～5月15日(木)

<傘袋で作った電車で、電車ごっこ>

年少組では普段の製作活動で、紙をちぎったり丸めたりした時の音や感触を楽しんだり、ちぎったり丸めたりすることによって変化するいろいろな形を見て楽しんだりしている様子がみられた。「ビリビリもっとしたいな～」の音が聞かれ、ちぎったり丸めたりしたものを活かして何かの活動につなげられないかと考えた。また、ゴールデンウィークあけということで、休み中に出かけた話や乗り物にのった話を保育教諭や友達としていた。「電車にのったんだよ。楽しかった。」「ぼくものりたいな～」という会話が聞かれたのをきっかけに、雨が降った時に使う傘袋にちぎったり丸めたりしたものをに入れて、傘袋を電車に見立てて、みんなで傘袋の電車ごっこを試みてはどうかと提案してみることにした。実際に作って完成すると、「電車にのってでかけた～い。」「わたしの電車、しゅっぱーつ。」と電車ごっこをする姿が見られ、みんなで傘袋電車に乗って園内探索に出かける活動へと広がった。



「どの色の電車にしようかな～」と考えながら、自分の好きな色の画用紙を選び、思い思いにちぎる。小さくちぎる子や大きくちぎる子などさまざま見られた。「見てー、こんな形ができた。」とやぶれた形を見て楽しんでいる子も見られた。

「ビリビリ楽しいね。」と繰り返し行う。今回はやぶった紙が、電車の色になるので「たくさんやぶっていいんだよ。」と声をかけるようにした。

画用紙とは違った感触の花紙も用意し、子ども達に「こんなやわらかい紙もあるよ。」と提示してみる。「ふわふわだね。」と興味をもち、丸めていた。やわらかい紙でちぎりにくそうにしている子もいたが、周りの友達が丸めているのを見て、自分も丸めていた。

紙によって、ちぎったり丸めたり工夫する姿がみられた。

あらかじめ切ったすずらんテープも準備し、使っていることを伝える。

傘袋に、ちぎった紙や丸めた紙を次々に入れていく。「きれいな電車になってきたよ。」「もっと赤い紙がほしいな。」「長い電車にしたい。」とどんどんイメージが膨らんできた。





傘袋の中がいっぱいになるまで、ちぎったり丸めたりできるように、教材を補充する。

友達の傘袋を見ながら、「わたしも〇〇ちゃんみたいにしたいんだけど…」という声が聞かれ、同じようにできるように個別に対応し、援助していく。

「電車に窓描きたいな。」の声から、マジックで描こうとするが、描いても触ると消えてしまうため、「シールではどうかな？」とシールを提示したところ、より電車らしくなった。

「できたよ。」と完成すると、さっそく自分の電車を手に持って走らせてみる。「長い電車がいいな。」「お友達の電車とつなげてみようかな。」との声から、傘袋電車を輪ゴムでつなげる。

「連結完了。」の合図で傘袋の電車ごっこがスタートした。



「長い電車になったね。」「みんなで電車でお出かけしたい。」との声が聞かれたので、保育室から廊下に出て園内探索をする。

「出発進行。」

「行ってきます。」

全員の傘袋が連結された電車は、思った以上に歩きにくく、連結部分の輪ゴムも外れやすく少しずつしか進むことができなかった。「進まないよ。」「電車が壊れた…。」「輪ゴムとれたよ。」「電車きつい。」などがっかりする声が聞かれた。



子ども達と話し合い、4つの電車に分かれることになった。「外にも行きたい。」ということになり、後日天気の良い日に、園庭探索をする活動になった。4つに分かれたことで、スピードの出る電車になった。「〇〇に行ってきます。」「電車、楽しいね。」「ガタンゴトン、ガタンゴトン。」「しゅっぱーつ、進行。」楽しい声が聞かれ、笑顔もたくさんみられた。

《考察》

- ・指先を上手に使い、ちぎったり丸めたりすることを満足するまで取り組むことができた。そのちぎったり丸めたりしたものを子ども達の興味のある活動につなげることができたことで、よりいっそうの満足感を味わうことができたように思う。
- ・いろいろな色の画用紙や花紙を提示したが、画用紙によってはちぎりづらいものがあったり、花紙はちぎりづらかったりしたが、一緒にちぎりやすい向きや大きさを考えたり、友達のしているところを見て丸めるのを真似したり、試行錯誤する活動も楽しく行うことができた。
- ・花紙やスズランテープの感触を「ふわふわだね。」「シャカシャカする。」と友達同士で伝えあったり、保育教諭に教えたりする姿がみられた。いろいろな素材に触れることで違いに気づき、その感触をみんなて共有することができた。
- ・電車を連結させる時に、連結部分を輪ゴムでとめたところ輪ゴムが外れやすく直しながらの活動になってしまった。また、全員の電車をつなげたため歩きにくく電車ごっこを継続することができなかった。子ども達とも話をして、後日、連結は輪ゴムを使用せず電車同士を直接結ぶように改良した。4つの電車に分けたことで子ども達も歩きやすくなり、園庭探索では自分たちの行きたい方向にスムーズに動くことができるようになり、より電車ごっこを楽しむことができた。
- ・子ども達の声や興味のあることを見逃さないように活動に取り入れていくことで、「またやりたいな。楽しいな。」という気持ちがみられたので、今後もこのような活動を大切にしていきたい。

【事例2】

4歳児 年中 さくら組

6月6日(金)

<新聞紙を使って何ができるかな?>

梅雨の時期、雨で外に出ることがなかなか出来ない日が続いていた。そのためホールで遊ぶが、湿気でジメジメしていて汗が滝のように流れている姿がみられていた。

そんなある日、外の天気が悪くとうとう雷が鳴りだし、子ども達が窓際で外を見ながら話をしていた。「雷なってる。怖いね。」「鬼(雷さま)からへソとられちゃう!」「ちゃんとおへソしまわなくちゃ。」「鬼が来ても豆を投げれば大丈夫!」と言って、さっそく置いてあった新聞紙で豆を作りはじめ、作った新聞紙の豆を投げて遊びはじめた。それを見ていた周りの友達も「ぼくも新聞紙で豆を作りたい。」と言って作りはじめ、クラスで豆づくりが始まった。

豆まきの行事の時に新聞紙で豆を作り鬼退治をするという経験から、今回の鬼(雷さま)を退治するためにも豆が必要となりこの活動がはじまった。子ども達にもっと新聞紙を使った遊びを提示し子ども達が経験することで新聞紙の遊びが広がるのではと考え、クラス活動で保育室散らかし放題の新聞紙遊びをすることにした。

実際にはじめると、子ども達の新聞紙を使った遊びがいくつもいくつも出てきてどんどん遊びが広がっていった。

新聞紙遊びがはじまるとさっそく洋服を作る女の子。洋服、帽子、スカートと作り「見て。」と着飾ると、それを見て周りの友達も作り出し、保育室がファッションショーの会場のように盛り上がった。

「どうやって作ったの？」
「かわいいね。」など友達同士で作り方を教えあったり作ったものを認めあったりしている姿がみられた。



新聞紙の記事に、お気に入りのキャラクターが載っているのを見つけて喜んでいる子もいる。



新聞紙を何枚も重ねて丸く大きくして、新聞ボールを作った。完成して投げて遊びはじめるが、投げたボールが友達に当たってしまいトラブルになる。大きいボールを投げて遊ぶには保育室がせまいため、どうしたら遊べるか相談する。話し合っって新聞ボールにゴムをつけてサンドバックのようにぶら下げて遊ぶことにした。遊び方を変更したことで、より子ども達が楽しめるようになった。

保育室に新聞紙が散らかりはじめる。「保育室が新聞のプールになったよ〜。」と新聞紙をかき集めながら泳ぐ子ども達の姿がみられた。「先生もっと新聞ちょうだいよ！」とまだまだ足りなかったようで、新聞を追加すると友達とプール大会がはじまった。



9月の運動会で輪投げをする競技があることから、輪っか作りをする子もいた。新聞紙の形を変え苦戦しながらもなんとか新聞を繋ぎ合わせて輪っかを作ることができた。輪投げができるように三角コーンを準備すると、運動会に向けて輪投げの練習がはじまった。作り方を覚えた子が友達にも作り方を教える姿がみられ、たくさんの輪ができた。



散らかった新聞紙を上にはじめたので、みんなで一斉に投げて写真を撮ることを提案すると、みんなで「せーの。」と掛け声をかける。みんなでタイミングを合わせるのはなかなか難しかったが、笑顔と一体感がうまれた。片付けも、自分がモップになり楽しんでた。

《考察》

- ・今回の新聞紙遊びは、外の天気を見ていた子ども達の会話がきっかけではじまり、さらにその遊びの中から子ども達がたくさんの発見をしたり、アイデアを出し合ったりしながら広がって、さまざまな姿が見られる活動となった。特に新聞紙を使っての洋服作りでは、子ども達から「こんな服できた。」「帽子作ったよ。」と次々に作品ができ、形をいろいろと変えて工夫して遊び込む姿がみられた。一人が作ると周りの友達も作り方を聞いて作る、という風にどんどん遊びが広がり、結果、みんなで楽しめる満足できる活動となった。
- ・今回は新聞紙をやぶったり、丸めたりすることが中心の活動だったが、マジックやはさみなども提示をしたら、色つけや装飾品作りなどもっと遊びが広がったのではないかと感じた。
- ・子ども達の一つの気づき・発見からどんどん遊びが広がり、そしてまた新しい遊びが生まれ、それを経験して成長していく。保育教諭がいかに子ども達の気づき・発見に目や耳を傾け、遊びの援助・アドバイスを継続していける環境作りをしていくかが大事だと感じた。

【事例3】

5歳児 年長 つばめ組

4月18日(金)

＜どんなところを切るとどんな形ができるかな～はさみの使い方の再確認～＞

年中組の後半から、空き箱を使っての製作活動を繰り返し楽しんできていた。年長組になっても引き続き、自分の遊びに必要なものを空き箱やテープ、はさみを使って作る姿が多く見られた。ただ、だんだん作っている際に、はさみの持ち方や切る時の手の使い方、片づけ方が乱暴だったり、危なかったりする場面が見られるようになってきた。またそれと同時に、切り方が上手になり、細かいところも切ることができるようになってきたと感じていた。

そこで、こいのぼり製作の時にはさみの使い方を子ども達と再確認することにした。こいのぼりのうろこ模様は、自分たちがはさみで切った折り紙を貼れるように『切り紙』を提示することにした。はじめての活動で、どこをどう切ったらどんな形ができるのかワクワクしながら切る所を考えながら作る姿がみられた。



最初に、いつもはさみをどうやって使っているか片付けているかを聞いてみる。

「キャップがあるからキャップから外して座って使ってるよ!」「しまう時はキャップするんだよ。」

「いつもキャップするの忘れちゃう。」「すぐに使いたいから立って使う時もある。」「友達にはさみを向けないようにしてる。」などの声が聞かれた。

どのようにはさみを使うのが安全なのか、時間をかけて子ども達と話し合いをした。必ずしまう時や使わない時はキャップをすること、座って使うこと、友達にはさみを向けないこと、など子ども達の意見を取り入れながらはさみの使い方の再確認をすることができた。

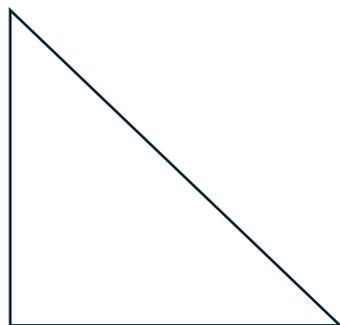
いよいよ楽しみにしていた、こいのぼり製作!

「こいのぼりは作ったけど、模様が足りないよね…。」「どうやって作るの?はさみ使って作る?」「折り紙がいい。」「早く作ろうよ!」と子ども達から早く作りたい気持ちが伝わってきた。

はさみと折り紙を使って作る『切り紙』を提示する。

はさみの使い方を再確認しながら行えるように、最初はあらかじめ折り紙を2回折って三角にした同じ形のを準備する。(図1)の形にえんぴつで切るところを書いておく。

(図1)

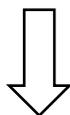


さっそく折り紙に書いてある線を切る。「切るとどんな形になるかな〜。」「どんな形だろうね。」とワクワクする子ども達の気持ちを大事にしながら、子ども達の様子を見守る。

「重なっているところ一緒に切るの難しいね。」「手を切らないようにしないとね。」「どんな形になるか楽しみだね。」と友達同士でもワクワクドキドキしながら製作する姿がみられた。



切り終わり、「一緒にせーので開いてみようよ。」





「わあ！！すごーい。」「おばけみたいじゃない？」
「雪の結晶みたいだね。」「いろんな形があって面白い。」
「先生もっと作りたい。」「違う色でも作ってみたい。」

子ども達の「もっとやりたい。」という気持ちを大切に、次はいろいろな色の折り紙を準備する。好きな色の折り紙を選び、折り方も自分で決めて、折った折り紙に自分で切りたい形をえんぴつで書くという活動にした。最初の経験を活かして、三角に折り、大きく模様を書く子、「四角に折るとどうなるのかな？」と違うことにチャレンジして模様も小さく何個も書く子、難しい模様を書いて切るのに悪戦苦闘する子、切って折り紙を開いてみたら切り落とされていてバラバラになってしまった子、などさまざまな姿がみられた。



子ども達は楽しくて何枚も集中して切り紙作りをしていた。できた模様を見せ合っていて、友達の様にも興味をもつ姿がみられたので、子どもたちの作品をこいのぼりに貼る前に、保育室に掲示し、みんなで見るができるようにした。「〇〇ちゃんのかわいい模様だね。どうやったの？」と聞いて真似をする子もいて、知識が広がっていった。



ビニール袋で作った大きなこいのぼりに、自分達で切って作った切り紙が貼られ「かわいい模様になったね。」と喜ぶ姿がみられた。

グループごとに写真撮影。

できたこいのぼりは、みんなが見えるところに飾り、大満足な活動となった。

《考察》

- ・『切り紙』は切って紙を開くまでどんな形になっているかわからず、切る時から子どもたちのワクワクした気持ちや、上手くできるかなというドキドキする気持ちが伝わってきていた。できた時は、「マジックのようだね。」ときれいな形に喜びの表情や嬉しい表情、満面の笑顔が見られ、みんなが楽しめる活動となった。
- ・その後の遊びの時間でも、折り紙を使ったり、白い紙を使ったりして子ども達同士でいろいろな形を切って遊ぶ姿が見られた。遊びが継続している姿と同時に、はさみの使い方も友達と確認しながら、きちんとルールを守って安全に使うことができていた。
- ・今後も楽しみながらたくさんのかんじを体験し、知識が積み重ねられるような活動を子ども達としていきたい。

4. まとめと今後の課題

- ・令和6年度から継続しての研修ということで、子ども達が興味をもっているものに保育教諭が気づくことができるようになってきた。そしてその気づきを、発達をふまえて活動に取り入れていけるようになってきた。子ども達から、「楽しかったね。またやりたいね。」という声が多く聞かれるようになってきて、笑顔も絶えない。保育教諭が、子ども達の声に耳を傾け、子ども達の興味に目を向け、子ども達に寄り添ったかかわりをするのが何よりも大切だということを学ぶことができた。
- ・子ども達への声のかけ方や寄り添ったかかわり方はまだまだ課題があり、本当にそれでよかったのだろうか振り返り、反省することもあった。全職員で、全国保育士会で作成している『保育所・認定こども園等における人権擁護のためのセルフチェックリスト～「子どもを尊重する保育」のために～』を読んで、自分の教育・保育の見直しも行うようにした。自分だけでなく周りから見てもどうなのかをみんなで確認できるいい機会となった。
- ・子ども達にとっての一番の環境は、保育教諭であり、その保育教諭自身が『楽しい。』と思えることこそが何よりだと感じることであった研修だった。保育教諭も日々学び、アップデートしていきたい。

〔参考・引用文献〕 保育所・認定こども園等における人権擁護のためのセルフチェックリスト
～「子どもを尊重する保育」のために～ 全国保育士会作成

第 3 編

教育研究活動
報告

令和7年度 山形県私立幼稚園・認定こども園教育研究会 部員一覧

	氏名	法人/役職名	園/職名	備考
--	----	--------	------	----

〔山形県私立幼稚園・認定こども園協会（教育研究委員会）〕

1	金沢 友治	学校法人金沢学園/理事長		担当副会長
2	後藤 裕美	学校法人富澤学園	東北文教大学付属幼稚園/教頭	委員長
3	岩月 真由美	学校法人善行寺学園	天童幼稚園/園長	副委員長
4	山口 由香	学校法人酒田幼稚園	認定こども園酒田第二幼稚園/園長	副委員長
5	木村 晃	学校法人木村学園/理事長	認定こども園長井めぐみ幼稚園/園長	
6	菅原 延昭	学校法人城南学園/理事長	認定こども園かしのみ幼稚園/園長	
7	菅原 覚	学校法人杉の子学園	認定こども園杉の子幼稚園/園長	
8	花輪 陽子	学校法人金井学園	認定こども園金井こども園/園長	
9	三吉 圭子	学校法人仙英学園	認定こども園ゆりかご幼稚園/園長	
10	渋谷 広美	学校法人高橋学園	認定こども園まつかわ幼稚園/教頭	
11	遠藤 誠	学校法人椎野学園	米沢中央幼稚園/園長	
12	本田 淳	学校法人鶴岡城南学園	城南幼保園/園長	

〔山形地区（山形市私立幼稚園・認定こども園協会）〕

13	阿部 美樹	学校法人富澤学園	東北文教大学付属幼稚園/教頭	
14	尾形 亜希子	学校法人菅藤学園	南山形幼稚園/主幹教諭	

〔村山地区（村山地区私立幼稚園・認定こども園協会）〕

15	舟山 真理	学校法人みくに学園	認定こども園天童みくに幼稚園/主幹教諭	
16	齋藤 明美	学校法人善行寺学園	天童幼稚園/主幹教諭	

〔米沢地区（米沢市私立幼稚園・認定こども園連合会）〕

17	五十嵐 真美	学校法人巨溪学園	普慈幼稚園/主幹教諭	
18	小口 美由紀	学校法人松原学園	幼保連携型認定こども園ひばりが丘幼稚園/指導保育教諭	

〔置賜地区（置賜地区私立幼稚園・認定こども園協会）〕

19	高橋 あずさ	学校法人青空学園	認定こども園つばめ幼稚園/教頭	
20	篠澤 彩瑛	学校法人青空学園	認定こども園つばめ幼稚園/保育教諭	

〔最上地区（最上地区私立幼稚園協会）〕

21	大澤 由美	学校法人平和学園	新庄幼稚園認定こども園/教務主任	
22	淀川 紀子	学校法人金沢学園	認定こども園金沢幼稚園/教頭	

〔鶴岡地区（鶴岡市私立幼稚園・認定こども園連合会）〕

23	小杉 隆	学校法人鶴岡学園	認定こども園鶴岡幼稚園/園長	
24	上野 真理	学校法人キリスト教若葉学園	認定こども園若葉幼稚園/教諭	

〔酒田地区（酒田地区私立幼稚園・認定こども園連合会）〕

25	齊藤 奈央	学校法人酒田幼稚園	認定こども園酒田第二幼稚園/教務主任	
26	田中 舞	学校法人天真林昌学園	認定こども園天真幼稚園/教諭	

〔紀要編集部（庄内・最上地区担当）〕

27	香澤 美紀	学校法人向陽学園	認定こども園向陽幼稚園/主任	
28	石川 温子	学校法人いなば学園	幼稚園型認定こども園いなば幼稚園/教諭	
29	高橋 智子	学校法人龍州学園	認定こども園若草幼稚園・若草ベビールーム/保育教諭	

令和7年度 教育研究委員会の活動記録

回	期日	主な内容
【委員会】		
1	5月23日	<ul style="list-style-type: none"> ・当年度事業の確認並びに担当者選定 ・第32回東北地区私立幼稚園設置者・園長研修会 山形大会（第1分科会）の持ち方について
2	7月28日	<ul style="list-style-type: none"> ・当年度事業の実施状況等確認 ・令和12年度以降の県教員研修大会の在り方について ・幼児教育・保育における課題の整理 ・親睦交流会
3	10月17日	<ul style="list-style-type: none"> ・次年度事業の企画立案について ・各種情報提供
【幼児教育連絡会】		
1	10月17日	<ul style="list-style-type: none"> ・山形県における幼児教育推進体制の構築に向けて ・意見（情報）交換 「幼児教育・保育を取り巻く今日的課題等」
【研究会】		
1	11月20日	<ul style="list-style-type: none"> ・令和7年度協会主催研修事業について ・研修スタンプ発行を希望する場合の手順について ・令和6・7年度教育研究課題について（情報提供） ・地区研究会活動における活動課題について（情報交換）
【紀要編集】		
1	1月～3月	<ul style="list-style-type: none"> ・令和7年度紀要の編集作業

令和7年度 研修事業実績

名称	期日	会場	内容	参加者
第1回設置者・園長等研修会	5月16日	山形ビッグウイング	内容 職員給与・人員配置の公表義務化について 講師 株式会社ゆびすいコンサルティング 中小企業診断士 本杉 祐也 氏	64名
第2回設置者・園長等研修会	6月13日	ホテルメトロポリタン山形	内容 リーダーの学びの重要性について考える 講師 全日本私立幼稚園連合会 副会長 内野 光裕 氏 (一財)全日本私立幼稚園幼児教育研究機構 理事長 安家 周一 氏 全日本私立幼稚園連合会 政策委員長 石田 義明 氏 (一財)全日本私立幼稚園幼児教育研究機構 専務理事 加藤 篤彦 氏 文部科学省初等中等教育局幼児教育課 幼児教育企画官 大類 由紀子 氏 こども家庭庁成育局成育基盤企画課併任保育政策課 教育・保育専門官 荒牧 美佐子 氏	71名
第3回設置者・園長等研修会	6月10日	山形テルサ	内容 評価の実施・公表、社会への発信 講師 学校法人ひじり学園 せんりひじり幼稚園ひじりにじいろ保育園 理事長・園長 (一財)全日本私立幼稚園幼児教育研究機構 副理事長 安達 譲 氏	31名
山形県幼児教育研修大会	11月5日	山形ビッグウイング	内容 AI共生時代にこそ必要となる次世代の育ち、教育、環境について考える 講師 京都大学大学院教育学研究科 教授 明和 政子 氏	63名
〈全般向け〉教職員研修会	8月5日	山形テルサ	内容 架け橋期の教育を考える 講師 東海大学児童教育学部児童教育学科 准教授 寶来 生志子 氏	49名
〈若手リーダー向け〉第1回教職員研修会	7月25日	山形ビッグウイング	内容 0・1・2歳児の子どもの理解 講師 社会福祉法人あけぼの事業福祉会 保育アドバイザー 大阪総合保育大学 非常勤講師 安家 尚子 氏	48名
〈若手リーダー向け〉第2回教職員研修会	9月8日	三川町子育て交流施設テオトル	内容 乳幼児の発達理解と保育 講師 秋田大学教育学部 教授 山名 裕子 氏	24名
〈中核・専門リーダー向け〉第1回教職員研修会	8月18日	山形ビッグウイング	内容 一人ひとりが安心して語りあえる対話型チームづくり 講師 学校法人小寺学園 幼保連携型認定こども園はま幼稚園 理事長 ECEQ@コーディネーター 秦 賢志 氏	63名
〈中核・専門リーダー向け〉第2回教職員研修会	10月22日	山形ビッグウイング	内容 自園の保育の評価(園内研修) 講師 一般財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構 教育研究委員 ECEQ@コーディネーター 丸谷 雄輔 氏	59名
保健衛生・安全対策研修会	5月26日	山形県私学会館	内容 健康的で安全な園生活の提供 講師 白梅学園大学 名誉教授、小児科医 小林 美由紀 氏	28名
食育研修会	6月23日	山形ビッグウイング	内容 子どもの食事と食育 講師 上越教育大学大学院学校教育研究科臨床・健康教育学系 教授 野口 孝則 氏	59名
新規採用・若手教職員等研修会	6月17日	山形ビッグウイング	内容 社会人としてのモラル・ルール・マナーを知る 講師 株式会社日本総合音楽研究所 常任理事 小松 明子 氏	42名
後継者養成講座	11月26日～29日	大阪府高槻市 同 豊中市 同 大阪市	内容 次世代リーダーのマネジメント(経営・組織管理) 視察 学校法人成城学園 認定こども園日吉幼稚園 学校法人ひじり学園 幼保連携型認定こども園せんりひじり幼稚園・ひじりにじいろ保育園 学校法人あけぼの学園 あけぼのほりえこども園	9名

令和7年度
山形県私立幼稚園・認定こども園協会 紀要
(第55号)

発行者 公益社団法人山形県私立幼稚園・認定こども園協会
山形市松波 4-6-11 (山形県私学会館内)

TEL 023-641-2323

編集 山形県私立幼稚園・認定こども園協会

発行日 令和8年3月